

「奥」空間の位置と性格に関する研究  
—神社建築を対象とした空間構造の分析を交えて—

平成 18 年 度

三重大学大学院工学研究科  
博士前期課程 建築学専攻

小 林 聡

平成 18 年度

修士論文

# 「奥」空間の位置と性格に関する研究

－ 神社建築を対象とした空間構造の分析を交えて －

A STUDY ON THE POSITION AND CHARACTER OF “OKU (INNERMOST)” SPACE

A discussion through the structural analysis on spatial composition of Japanese shrine architecture

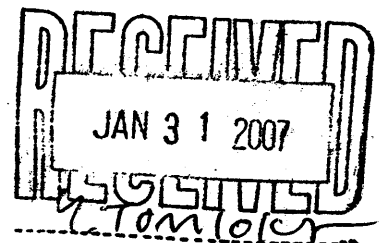


指導教員 富岡 義人 助教授

三重大学大学院工学研究科建築学専攻

小林 聡

三重大学大学院 工学研究科



RECEIVED FEB 14  
checked Feb 20 2007

## 第1章 序論

- 1.1 研究の目的
- 1.2 研究の背景
- 1.3 研究の方法
  - 1.3.1 研究の流れ
  - 1.3.2 研究の対象
  - 1.3.3 研究の基本的態度
  - 1.3.4 「奥」に関する建築書物と本研究の差異

## 第2章 「奥」空間の位置と性格

- 2.1 「奥」という語の位置付け
- 2.2 「奥」空間の位置
  - 2.2.1 「参照点」と「奥」空間の位置的な関係の整理
  - 2.2.2 「奥」空間の位置のまとめ
- 2.3 「奥」空間の性格
  - 2.3.1 「奥」空間の性格：包含関係にはないもの
    - ・より私的な場所・特定目的の場所
    - ・進入し難い場所
    - ・暗い場所
    - ・見えにくい場所
    - ・遙か遠くの場所
    - ・進行先（目線の先）の場所
  - 2.3.2 「奥」空間の性格：包含関係にあるもの
    - ・何かを隠す場所
    - ・ひっそりとした場所
    - ・重要なものが配される場所
    - ・外界の影響を受けにくい場所
    - ・他者が進入し難い場所
    - ・未知なる場所
    - ・終着の場所
    - ・神聖さを帯びた場所
  - 2.3.3 「奥」空間の性格のまとめ
- 2.4 「奥」と「他の位置を示す語」の比較
  - 2.4.1 「奥」以外の位置を示す語群の整理
  - 2.4.2 「奥」と「他の位置を示す語」の比較
    - ・〔前－後〕系の語群との比較
    - ・〔内－外〕系の語群との比較
    - ・〔表－裏〕系の語群との比較
- 2.5 「奥」という語を含む形容詞
  - 2.5.1 「奥深い」という語に関して
  - 2.5.2 「奥床しい」という語に関して

## 第3章 神社建築の空間構造における「奥」空間

- 3.1 「奥」空間の観察方法
  - 3.1.1 観察対象とする神社建築の選定
  - 3.1.2 観察対象とする神社建築の概要
    - ・皇大神宮
    - ・豊受大神宮
    - ・住吉大社
    - ・松尾大社
    - ・賀茂御祖神社
    - ・賀茂別雷神社
    - ・大神神社
  - 3.1.3 観察の方法と流れ
- 3.2 神社建築の空間構造における「奥」空間
  - 3.2.1 立地構成
  - 3.2.2 境内の空間構成
  - 3.2.3 聖域内の空間構成
- 3.3 「奥」空間のまとめと考察

## 第4章 結論

- 4.1 研究の成果
- 4.2 結論
- 4.3 研究の展望

- ・参考文献
- ・謝辞
- ・発表用読み原稿
- ・発表用パワーポイント
- ・発表用梗概

1.1 研究の目的

1.2 研究の背景

1.3 研究の方法

1.3.1 研究の流れ

1.3.2 研究の対象

1.3.3 研究の基本的態度

1.3.4「奥」に関する建築書物と本研究の差異

---

## 第1章 序論



## 1.1 研究の目的

本研究の目的は、以下の二点である。

1. 「奥」という語によって示される、様々な空間を、位置と性格に関して分類し、「奥」の多角性を、明確な枠組みを持って捉えること。
2. 分類した「奥」を、建築物及びその周辺環境の中から見出し、「奥」の創出に関連する空間的特徴を示すこと。

## 1.2 研究の背景

### ■「奥」の意味は多様である

右文は、広辞苑において示された奥の意味である。ここからわかるとおり、「奥」という語は様々な意味を持つ。

また、この語が英語に翻訳される時、back[後部]、bosom[胸の中]、inner[内側]、remote[遠く離れた]、secret[秘密の]、end[果て]、hidden[隠れた]などといった、異なる様々な語をあてられる。

このように、「奥」という語は、状況に応じて様々な意味を持つのである。

1. 内へ入った所。外面から遠い方。
2. 物事の秘密。深遠で知りにくい所。心の中。
3. 大切にすること。
4. 行く末。将来。
5. 物のはて。末尾。最後。
6. 左。
7. 家の内の後方。妻や家族の起き臥しする所。居間。
8. 貴人の居室。
9. 貴人の妻の称。
10. 奥州（おうしゅう）。みちのく。
11. 晩稻（おくて）。

### ■「奥」に対する認識は、時に一致し、時に異なる

右に異なる二つの空間を示した。一つは、洞窟であり（図 1.1.a）、もう一つは、講義室（図 1.1.b）である。

まず、洞窟の例について考えてみよう。洞窟の内部にいる人物が、洞窟の外部にいる人物に対して、「奥に何かがある。」などという時、彼らの奥への方向に対する認識は、図に示すとおりの方角として、一致するであろう。

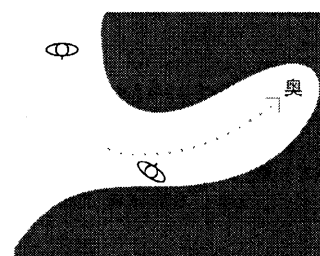


図 1.1.a 洞窟の「奥」

では次に、講義室の例について。図のような講義室の入り口付近で、客席の案内を行う人物が、「奥の方からつめて行って下さい。」などと言う時、彼の言う「奥の方」は、講壇側 [= 前] をさしている。これに対して、講演者が、「そんな奥の方にいずにもっと前の方に来て下さい。」などと言う時、彼の言う「奥の方」は、講壇側とは反対側 [= 後ろ] をさしている。この時、二人の奥への方向に対する認識は、異なっているのである。

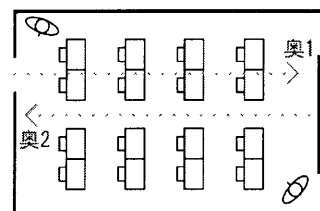


図 1.1.b 講義室

この二例は、我々の「奥」に対する認識は、状況に応じて、一致したり異なったりする、ということを示している。

以上示したとおり、「奥」という語は、多角的、状況的な意味を持つ語である。本研究はこの点に着目している。

奥という語が、どのような意味の広がりを持つのかを整理し得たなら、この語はもはや捉えにくい語ではなくなるであろう。

また、次の点も指摘しておきたい重要な点である。

## ■我々日本人は、「奥」を愛でる心を持っている。

このことは、日本語に、奥を知りたい・見たい・行きたいと思う感情を表す、「奥床しい<sup>\*1</sup>」という語が存在することからも、明らかである。

「奥床しきもの」について、清少納言は『枕草子』に、吉田兼好は『徒然草』に、それぞれ筆を走らせ、西行法師は、人里離れた吉野山の奥の花を尋ねる行為を、仏堂の奥義を求める行為に重ね合わせている<sup>\*2</sup>。

また、現代の代表的文学者である谷崎潤一郎は、『陰影礼賛』において、日本的な美しさの一つの評価軸として「奥深さ」を挙げている。

また、現代の代表的日本人建築家である槇文彦が、著書『見えがくれする都市』において、日本の都市あるいは建築空間に潜在する奥性について論述したのは、近年のことである<sup>\*3</sup>。

このように、我々は「奥」を愛でる心を持っている。それはおそらく、古代から現代まで保たれてきた美的感性なのである。

しかし、前項で述べた通り、「奥」という語はとらえにくいため、「奥床しさ」なるものを体現することは、困難なことであり、定式化し難いと考えられる。

本研究において、「奥」という語の意味の広がりをつまみ、整理することができたならば、その成果は、「奥床しい」という美の指標を諸外国や後世に伝えること、あるいは、「奥床しさ」の創出方法を導き出すこと、などの足がかりとなるであろう。

\* 1: 広辞苑において、「床しい」とは、「何となく知りたい、見たい、聞きたい。好奇心がもたれる。」という意とされている。また、この語は、動詞「行く」からきたもので、「床し」は当て字であるとされている。

\* 2: 「西行において吉野山の奥の花を尋ねる行為は、仏道の奥義を求める心に通う」(『西澤美仁 他(著):和歌文学大系 21 山家集, 明治書院, 2004』より抜粋)

\* 3: 槇文彦は、『見えがくれする都市』において、「奥性」は「望ましき空間の質」を都市空間に与えたとし、さらに、現代における「奥性」の減少を指摘している。(『槇文彦 他(著):見えがくれする都市, 鹿島出版会, 1980』)

1.3 研究の方法

1.3.1 研究の流れ

本研究は、序論・本論・結論と、大まかに三つの段階によって構成されている。うち、本論は、第2章と第3章の二つの章によって構成されている。

第2章では、主に、「奥」という語が用いられている文章や図面を抜き出す。そして、「奥」とはどのような位置にある空間を示すのか、また、「奥」という空間はどのような性格を持つのか、という二つの観点に基づいて、これらの用例の整理を行う。

加えて、「奥」と「他の位置を示す語」の類似・対立関係を整理するとともに、「奥」という語を含む形容詞の意味について論及する。

第3章では、第2章において整理された「奥」空間と一致する空間を、神社建築の空間構造において指摘する。これにより、神社建築において、「奥」空間がどのように表れているかを観察する。

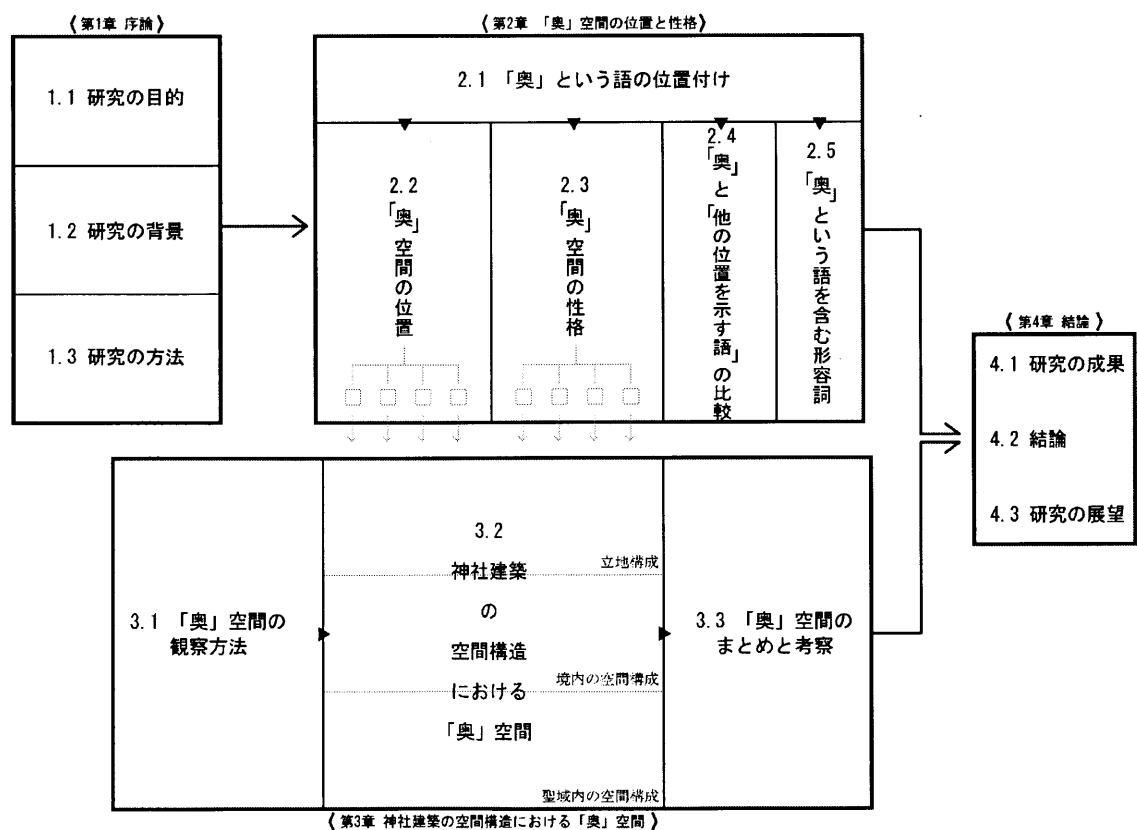


図 1.2 研究の流れ

### 1.3.2 研究の対象

#### ■『第2章「奥」空間の位置と性格』において

奥という語を抽出する際、日本地図、あるいは日本建築の図面を対象とし、奥という語が用いられている空間とその周辺状況を抜き出し、これらの空間が、何によって「奥」とされているのかを明らかにする。

また、図面だけでは、抽出する「奥」空間が、室や地域などに限られてしまい、さらに、何によって奥が決定されているのかが読み取りにくいため、辞典の定義、及び、辞典に用いられる書物を、奥という語を抽出する際の対象とする。

辞典の定義を対象とするのは、一般的な「奥」の意を捉えるためである。

辞典に用いられる書物（正確には、辞典において語の用例を提示する際、引用される書物）を対象とするのは、これらの書物は社会的通念から正当であると認められているからである。

これらの書物の中でも、空間的な状況を具体的に記述している書物を対象とし、かつ、複数の書物を題材とすることによって、大まかに歴史的な流れを俯瞰できるよう、また、様々な空間的状况を題材とするようにした。引用に用いた文献を以下に示す。（これらの書物から約200の「奥」の用例を抽出した。）

- 759 万葉集（『伊藤博（著）：萬葉集釋注，集英社，1998』から引用）  
900代 伊勢物語（『秋山虔 他（編）：日本名歌集成，学燈社，1988』から引用）  
905頃 古今和歌集（『秋山虔 他（編）：日本名歌集成，学燈社，1988』から引用）  
966 清少納言：枕草子（『石田穰二（訳注）：新版 枕草子 上巻・下巻，角川書店，1980』から引用）  
1001 紫式部：源氏物語（『阿部秋生（現代語訳）：源氏物語，小学館，1998』から引用）  
1180頃 西行：山家集（『西澤 他（編）：山家集，和歌文学大系21，2005』から引用）  
1310 吉田兼好：徒然草（『川瀬一馬（校註，現代語訳）：徒然草，講談社，1971』から引用）  
1694 松尾芭蕉（『富士正晴（著）：奥の細道，学習研究社，1979』から引用）  
1890 森鷗外：舞姫（『森鷗外<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1992』から引用）  
1905 夏目漱石：吾輩は猫である（『夏目漱石<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1992』から引用）  
1906 夏目漱石：坊っちゃん（『夏目漱石<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1992』から引用）  
1908 夏目漱石：夢十夜（『夏目漱石<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1992』から引用）  
1911 森鷗外：雁（『森鷗外<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1992』から引用）  
1918 芥川龍之介：地獄変（『芥川龍之介<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1991』から引用）  
1921 芥川龍之介：藪の中（『芥川龍之介<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1991』から引用）  
1924 宮沢賢治：注文の多い料理店（『宮沢賢治<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1991』から引用）  
1931 宮沢賢治：風の又三郎（『宮沢賢治<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1991』から引用）  
1934 谷崎潤一郎：陰翳礼讃（『谷崎潤一郎：陰翳礼讃，中央公論新社，1975』から引用）  
1935 川端康成：雪国（『川端康成：雪国，岩波書店，1952』から引用）  
1954 三島由紀夫：潮騒（『三島由紀夫：潮騒，新潮文庫，1955』から引用）  
1967 安部公房：燃えつきた地図（『安部公房（著）：燃えつきた地図，新潮文庫，1980』から引用）

## ■『第3章 神社建築の空間構造における「奥」空間』において

「奥」空間の複合的な表れを観察する際、論の拡散を防ぐため、観察の対象とする建築タイプを限定することにした。そして、「神社建築」を観察の対象として選定した。選定理由は以下の通りである。

- ・ 基本的な意味で、「街に対して奥」にある。

神社建築は、街から遠く離れた所にあり、入り口（鳥居がある部分）から遠い所に本殿がある。このように、基本的な意味での奥が作り出されている。

- ・ 日本特有の建築空間である。

「奥」という日本語の意味を整理する上では、日本特有である神社建築を題材とすることがふさわしいと考えられる。

- ・ 狭域から広域の各段階において、多面的に「奥」を観察できる。

神社建築は、建築物だけではなく、外構も含めて計画されているため、建築物内における奥だけではなく、もう一段階上の、建築物とその周辺における奥、さらには、街に対する奥、などと、狭域から広域の各段階において、多面的に、奥を観察をすることができる。

- ・ 様々な意味での「奥」がある可能性がある。

町家や民家などにおける、「奥（奥の間）」は、「入り口部から遠い位置にある」という意味での奥であることがほとんどであり、そこに多義的な意味を見ることはできなく、また、研究の余地も少ない。

これに対して、神社建築においては、様々な意味においての奥が作り出されている可能性があり、未だ研究の余地がある。

- ・ 神社建築の空間体験は我々の意識の中に共有されている。

神社の参拝は、古くから今まで続いている日本の慣習である。このため神社建築の空間体験に対する感覚は、我々日本人に共有されているのである。

### 1.3.3 研究の基本的態度

前述したとおり、「奥」には様々な意味がある。つまり、奥という概念の徴表<sup>\*1</sup>には様々なものがあるのである。

このため、「奥とは、一という空間である。」などというように、全ての条件下において共通に説明がつく、奥という概念の内包<sup>\*2</sup>を示すことは、本研究の目的にはそぐわなく、またこのような方法では「奥」空間を十分に説明することは不可能であると考えられる。

本研究は、「奥とは、一という空間であることがある。」などというように、特定の状況下において説明がつく、奥の意味を複数見出し、その意味の広がりをつえ、整理しようとするものである。

仮に、奥には、数種類の奥、すなわち、奥A、奥B、奥Cがあると考えれば、「奥A、B、C全体に共通する奥の内包をつえる」というアプローチではなく、「奥A、B、Cそれぞれの内包をつえ、結果として奥の内包をつえる」というアプローチに重点を置くのである<sup>\*3</sup>。

これが本研究の基本的な態度である。

\*1:「徴表:[哲](mark(イギリス)・Merkmal(ドイツ))ある事物を他の事物から区別するしるしになる特定の性質。例えば、金属は電気や熱の良導体であるという性質によって木材から区別される。一定事物の徴表の総体はその事物の概念の内包となる。」広辞苑より

\*2:「内包:[論](intension:connotation)概念の適用される範囲(外延)に属する諸事物が共通に有する徴表(性質)の全体。形式論理学上は、内包と外延とは、反対の方向に増減する。例えば、学者という概念は、哲学者・文学者・科学者・経済学者などの学者の全種類を包括するが、学者という概念に「哲学的研究」という徴表を加えると、内包はそれだけ増加し、外延は反対に減少する。内容。」広辞苑より

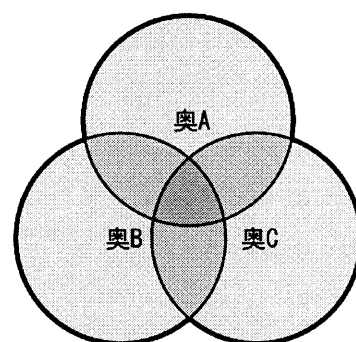


図1.3 研究の基本的態度

\*3:奥A、奥B、奥Cの徴表の重なった部分を捉えようとするのが、「奥A、B、C全体に共通する奥の内包をつえる」というアプローチである。これに対し、本研究は、図1.3でいうところの太線で囲われた枠の内部を捉えようとするものである。

#### 1.3.4 「奥」に関する建築書物と本研究の差異

「奥」に関して論述されている建築書物は複数存在するが、中でも次に示す3つの書物をその代表例として挙げることができる。

- ・宇佐見英治（著）：迷路の奥，みすず書房，1975
- ・槇文彦 他（著）：見えがくれする都市，鹿島出版会，1980
- ・オギュスタン・ペルク（著）：空間の日本文化，筑摩書房，1985

これらの内容の一部を説明するとともに、本研究とこれらの書物との基本的な差異を示す。

##### ■迷路の奥

宇佐見氏はこの書物において、和風旅館がもつ特有の空間構成について説明している。それは、屈接した廊下を光景の変化を味わいながら奥へ奥へと進んでゆくと、次第に現実からの離脱感を味わう、というものであり、前後の接続関係のみによって自身の位置を認識しうるようにしつらえられた空間構成である。このような空間構成は、迷路におけるそれと共通性があるとしている。

このように、奥とは、見えないもの、密かなものへと進む方向の事であり、我々日本人は、これに向かうプロセスを偏愛する傾向がある、というのが宇佐見氏の主張である。

##### ■見えがくれする都市

槇氏は、日本（特に東京）の都市空間には、屈折や高低差、複数の境界域、見えがくれの変化、などといった、空間にある種の断続性を与える要素（槇氏はこれを「空間のひだ」と名付けている）が数多く存在し、これらによって、空間は我々に、実際の距離、面積よりも大きなものとして認識されているとしている。

そして我々日本人は、この「空間のひだ」によって奥性を作り出し、比較的極小の空間を深化させることを可能にしてきた、としている。

さらに、現在においては、例えば境内の森が失われる事、あるいは、土地がならされる事などといった、近代化、高密度化の洗礼によって、奥はあばかれたものとなり、結果、空間に深みを与える奥性が減少しつつある、ということを指摘している。



## ■空間の日本文化

ベルク氏は、日本は、十分な土地面積を持たないが故に、それを節約する必要がある、にもかかわらず、逆に土地を浪費する習慣を持っている、としている。

しかしこの矛盾は、以下の様な空間構成を持って解決されている、としている。すなわち、空間は一つの境界ではなく、複数の境界によって確立される、つまり、ある観点からすると空間は他の空間と一体的なものとして認識され、結果、空間は広く見える、という構成である。

ベルグ氏は、この複数の境界を越えてゆく方向を、「奥」への方向としているが、この点は、槇氏の主張と通じるところがある。

これら3つの書物は、それぞれ独自の論点を持ちつつも、根底には繋がっていることが分かる。

すなわち、日本的空間構成、つまり、前後の接続関係のみによって自身の位置を認識しうるような空間構成<sup>\*1</sup>においては、ある種の断続性を与える要素を越えてゆく、という方向が「奥」への方向であり、重要性を持っている、という点である。

この論点を核にして、宇佐見氏はそれを線的な空間構成の中において指摘し、槇氏はさらに面的な空間構成、そして、都市空間という大きなスケールの中において指摘し、ベルグ氏は、このような空間構成が成立した理由について、特に論述を加えているのである。

3つの書物が根底的に連続しているということは、槇氏が宇佐見氏の書物を、ベルグ氏が槇氏と宇佐見氏の書物を引用している、という点においても明らかである。

これらの書物の共通点は、「奥」という語の意味について論及する、ということが論の目的ではなく、「奥」の語義は自明なものとして扱われている、という点である。

そのため、本研究のような「奥」という語の意味の広がりを見出そうという、基礎的、分解的なアプローチとは根本的に異なるのである。

\*1: 前後の接続関係のみによって自身の位置を認識しうるような空間構成とは、井上充夫氏が著書『日本建築の空間』の中で論じている、「行動的空間」に基づいたものである。

井上氏は、軸列性や左右対称性によって統御された「幾何学的空間」の対立項として、この「行動的空間」を挙げている。

『a 行動的空間では、解析幾何学で扱うような各構成要素の位置関係（すなわち座標）は重要ではなく、位相幾何学で扱うような接続関係が重要である。

b 行動的空間では、各部分空間が継起的に観照される点に特色があり、造形的には動線の屈折や視線の逡巡によって、継時的観照を誘う。

c したがって行動的空間の観照には、実際の歩行にせよ、観念上の運動にせよ、常に観照者の行動が前提となる。』（『井上充夫：日本建築の空間、鹿島出版会、1969』より抜粋）

下の右と左の図が等価なものとして扱われるのが、行動的空間の特徴である。

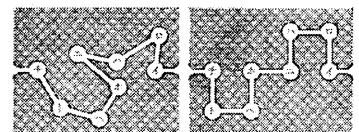


図 1.4 行動的空間

- 2.1 「奥」という語の位置付け
- 2.2 「奥」空間の位置
  - 2.2.1 「参照点」と「奥」空間の位置的な関係の整理
  - 2.2.2 「奥」空間の位置のまとめ
- 2.3 「奥」空間の性格
  - 2.3.1 「奥」空間の性格：包含関係にはないもの
    - ・より私的な場所・特定目的の場所
    - ・進入し難い場所
    - ・暗い場所
    - ・見えにくい場所
    - ・遙か遠くの場所
    - ・進行先（目線の先）の場所
  - 2.3.2 「奥」空間の性格：包含関係にあるもの
    - ・何かを隠す場所
    - ・ひっそりとした場所
    - ・重要なものが配される場所
    - ・外界の影響を受けにくい場所
    - ・他者が進入し難い場所
    - ・未知なる場所
    - ・終着の場所
    - ・神聖さを帯びた場所
  - 2.3.3 「奥」空間の性格のまとめ
- 2.4 「奥」と「他の位置を示す語」の比較
  - 2.4.1 「奥」以外の位置を示す語群の整理
  - 2.4.2 「奥」と「他の位置を示す語」の比較
    - ・〔前－後〕系の語群との比較
    - ・〔内－外〕系の語群との比較
    - ・〔表－裏〕系の語群との比較
- 2.5 「奥」という語を含む形容詞
  - 2.5.1 「奥深い」という語に関して
  - 2.5.2 「奥床しい」という語に関して

---

## 第2章「奥」空間の位置と性格

## 2.1 「奥」という語の位置付け

「奥」という語の意味を論述するのに先立ち、まず、位置を示す語群において、「奥」という語はどのようなグループに属するものなのかを明らかにする必要があると考えられる。

位置を示す語には様々なものがある、例えば、前、右、表、上、中、際、口などがこれにあたるのである。(裏庭、玄関、台所、中心、隅、正面、外壁などもこれに含まれる。)

これらの語を、2種類の語群、すなわち、「構造的な位置」を示す語群と、「普遍的な位置」を示す語群、に分類する事ができる。

### ■「構造的な位置」を示す語群

例えば、「前」という位置は、自分の目線、あるいは建物の正面、他人の位置、映画館のスクリーンの位置などによって決定されるのであって、「前」とされる場所自身が、「前」を決定しているのではない。

このように、他との関係において決定される位置を「構造的な位置」と名付ける。「構造的な位置」を示す語の代表例として、前、後ろ、右、左、表、裏などを挙げる事ができる。

### ■「普遍的な位置」を示す語群

「上」という位置は、「鉛直線上において天空に向かう方」という意味において、目線、建物の正面、人の位置などに関わらず、常に「上」である。

このように、様々な条件下においても普遍的であり、事物による影響を受けない位置を「普遍的な位置」と名付ける。「普遍的な位置」を示す語の代表例として、上、下、中心、隅などを挙げる事ができる。

「構造的な位置」、「普遍的な位置」は対立し合う概念であるが、両方に属する語も存在する。

例えば、先に「普遍的な位置」を示す語の代表例として挙げた、「上」や「下」という語は、「上座」・「下座」などと使われるときは、一よりも上もしくは下の座という意味であり、「構造的な位置」を示すのである。

次に、「構造的な位置」、「普遍的な位置」とは異なる観点で、位置を示す語を二つの対立する語群に分類することができる。すなわち、「方向」を示す語群と「場所」を示す語群である。

### ■「方向」を示す語群

「上」という語は、「鉛直線上において天空に向かう方」という意味において、「方向」を示す語である。

「方向」は実体を持たない。

「方向」を示す語の代表例として、上、下、右、左、中、前、後ろなどを挙げることができる。

### ■「場所」を示す語群

「中心」という語は、ある空間（あるいは物体）における、一点を示すもので、場所そのものを示す語である。

「場所」は実体を持つ。

「場所」を示す語の代表例として、中心、隅、際（輪郭という意味で）、正面などを挙げるができる。

このように、「方向」を示す語群、「場所」を示す語群という、対立する2つの種類を挙げたが、「方向」を示す語にある語を加えると、「場所」を示す語になることがあり、その逆もまた成立し得る。


例えば、「中心側」というのは「方向」を示す語であり、「上層部」というのは「場所」を示す語である。

また、先程、前、後ろなどを「方向」を示す語としたが、これらは場合によっては「場所」を示す語でもある。

■「奥」という語の位置付け

表 2.1 「奥」という語の位置付け<sup>\*1</sup>

	方向	場所
構造的な位置	斜め 前 手前 左 右 横 後ろ	中 裏 表
普遍的な位置	北 東 西 南 上 下 端	内部 口 中心 外部 際 隅

 は、「奥」という語が属するところ

\* 1: 前や上などの語が、場合によっては、「方向」を示したり「場所」を示したり、また「構造的な位置」を示したり「普遍的な位置」を示したりする、ということは前述したが、この表においては、主体的な意味を採用している。

以上の分類を表にして上に示す。

このように、位置を示す語群において、「奥」という語は、「構造的な位置」を示す語である。それは、奥の意味が「外面から遠い方<sup>\*2</sup>」あるいは、「家の内の 後方<sup>\*2</sup>」などとされ、他のものによってその位置が決定されている、ということからも明らかである。

\* 2: 広辞苑において示された奥の意味の一部

また、「奥」という語は、「方向」も「場所」も示す語である、と考えられる。それは、奥の意味が「一の方」とされることがある、という点、そして、「奥に入る<sup>\*3</sup>」、「奥はひっそりしている<sup>\*3</sup>」などという用例がある、という点から明らかである。

\* 3: 「奥」が、ある程度の空間的まとまりを持った「場所」として認識されていないならば、このような用例は存在し難いはずである。しかし、このような用例は数多く存在するため、「奥」は場所も示すのである。

例えば、「北に入る」あるいは、「斜めはひっそりしている」などという用例を想像するのは、非常に困難である。

## 2.2 「奥」空間の位置

この節では、前節において論述された内容を考慮して、「奥とはどのような位置にある空間を示すのか」を、書物や図面における用例の分類を通じて、明らかにする。

分類は以下の点に留意して行った。

奥という語が「構造的な位置」を示す、ということから、

1. 何が「奥」を決定する地点（参照点）となっているか、に着目する。
2. 「参照点」と「奥」とは、どのような位置的關係にあるか、に着目する。

また、奥が「方向」及び「場所」をさす、ということから、

3. 「方向」及び「場所」に着目する。

→ 2.2.1 「参照点」と「奥」空間の位置的な關係の整理

このように、複数の「奥」を、「参照点」との位置的な關係において分類することで、「奥」空間の位置、すなわち、「奥とはどのような位置にある空間を示すのか、を捉える。

→ 2.2.2 「奥」空間の位置のまとめ

## 2.2.1 「参照点」と「奥」空間の位置的な関係の整理

### ■「参照点<sup>\*1</sup>」と「領域」

奥という語は「構造的な位置」を示す、ということから、「奥」空間の位置を分類するには、「参照点」と「奥」空間の位置的な関係はどうなっているか、に着目する必要がある。

若者はそとから声をかけた。奥さんは戸をあけた。  
「おや、新治さんね」  
黙ってさし出された平目をうけると、奥さんは高い声でこう呼んだ。  
「お父さん、久保さんがお魚を」  
奥から燈台長の声がこう応えた。  
「いつもいつもありがとう。まあ上がってゆきなさい、新治君」

- 三島由紀夫：潮騒 -

\*1:「参照点」とは、「奥」の位置を決定する要素がある地点、と定義する。

奥を決定する要素が複数あると考えられる場合でも、その中でも一番決定力のあるものがある地点を、「参照点」と呼ぶ。

例えば、上のような例の場合、「奥」は、「燈台長」の家に属し、かつ、「戸」から離れた後方部であるのだが、この「奥」は、「新治」がいる場所が参照点とされている、と考えるのが適当である。

それは、この文章において、[そとにいる若者（新治）]→[戸を開ける奥さん]→[家の奥の燈台長]というように視点が転移しているという点、さらに、「奥から」のかかり（すなわち、「一へ」の部分）は、「新治」であるという点、に依拠している。

「参照点」あるいは、「奥」が属する、ある種の輪郭を持った空間的まとまりを、「領域」と呼ぶことにする。（図2.2参照）

例えば、上のような例の場合、「そと」が基準の属する領域であり、「燈台長の家」が奥の属する領域である。

「奥」の用例の整理にあたって、この「参照点」及び「領域」をもとにして、「参照点」と「奥」空間との位置的な関係を分類する。

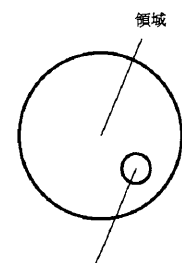


図2.1 「領域」と「参照点」、あるいは、「奥」空間

■「参照点」と「奥」空間の位置的な関係

「参照点」と「奥」空間の位置的な関係には、以下のような場合があると、論理的に仮定することができる。

- i) 「奥」空間が属する領域の外に「参照点」が属する領域がある場合
- ii) 「参照点」が属する領域の外に「奥」空間が属する領域がある場合
- iii) 「参照点」が属する領域と「奥」空間が属する領域が隣合う場合
- iv) 「参照点」が属する領域と「奥」空間が属する領域が同一の場合

また、「奥」空間が、ある領域に属する時、領域と「奥」空間との関係には以下のような場合がある。

- a) 領域の全体が「奥」空間である場合<sup>\*1</sup>
- b) 領域の片側が「奥」空間である場合
- c) 領域の中心側が「奥」空間である場合

\* 1: b) や c) とは異なるが、領域内のある一点をさす場合は、a) に含まれるものとして示している。

このように、「奥」空間の位置は、i)・ii)・iii)・iv) の4通りと a)・b)・c) の3通りの組み合わせによる12通りの枠組みの中のいずれかに属すると考えられる。(表 2.1 参照<sup>\*2</sup>)

\* 2: 斜線部は、「奥」空間が属する領域。白枠は、「参照点」が属する領域。灰色枠部分は、「奥」空間を示す。

表 2.1 「基準」と「奥」空間の位置的な関係の分類

	i) 「奥」空間が属する領域の外に「参照点」が属する領域がある場合	ii) 「参照点」が属する領域の外に「奥」空間が属する領域がある場合	iii) 「参照点」が属する領域と「奥」空間が属する領域が隣合う場合	iv) 「参照点」が属する領域と「奥」空間が属する領域が同一である場合
a) 領域の全体が「奥」空間である場合				
b) 領域の片側が「奥」空間である場合				
c) 領域の中心側が「奥」空間である場合				

ここからは、上図の枠組みの中のいずれかに相当する、「奥」の用例を挙げる。このことで、奥とはどのような位置を示すのかを明らかにする。



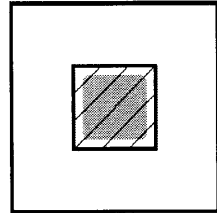
## ■用例の分類 [ i - a ]

代表例

ぼくらは、ちょうど、片屋根の突き当たりの倉庫の前に着いている。――  
「ちょっと、奥を、のぞいてみるか・・・。」

－ 安部公房：燃えつきた地図 －

上の例において、「ぼくら」がいる位置が「参照点」となり、「倉庫」全体が「奥」空間とされている、と考えられる。つまりこれは、i)「奥」空間が属する領域の外に「参照点」が属する領域がある場合であり、かつ、  
a) 領域の全体が「奥」空間である場合、に相当する例であると考えられる。



上の図において、斜線部は、「奥」空間が属する領域。白枠は、「参照点」が属する領域。灰色枠部分は、「奥」空間を示す。

他の例

おく山に もみぢふみわけ 鳴く鹿の 声きくときぞ 秋はかなしき

－ 猿丸大夫：古今和歌集 －

末造は今でも残っている此店の前に立ち留まって、檐に高く吊つてある鸚鵡や泰吉了の籠、下に置き並べてある白鳩の朝鮮鳩の籠などを眺めて、それから奥の方に幾段にも積み重ねてある小鳥の籠に目を移した。

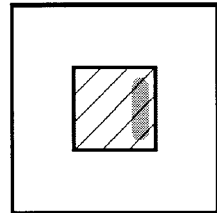
－ 森鷗外：雁 －

## ■用例の分類 [ i - b ]

代表例

若者はそこから声をかけた。奥さんは戸をあけた。  
「おや、新治さんね」  
黙ってさし出された平目をうけると、奥さんは高い声でこう呼んだ。  
「お父さん、久保さんがお魚を」  
奥から燈台長の声がこう応えた。  
「いつもいつもありがとう。まあ上がってゆきなさい、新治君」

－ 三島由紀夫：潮騒 －



上の図において、斜線部は、「奥」空間が属する領域。白枠は、「参照点」が属する領域。灰色枠部分は、「奥」空間を示す。

前頁で述べたとおり、上の例において、「新治」が参照点で、「燈台長」の家の後方が「奥」であると考えられる。つまりこれは、i)「奥」空間が属する領域の外に「参照点」が属する領域がある場合であり、かつ、b) 領域の片側が「奥」空間である場合、に相当する例であると考えられる。

他の例

下簾もかけない車の、簾を高々とまき挙げてあるので、奥まで差し込んだ月の光に、

－ 清少納言：枕草子 －

札を\_\_ジャンパーの内ポケットの奥深くしまった。

－ 三島由紀夫：潮騒 －

## ■用例の分類 [ i - c ]

代表例

軒の端から、奥に向かって、戸外用の照明燈がともされた以外には、場景に何の変化も見られない。

- 安部公房：燃えつきた地図 -

上の例は、倉庫に関する記述だが、おそらく倉庫の外が「参照点」となり、倉庫の中心側が「奥」空間とされている、と考えられる。これは、「奥」という語が「軒の端」という語と対比的に扱われていることから分かる。

つまりこれは、i)「奥」空間が属する領域の外に「参照点」が属する領域がある場合であり、かつ、c) 領域の中心側が「奥」空間である場合、に相当する例であると考えられる。

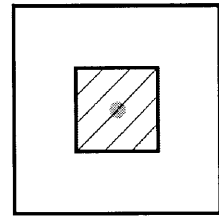
他の例

あの、妙に薄濁りのした、奥の奥の方までどろんとした鈍い光を含む石のかたまりに魅力を感じるのは

- 谷崎潤一郎：陰翳礼讃 -

心の奥にある愛情を、出来るだけ包み隠して、いっそう奥の方へ押し込んでしまおうとする時に

- 谷崎潤一郎：陰翳礼讃 -



上の図において、斜線部は、「奥」空間が属する領域。白枠は、「参照点」が属する領域。灰色枠部分は、「奥」空間を示す。

## ■用例の分類 [ ii - b ]

代表例

泉をかこむ木立の奥で鼻が啼いている。

- 三島由紀夫：潮騒 -

上の例において、「泉」が基準で、「木立」の中の泉から離れた側が「奥」とされていると考えられる。つまりこれは、ii)「参照点」が属する領域の外に「奥」空間が属する領域がある場合であり、かつ、b) 領域の片側が「奥」空間である場合、に相当する例であると考えられる。

他の例

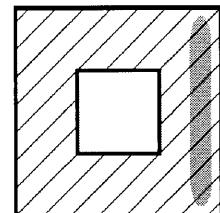
土間をかこむ部屋は暗いが、奥の部屋のまんなかに、窓からうこんの風呂敷程の日ざしがくっきりと落ちている。

- 三島由紀夫：潮騒 -

新治は立ち上がった。今まで身を屈していた自分を、若者は恥ずかしく思った。夜の暗闇の奥の方から、風は襲いかかってその体にまともに当たった

—

- 三島由紀夫：潮騒 -



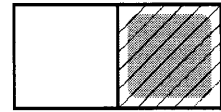
上の図において、斜線部は、「奥」空間が属する領域。白枠は、「参照点」が属する領域。灰色枠部分は、「奥」空間を示す。

## ■用例の分類 [ iii - a ]

代表例

(宮)「私を愛してくれるかしら」とお尋ねになる御返事に、(清)「それはもう-」と申し上げた途端に、台盤所の方で誰かが声高く、くしゃみをしたので、(宮)「まあいやだ。\_\_」とおっしゃって、奥におはいりになってしまわれた。

- 清少納言：枕草子 -



上の図において、斜線部は、「奥」空間が属する領域。白枠は、「参照点」が属する領域。灰色枠部分は、「奥」空間を示す。

上の例において、二人が会話をしていた場所が「参照点」となり、そこから「宮」が離れて入って行った部屋が、「奥」空間とされている、と考えられる。つまりこれは、iii)「参照点」が属する領域と「奥」空間が属する領域が隣合う場合であり、かつ、a) 領域の全体が「奥」空間である場合、に相当する例であると考えられる。

他の例

目を閉じて、雪はその閉じた目の奥で、降りつづいている。

- 安部公房：燃えつきた地図 -

私はやにわに遣戸を開け放して、月明かりのとどかない奥の方へ踊りこもうと致しました。

- 芥川龍之介：地獄変 -

## ■用例の分類 [ iii - b ]

代表例

大比叡や をひえの奥の さざなみの 比良の高根ぞ 霞みそめたる  
歌意：大比叡山、小比叡山のその奥の滋賀の比良山の高根が今日は霞み初めているではないか。春がやって来ている。

- 香川景樹 -



上の図において、斜線部は、「奥」空間が属する領域。白枠は、「参照点」が属する領域。灰色枠部分は、「奥」空間を示す。

上の例において、おそらく、歌の作者がいる所が参照点で、「小比叡山」を境に、そこから遠ざかった「比良山」がある所が「奥」とされている、と考えられる。つまりこれは、iii)「参照点」が属する領域と「奥」空間が属する領域が隣合う場合であり、かつ、b) 領域の片側が「奥」空間である場合、に相当する例であると考えられる。

他の例

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺めたが\_\_

- 夏目漱石：坊っちゃん -

うどん屋は川岸で\_\_。尼僧が二人づれ三人づれと前後して橋を渡って行くのが見えた。\_\_

「はい、この奥に尼寺があるんですよ。\_\_」

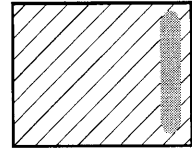
- 川端康成：雪国 -

## ■用例の分類 [ iv - b ]

代表例

男はからかって簾の中に半身乗り出すと、\_\_。男が、女の枕上のあたりの扇を、\_\_かき寄せようとする、一方は、すこし接近しすぎるのじゃないかしらと、胸が騒いで、思わず奥の方に体を引っ込める。

- 清少納言：枕草子 -



上の図において、斜線部は、「奥」空間、及び、「参照点」が属する領域。灰色枠部分は、「奥」空間を示す。

上の例においては、「男」が基準で、そこから遠ざかった「比方という意味での「奥」に「女」が引っ込んだ、と考えられる。「男」も「女」も、「簾の中」にいる。つまりこれは、iv)「参照点」が属する領域と「奥」空間が属する領域が同一である場合であり、かつ、b) 領域の片側が「奥」空間である場合、に相当する例であると考えられる。

他の例

うしろの戸を押そうとしましたが、\_\_戸はもう一分も動きませんでした。  
奥の方にはまだ一枚扉があって、大きなかぎ穴が二つつき、銀色のホーク  
とナイフの形が切り出してあって\_\_

- 宮沢賢治：注文の多い料理店 -

その家では幅をきかしている女房が、物陰から覗き、すきをうかがうふうで、奥の方をうろうろしているのを、嬢君の前にはべっている女房は、様子  
を心得て笑うのを、\_\_

- 清少納言：枕草子 -

## 2.2.2 「奥」空間の位置のまとめ

以上のように、奥の用例を、「参照点」と「奥」空間の位置的な関係に着目して分類した。この結果を下に示す。

表 2.2 「参照点」と「奥」空間の位置的な関係の分類

	i) 「奥」空間が属する領域の他に「参照点」が属する領域がある場合	ii) 「参照点」が属する領域の他に「奥」空間が属する領域がある場合	iii) 「参照点」が属する領域と「奥」空間が属する領域が隣合う場合	iv) 「参照点」が属する領域と「奥」空間が属する領域が同一である場合
α) 領域の全体が「奥」空間である場合				
β) 領域の片側が「奥」空間である場合				
γ) 領域の中心側が「奥」空間である場合				

用例として見出すことができた「奥」空間の位置は、上の表の白く示されている部分である。すなわち、



- ・「参照点」が外部にあるのに対し、内部  
→ 内部に向かう方向が「奥」への方向



- ・「参照点」が外部にあるのに対し、内部の入り口から離れる方  
→ 入り口から離れる方向が「奥」への方向



- ・「参照点」が外部にあるのに対し、内部の中心側  
→ 中心に向かう方向が「奥」への方向



- ・「参照点」が内部にあるのに対し、外部の、出口から離れる方  
→ 「出口から離れる方向が「奥」への方向



- ・「参照点」がある領域と隣り合う領域  
→ 隣り合う領域へと向かう方向が「奥」への方向



- ・「参照点」がある領域と隣り合う領域の、境界から離れる方  
→ 境界から離れる方向が「奥」への方向



- ・ある領域内における、「参照点」から遠ざかる方。  
→ 「参照点」から遠ざかる方向が「奥」への方向

## ■複数の「奥」空間の位置の共通点

以上のように導き出すことができた、複数の「奥」空間の位置において、共通する点を、以下のとおり指摘する。

- ・「奥」とは、「参照点」から離れた場所、あるいは方向である。

「奥」空間は、多くの場合、「参照点」が属する領域とは異なる、離れた領域に属する。たとえ、「参照点」が属する領域内に属する場合であっても、参照点とは離れた場所・方向である。方向に関していえば、求心的というよりも、遠心的な方向という表現がふさわしいであろう。

- ・「奥」空間とは、限定された一定の範囲である。

例えば、「奥」は、「基準」の外の一部をさすことはあっても、漠然と外全体はささない。領域の全体をさす場合は、参照点から離れて入った領域、あるいは、参照点と隣り合う領域、というように限定されたものである。

- ・「奥」空間の位置は、状況に応じて様々である。

表に示すとおり、「奥」空間の位置は、状況に応じて、領域自体、あるいは、領域の片側、あるいは、領域の中心を示す。

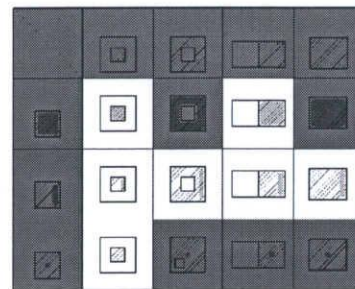


表 2.3 導き出すことができた  
「奥」空間の位置

## 2.3 「奥」空間の性格

前節では、「奥」空間の位置について、「参照点」と「奥」空間の位置的な関係に着目して、整理を行った。

しかし、[どのような空間を「奥」と呼ぶのか?]という問いに答えるには、これだけでは、あまりにも不十分である。なぜなら、前節においては、空間的な位置に関する論述のみであって、空間の性格は捨象されているからである。

この節では、「奥」空間の性格、すなわち、[「奥」という空間はどのような性格を持つのか?]、について論及する。

「奥」空間が持ちやすい性格には、様々なものがあると考えられるが、この際、性格の抽出は、2段階に分けて行われる。

第一段階においては、ある性格を持つ、奥の集合に対して、他の性格を持つ、奥の集合が、包含されないよう、「奥」空間の性格を抽出する。

→ 2.3.1 「奥」空間の性格：包含関係にはないもの

第二段階においては、第一段階において見出した性格を持つ、奥の集合に包含されるものに関して、論述を行う。

→ 2.3.2 「奥」空間の性格：包含関係にあるもの

これらの結果をまとめ、「奥」空間の性格について考察を行う。そして、ある性格を持つ「奥」空間は、どのような「位置」にあるのかをまとめ、前節との対応関係を明らかにする。

→ 2.3.3 「奥」空間の性格のまとめ

### 2.3.1 「奥」空間の性格：包含関係にはないもの

#### ■包含関係にないものとは

ここで、仮に、ある性格  $a$  を持った、「奥」空間の集合を  $\bar{0}A$  とする。そして、別の性格  $b$  を持った、「奥」空間の集合を  $\bar{0}B$  とする。

このように考えると、「奥」空間は、 $\bar{0}A, \bar{0}B, \bar{0}C, \dots$  の和集合、すなわち、 $\bar{0}A \cup \bar{0}B \cup \bar{0}C \dots$ 、と捉えることができる<sup>\*1</sup>。

この節では、「奥」空間が持ちやすい性格（上のたとえでいうところの  $a, b$  など）を複数挙げることで、「奥」空間の性格を外延的に論述する<sup>\*2</sup>。

この際、 $\bar{0}A$  が  $\bar{0}B$  に包含されてしまつては、「奥」空間の性格に関する論述に新たな観点を加えることはできない。このため、ある性格を持つ「奥」空間の集合が、互いに包含関係にはないよう、「奥」空間の性格を抽出した。

なおかつ、抽出する性格は、数多くの用例において見出されたものである。

\*1：ある性格  $a$  を持った空間の集合を  $A$  とすると、  
 $A \supset A$  であるが、  
 $A = \bar{0}A$  ではない。  
上と同様に、「奥」空間の集合  $\bar{0}$  について、  
 $A \cup B \cup C \supset \bar{0}$  であるが、  
 $A \cup B \cup C = \bar{0}$  ではない。  
このように、「奥」空間が持つ性格  $a$  を、ある空間  $A$  が持っていたとしても、その空間  $A$  は必ずしも「奥」空間  $\bar{0}A$  であるとは限らないのである。  
この節の目的は、どのような性格を持つ空間を「奥」空間と呼ぶか、を明らかにするのではなく、「奥」空間はどのような性格を持つのか、と明らかにすることである。

\*2：外延的記法とは、「集合に属する元をすべて列挙すること」で集合を記述する方法である。内包的記法とは、「ある集合に属するために元が満たさなければならない条件を明示すること」で集合を記述する方法。

#### ■この節の流れ

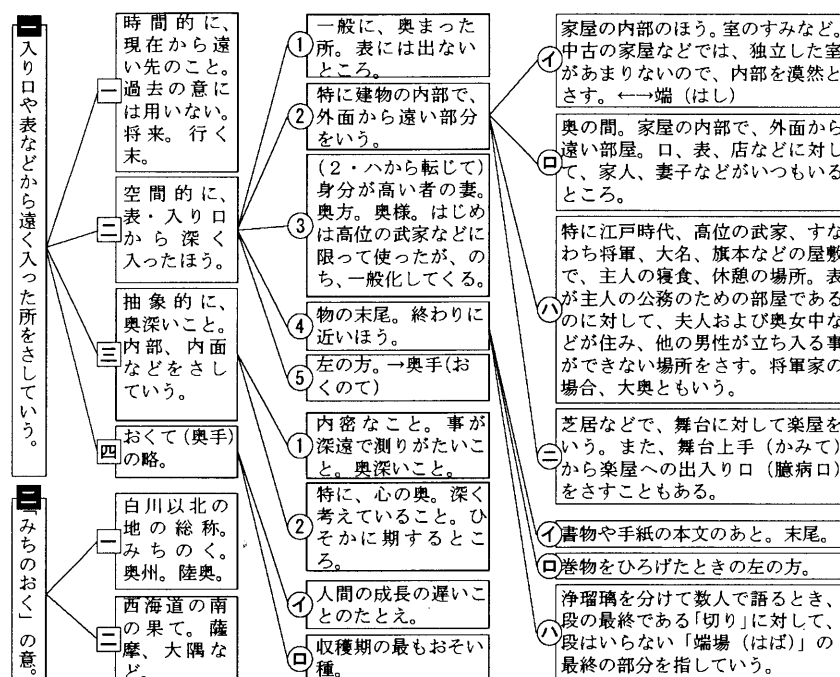
次頁から、見出された「奥」空間の性格について、各性格ごとに、論述していく。

論述は、基本的に以下の流れで行われる。

1. 見出された「奥」空間の性格（タイトル）の提示
2. 代表的な用例の提示とその説明
3. 他の用例の提示
4. 提示された性格は、どのような要素、あるいは構成によって獲得されているのかを考察



表 2.4 『日本国語大辞典』に記された奥の意味



\*1: この「より私的な場所・特定目的の場所」に関しては、例外的に辞書の定義を参照する。これは、この例が、他の例と比べ、「奥」空間が普遍的に持つ性格を示すものだからである。

上の表は『日本国語大辞典』において記述された「奥」の意味である。表に示すとおり、奥には様々な意味が存在するが、その根源的な意味は、「入入口や表などから遠く入った所」とされている。

ところで「入入口や表」は、ほとんどの場合において、公の場所から、より私的な場所、あるいは特定目的の場所へと入り込む際の境界である。

このことに着目すると、上の表における各意味間の差異は、大きな場所(地域など)に対する進入なのか、あるいは小さな場所(室など)に対する進入なのかという点においての差異であって、多くの意味は、公の場所から、「より私的な場所・特定目的の場所」(あるいは方向)を示している、ということが分かる。

このように、「奥」とは、「より私的な場所・特定目的の場所」である、という性格を持つことがある、ということが分かる。

次の頁に、「より私的な場所・特定目的の場所」を示す、他の用例を提示する。

そういう連中が賀茂の祭りを見物した様子は、まことに珍妙であった。「来るのがとてもおそいな。待ってる間は棧敷<sup>\*1</sup>にいても、無駄だ。」と言って、奥の部屋で酒を飲んだり物を食ったり、碁だの双六だのをやって――

－ 吉田兼好：徒然草 －

「おや、新治さんね」

黙ってさし出された平目をうけとると<sup>\*2</sup>、奥さんは高い声でこう呼んだ。

「お父さん、久保さんがお魚を」

奥から燈台長の素朴な声がこう応えた。

「いつもいつもありがとう。まあ上がってゆきなさい、新治君」

－ 三島由紀夫：潮騒 －

\* 1：「棧敷：祭りの行列などを見物するために高く構えた床。さんじき。」広辞苑より抜粋。ここにおいて、棧敷は「祭り」という、「公の場所」を見るための空間である、と考えられる。

\* 2：住宅の入り口付近（公の場所）で贈り物の受け渡しのやりとりが行われており、そこから住宅の内部の方に入った所を「奥」としている。

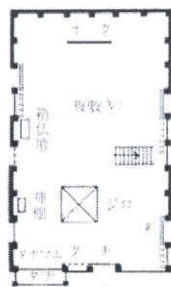


図2.2 部屋の奥の例<sup>\*3</sup>

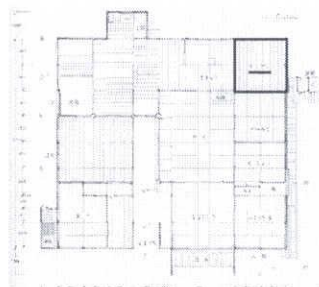


図2.3 家の「奥の間」<sup>\*4</sup>

\* 3：図に示す通り、住居への入り口部から遠く離れたところが、「奥」とされている。

\* 4：図に示す通り、住居への入り口部から遠く離れた部屋が、「奥の間」とされている。

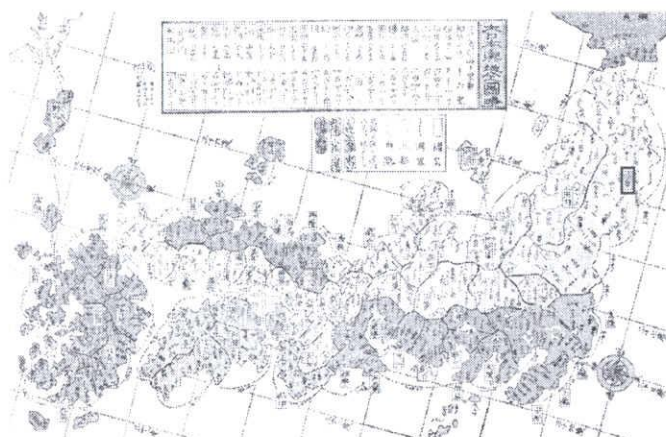


図2.4 国土における「奥（陸奥）」<sup>\*5</sup>

\* 5：陸奥（みちのく）。磐城・岩代・陸前・陸中5ヶ国の古称。京から一番遠く離れた所であった。

また、人が集まって話し合っている場所から遠ざかる方を奥としている例もよくみかけられるが、これも「より私的な場・特定目的の場所」に含まれる。

「人様にどうご挨拶申し上げたらよいのか<sup>\*6</sup>、分からないのですから」と言って、奥の方へ後ずさりしなされる姿は、まったく世なれぬ有様である。

－ 紫式部：源氏物語 －

\* 6：ここにおいて、人と挨拶を行う場所から遠ざかる方向が「奥」とされている。

「まあいやだ。心にもないことを言ったのね。いいわ」とおっしゃって、奥におはいりになってしまった<sup>\*7</sup>。

－ 清少納言：枕草子 －

\* 7：会話が行われている場があり、そこから片方の人物が離れてた際、その離れた方向が「奥」とされている。

このように、「より私的な場所・特定目的の場所」という性格を持つ「奥」空間は、下記の要素によって、その性格を獲得していると考えられる。

i) 公の場所と私的な場所・特定目的の場所を引き離す要素

入り口や正面、仕切り、更には、川や山脈などといった地域を分割する自然地形などが、「より私的な場所・特定目的の場所」を作り出す要素であると考えられる。

ii) 私的な場所・特定目的の場所を囲い込む要素

外壁面、塀、地域の輪郭などが「より私的な場所・特定目的の場所」を作り出す要素であると考えられる。

iii) 場に公的な性格を帯びさせる要素

舞台、大通り、広場、人々が集まる所などが、「より私的な場所・特定目的の場所」を作り出す要素であると考えられる。

これらの要素は、場に公的な性格を帯びさせると同時に、それらと離れる方向を「より私的な場所・特定目的の場所」にするのである。

## 進入し難い場所

君住まば 甲斐の白根の 奥なりと 雪踏み分けて 行かざらめやは  
歌意：あなたが住むならば、甲斐の白根山の奥だとしても、雪を踏み分けて行かないことがあろうか、私は行くよ<sup>\*1</sup>。

- 西行：山家集 -

\*1：難所もいとわぬ勇敢な志を詠む、とされている。『西澤美仁 他：和歌文学大系 21 山家集、明治書院、2005』より）

この歌において西行は、「君」に逢うためならば、どんな難所であろうとも行ってみせる、という意志を示している。このことは、「雪踏み分けて」という部分に鮮明に表れている。

ここにおいて、奥は、「より私的な場所・特定目的の場所」であるという性格は持っていないが、「進入し難い場所」であるという性格を持っている。

奥聞こうより口聞け

（相手の心の奥は、深く問いただすまでもなく、ちょっとしたことばのはしで知られるというところから）物事の真相は手近なことからわかるものだ、の意。

- 日本国語大辞典より抜粋 -

深く問いたださないと知ることができない、と思われている「心の奥」は、実は、容易に「ことばのはし」で知る事ができる、というのが、この慣用句の主張である。つまり、「心の奥」は進入し難い（知りにくい）場所である、というのが前提にされていることが分かる。

この慣用句も、奥が、「進入し難い」という性格を持っている、ということを示している例の一つである。

このように、「奥」が「進入し難い場所」であるという例は、他にも多くある。その例を下に示す。

東路や 間の中山 程狭み 心の奥の 見えばこそあらめ

歌意：東国にある間の中山は道が狭いので、もっと奥まで行きたいと思ってもなかなか難しい。そのように、あなたとはなかなか逢えないので、あなたの心の奥が見えたらと思うが、思うようには行かない。

- 西行：山家集 -

何よりも、かの中宮あたりの風儀の、このうえなく奥深く近づきたいものよ――

- 紫式部：源氏物語 -

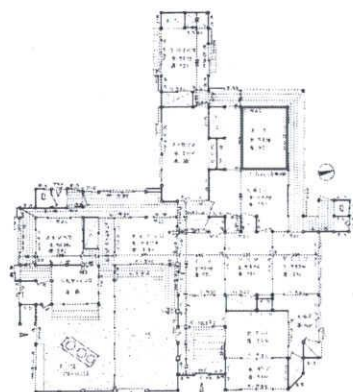


図 2.5 「奥」が「進入し難い場所」である例<sup>\*2</sup>

\*2：図からわかるとおり、「奥」は、入り口から、進入し難い場所にある。

このように、「進入し難い」という性格を持つ「奥」空間は、下記の要素・構成によって、その性格を獲得していると考えられる。

i) 移動の際に実質的な障害を与える要素・構成

勾配のきつい傾斜や階段、多くの屈折点、更には、自身が存在する位置を把握しにくくするような空間構成、などがこれにあたる。

ii) 移動の際に精神的な障害を与える要素・構成

鳥居や締め縄などといった要素は、神聖な場所への結界である、ということを我々は熟知しているため、これらの要素を越えて進む際、我々は、ある種の障害を感じる。

また、結界のように象徴的な要素でなくとも、通過の際に視界が急激に狭くなる門や、閉鎖性の強い通路、さらには、過度に高級感や威厳が備えられた空間なども同様に、移動の際に精神的な障害を与える要素である。

## 暗い場所

風がわたって来て、松の梢々はさわいだ。社の暗い奥にまで、そのよき吹き入った風が森厳な響きを立てた。海神は若者の祈りを嘉納したように思われた。

- 三島由紀夫：潮騒 -

ここにおいて、「奥」は入り口や表からの遠さによって測られているというよりも、暗さの変化によって測られている、といった方がより適切であると考えられる。

上記のように、「奥」空間が、「暗い」、あるいは「闇」、「日の届かない」、「陰」などという語によって説明されている例は非常に多い。

特に、谷崎潤一郎は、著書『陰翳礼讃』において、「奥」を説明する際に、「暗い」などという語を用いている。その例の一部を下に示す。

あの、妙に薄濁りのした、幾百年もの古い空気が一つに凝縮したような、奥の奥の方までどろんとした鈍い光を含む石のかたまりに魅力を感じるのはわれわれ東洋人だけではないであろうか。

漆器の器のいいことは、まずその蓋を取って、口に持って行くまでの間、暗い奥深い底<sup>\*1</sup>のように、容器の色と殆ど変わらない液体が音もなく日澱んでいるのを眺めた瞬間の気持ちである。  
人は、その椀の中の闇に何があるかを見分けることは出来ない――

\* 1：漆器の器の口から底までは、遠さ、という指標において「奥深い」のではなく、暗さの変化、という指標において「奥深い」、とされていると考えられる。

奥深い山中の木下の闇をさえ<sup>\*2</sup>奪ってしまうのは、あまりと云えば心なき業である。

\* 2：「さえ」、という部分に、山の奥深さを作り出す、本質的な要素は「闇」である、という主張を読み取ることができる。

- 谷崎潤一郎：陰翳礼讃 -

この書は日本的な美について、「陰翳」に焦点を当てて、書かれたものであるが、谷崎氏は「暗さ」と「奥」を結びつけて捉えているだけではなく、「暗さ」との結束性が高い「奥」を賛美し、美しいもの、後世に伝えるべきものとしている。

以上のように、「奥」空間が、「暗い」という性格を持つ例は、他の作家の様々な書物においても、多く抽出する事ができた。

次頁にそれらの例の一部を示す。

私はやにわに遣戸を開け放して、月明かりのとどかない奥の方へおどりこもうと致しました。

- 芥川龍之介：地獄変 -

かきくもり 日かげも見えぬ 奥山に 心をくらす ころにもあるかな  
歌意：空もかき曇り、日ざしも見えない奥山で、私の心までも真っ暗な日々であることよ

- 紫式部：源氏物語 -

奥の倉庫に搬び入れている。その奥のほうは、もう暗くてよくは見えない。

- 安部公房：燃えつきた地図 -

以上指摘した全ての例において、「奥」空間自身は、絶対的な「暗さ」を持っているのではなく、「明るい」場所との比較において、相対的な「暗さ」を持っているのである。これは興味深い共通点である。

このように、「暗い」という性格を持つ「奥」空間は、下記の要素によって、その性格を獲得していると考えられる。

#### i) 暗さを作り出す物的要素

いうまでもないが、暗さを作り出す物的、すなわち、屋根、壁などが、これにあたる。

人口照明などといった明るさを作り出す要素は、逆に暗さを打ち消す、対立的な要素として挙げる必要がある。もっとも、ロウソクの灯火や提灯の明かりなどといった、ほのかな明るさは、むしろ暗さを引き立てる場合もある。

#### ii) 自然の要素

天候や、太陽、月の位置などといった、非定常的な、自然の要素も、暗さを作り出す要素として挙げる必要がある。

現代のように深夜でも明るい世の中と比較して、古来の人々にとっては、このような自然要素の働きは、非常に影響力が強いものであったと考えられる。

## 見えにくい場所

車の主はずっと奥に引っ込んでいて、わずかに見える袖口、裳の裾、かざみなど、それらの色合いもまことにきれいで――

－ 紫式部：源氏物語 －

この例において、「奥」は、「より私的な場所・特定目的の場所」である。同時に、「進入し難い場所」でもあり、あるいは、「暗い場所」でもある。

しかし、「わずかに見える」という語によく表れているように、「見えにくい<sup>\*1</sup>」という性格が、この「奥」空間の、主体的な性格であると考えられる。

\*1:「見えない」という性格も、「極限に見えにくい」という意味で、「見えにくい」という性格に含まれるものとする。

このように、「奥」が、「見えにくい」という性格を持っているという例は、他の書物においても、多く見られる。

下に、その例の一部を示す。

目を閉じても、雪はその閉じた目の奥で、降りつづいている。

－ 安部公房：燃えつきた地図 －

ぼくらは、ちょうど、片屋根の突き当たりの倉庫の前に着いている。――  
「ちょっと、奥を、のぞいてみるか・・・・・・・・」

－ 安部公房：燃えつきた地図 －

奥の子供の足音がこちらへ近づくのを聞き得たなら、吾輩は惜しげもなく  
碗を見捨てたろう。

－ 夏目漱石：吾輩は猫である －

女は実にその常闇の夜の奥の方に隠れていて、昼間は姿を見せる事がなく、  
ただ「夢ばかりなる」世界にのみ幻影の如く現れる。

－ 谷崎潤一郎：陰翳礼讃 －

おく山に もみぢふみわけ 鳴く鹿の 声きくときぞ 秋はかなしき  
歌意：奥深い山で散り敷いた紅葉を踏み分けて鳴いている鹿の声を聞く時  
こそ、秋は悲しい季節だとしみじみと思われる<sup>\*2</sup>。

－ 猿丸大夫：古今和歌集 －

\*2:「おく山」の状況は、「鹿の鳴き声」によって語られている。ここにおいて、作者にとって、「おく山」は見えないものである。



これらの例において、「奥」空間（あるいは「奥」空間内に存在する物）が、わずかに「かいま見える」ことによって、その、存在、もしくは、特徴の一部分が説明されている。

あるいは、「聞こえる」、「臭う」などといった、視覚以外の感覚による情報で説明されている。

このように、「見えにくい」という性格を持つ「奥」空間は、下記の要素・構成によって、その性格を獲得していると考えられる。

#### i) 視界を遮る要素

当然ながら、壁や塀、などといった鉛直面は、視界を遮る要素であり、「奥」を作り出す要素であると考えられる。

しかし、上述した「奥」の特徴を考慮すると、完全に視界を遮るものよりも、わずかに視線が通る、もしくは音などをわずかに伝える程の「透過性<sup>\*1</sup>」を持ったものが、「見えにくさ」を作り出すと考えられる。

\*1: ここでいう「透過性」とは、寸法によって測られるようなもののみではない。

さらには、「奥」空間の存在を暗示する要素（例えば、神社なら鳥居が、寺院なら楼門が本殿、本堂の存在を、暗示する要素である）も、わずかな「透過性」を持った要素に含まれる。

#### ii) 視線が通りにくい空間構成

通路が屈折や上下を繰り返すような空間においては、視線は通りにくい。このため、このような構成によって、見えにくい場所が多く作り出されることになる。

## 遙か遠くのところ

山は奥深いようすで、谷沿いの道が遙かに続き、松や杉がうつそうとして、  
苔がしたり落ち、四月というのに今なお寒々としている。

- 松尾芭蕉：おくの細道 -

この例において、山の奥深さは、谷沿いの道が遙かに続く様子によって示されている、すなわち、ここにおいて、「奥」は、「遙か遠い」という性格を持った場所なのである。

下の例も、「奥」が、「遙か遠くのところ」を示している一例である。

大比叡や をひえの奥の さざなみの 比良の高根ぞ 霞みそめたる  
歌意：大比叡山、小比叡山のその奥の滋賀の比良山の高嶺が今日は霞み始  
めているではないか。春がやって来ている。<sup>\*1</sup>

- 香山景樹 -

「奥」は「沖」と同語源<sup>2</sup>とされているが、「奥」が「遙か遠い」という性格を持つことがある、という点を考慮すると、これを理解するのは容易である。

\* 1：大比叡山小比叡山よりも比良が遙か遠くであるところを、「さざなみの」と一句間を置いて、イメージの調べを創り出しているところが技術的に巧みである、とされている。（『秋山虔 他（編）：日本名歌集成、学燈社、1988』より）

\* 2：日本国語大辞典、明鏡国語辞典、字訓、などの辞典より。

このように、「奥」が、空間的に「遙か遠くのところ」である、ということから、時間的な「遙か遠くのところ」すなわち「将来」、「未来」を、「奥」として示すことがある。

伊香保の 沿ひの榛原 ねもころに 奥をなかねそ まさかしよかば  
歌意：伊香保の山の山岸にある榛の林がずっと続いてるように、私達の奥（将来）だって、あまり先の事まで考える事はないよ、今さえ良ければいいじゃないの。

- 作者未詳：万葉集 -

吾が恋は 現在（まさか）も悲し 草枕  
多胡の入野の 将来（おく）も悲しも  
歌意：私の恋は今も切ない。多胡の入野の奥ではないがオク（将来）も切ない気持ちです。

- 作者未詳：万葉集 -

あらかじめ ひとつとしげし かくしあらば  
しえやわがせこ おくもいかにあらめ  
歌意：元々こんなに人の噂がうるさいなんて。こんな具合では、ああ貴方よ、将来（おく）はどうなるのでしょうか。

- 作者未詳：万葉集 -

上の例のように、「奥」が「将来」「未来」を表す時、それは予測しにくく、不安なもの、とされているという点は、興味深い点である。

前頁の例のように、「奥」が、「遙か遠くのところ」あるいは転じて「将来」「未来」をである時、それらは、不確かなもの、または、現在の自分が立脚している空間あるいは時間とは同一のものではないもの、として扱われる傾向がある。

このように、「遙か遠い」という性格を持つ「奥」空間は、下記の要素・構成によって、その性格を獲得していると考えられる。

i) 視界が遙か遠方まで開けるような構成

建築空間的には、このような視界を作り出すのはごくまれであり、どちらかというと、自然の、例えば山脈の連なりや水平線などに、この構成を見出すことが多いと考えられる。

## 進行先（目線の先）の場所

土塀の続いている屋敷町を西へ下って、だらだら坂を降り尽くすと、大きな銀杏がある。この銀杏を目印に右に切れると、一丁ばかり奥に石の鳥居がある。

- 夏目漱石：夢十夜 -

このように、道を教えるときなどに、「奥」という語が使われることが多いが、この際の奥は、出発地から目的地を定めたときの、「進行先の場所」を示している。

同様に、「奥」が、「進行先の場所」を示すの例を下に挙げる。

其の家は湯島切通しから、岩崎邸の裏手へ出る横町で、曲がりくねった奥にある。

- 森鷗外：雁 -

「仕方ない、とろう。たしかによっぽどえらいひとなんだ。奥に来ているのは」二人は\_\_扉の中に入りました。

\_\_すこし行きますとまた扉があつて\_\_

「\_\_どうも奥には、よほどえらいひとがきている。\_\_」

\_\_それから大急ぎで扉をあけますと\_\_

- 宮沢賢治：注文の多い料理店 -

ある里山を尋ねて行ったことがあったが、はるかな苔の細道を踏み分けた奥に、ひっそりと住まっている庵があった。

- 吉田兼好：徒然草 -

また、「奥」が「目線の先の場所」を示す例も多く見かけるが、これは先程の、「進行先の場所」と類似するものであると考えられる。

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺めた\_\_

- 夏目漱石：坊っちゃん -

眼鏡の奥で目が笑っている

- 明鏡国語辞典における「奥」という語の用例 -

このように、「奥」が「進行先（あるいは目線の先）の場所」を示す時、「奥」とされる地点は、何かしらの到達点である、ということがわかる。

例えば、廊下なら、廊下の突き当たりが奥であり、道路なら、進行方向の変化を迫られる所が奥なのである。

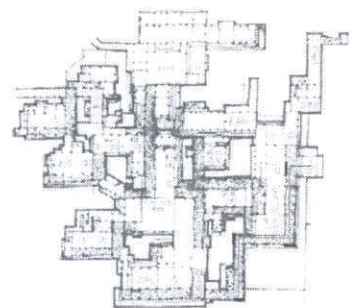


図 2.6 「奥」が「進行先（目線の先）の場所」である例<sup>\*1</sup>

\*1：宇佐見英治は著書『迷路の奥』の中において、このように廊下が屈折して連続して行く空間構成における、廊下の各アイストップ（上図の太線で示したような場所）を「奥」としていた。これは、「奥」が「進行先（目線の先）の場所」である例である。

このように、「進行先（目線の先）の場所」である、という性格を持つ「奥」空間は、下記の要素・構成によって、その性格を獲得していると考えられる。

i) 進行過程においてある種の断続性を与える要素

前述したとおり、何かしらの到達点となる所、つまり、通路なら湾曲しながら繋がっているものよりも、屈折して繋がっており、アイストップが作られているものが、「奥」空間をもつといえる。

ii) 進行の方向付けをする要素

通路や階段などといった移行空間は、進行を強制的に方向付ける。これらの要素によって、「奥」への方向が示唆されるのである。

## 2.3.2 「奥」空間の性格：包含関係にあるもの

### ■「奥」空間の性格：包含関係にあるもの

これまで、「奥」空間が持ちやすい性格の中でも、包含関係にはないものについて例を挙げてきたが、ここからは、前述した「奥」空間の性格に包含される\*が、「奥」空間が頻繁に持つ性格、あるいは、「奥」空間が持つ性格の中でも独自性が強いと考えられる性格について、論述する。

これは、「奥」空間が持つ性格の広さを見出すという試みではなく、その広さの中での多様な性格を見出そうとする試みである。

\*1: ある性格を a、b、c で表し、  
性格 a を持つ「奥」空間を  $\bar{O}A$  で表し、  
 $\bar{O}A \supset \bar{O}C$ 、あるいは  $[\bar{O}A \cup \bar{O}B] \supset \bar{O}C$ 、 $[\bar{O}A \cap \bar{O}B] \supset \bar{O}C$  などという関係にあるとき、  
c のような性格を「 $\neg(a, b)$  に包含される性格」としている。

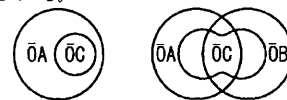


図 2.7 包含の図

### 何かを隠す場所

「奥」は「見えにくい」、「進入し難い」という性格を持ちやすい。このため、その場所は、「人目にはふれさせたくない何かを隠す場所、あるいは、人が隠れる場所」であることが、多くある。

鞆の中にはキャラメルや果物を、ちょっとのことではみつからないように奥深く隠して入れた。

- 三島由紀夫：潮騒 -

「この門の奥なら、まず人に知られる気づかいはない。」

- 川端康成：浅草紅団 -

「隠れる」という語にとどまらず、「世を離れる」とか、「人目を忍ぶ」とか、「逃げる」などという語も類似する語であり、「奥」との関連性が強い。

世を遁れて鞍馬の奥に侍りけるに\_\_

- 西行：山家集 -

信夫山 忍びて通ふ 道もがな 人の心の 奥もみるべく

- 伊勢物語 -

妻は\_\_たちまち藪の奥へ走り出した。\_\_盗人は妻が逃げ去った後

- 芥川龍之介：藪の中 -

このように、「奥」空間は、「何かを隠す場所」である、ということが多い。このことから、「奥」空間は、「何かが隠れているような印象を人に与える」という性格を持つ、ということも多くある。

右に、「見えにくい場所」、「進入し難い場所」、及び、「何かを隠す場所」の関係を示す。

## ひっそりとした場所

「奥」は、「見えにくい場所」であることが多い。このことから、その場所は、気配が感じられない、「ひっそりとした場所<sup>\*1</sup>」とされることが多い。正確には、むしろ、ある場所が「ひっそりとした場所」であり、気配が感じられず目立たないために、「見えない場所」なのであろう。

ある里山を尋ねて行ったことがあったが、はるかな苔の細道を踏み分けた奥に、ひっそりと住まっている庵があった。

- 吉田兼好：徒然草 -

どうしてもあの窓はいつも障子が閉まっていたり、簾が降りていたりして、その奥<sup>2</sup>はひっそりしていたようである。

- 森鷗外：雁 -

これらの例のように、「奥」空間は、ひっそりとした、とか、目立たない、などという語で説明されることが多い<sup>3</sup>。「奥」空間は、「ひっそりとした場所」である、という性格を持つことが多いのである。

## 重要なものがある場所

「奥」は「進入し難く」、「見えにくい」ことがある。このとき、その場所には、重要な人、あるいは重要な物があることが多い。

若者は 札を丁寧に指を舐めて数え、名を書いた紙袋に又入れてジャンパアの内ポケットの奥深くしまった。

- 三島由紀夫：潮騒 -

あきづはの そでふるいもを たまくしげ  
おくにおもふを みたまへわがきみ  
歌意：とんぼの羽のような薄ものの袖をひるがえて舞うこの子、私はこの子のことを秘蔵の思いでいとしく思っているのですよ、よくよくご覧になって下さい、わが君よ。

- 湯原王：万葉集 -

これが転じて、「奥」という語自体に、「重要な人物のための」という意味が含まれて捉えられている単語もある。

奥座：上位の人、主人、客などがつく席。上座。

- 広辞苑より抜粋 -

特に日本では、重要な物は見えにくく（あるいは全く見えなく）なっていることが多いように思われる。それ故、見えないものに対して重要性を感じる、という考えは強いように感じるのである。

このように、「奥」空間は、「重要なものが配される」という性格を持つことが多い。

\*1：「ひっそり：静香で物音や人の気配が全く感じられないさま。ひそやかで目立たないさま。」  
広辞苑より抜粋。



\*2：ここにおいていわれている「奥」は、通りに面した部屋のことをさす。参照として上図が掲載されていた。

\*3：「奥」とされる空間が、たまたま、「ひっそりしている」という性格を持っていただけであり、「奥」空間が、「ひっそりしている」という性格を持ちやすいわけではない、という説明も成り立つかもしれない。

しかし、「奥」とされる空間は、「目立つ」とか、「よく分かる」などという語と比較すると、左の例のような「ひっそりとした」とか、「気配があまり感じられない」などという語で説明されることが非常に多いという事実をふまえると、「奥」空間は「ひっそりしている」という性格を持ちやすい、と考えるのが妥当であろう。

## 外界の影響を受けにくい場所

「奥」は「進入し難い」という性格を持つことがある。このため、進入を遮る要素によって守られた場所であり、「外界の影響を受けにくい」という性格を持つことが多い。

私はやにわに遣戸を開け放して、月明かりのとどかない奥の方へ踊りこも  
うと致しました。

- 芥川龍之介：地獄変 -

風がわたって来て、松の梢々はさわいた。社の奥にまで<sup>\*1</sup>、そのとき吹き入っ  
た風が森厳な響きを立てた。

- 三島由紀夫：潮騒 -

\*1：「まで」という表現から、「奥」は、普段は外界の影響を受けない場所である、ということを示していることが分かる。

奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう<sup>\*2</sup>表にあらはれて、きのふまで  
の我ならぬ我を攻むるに似たり。

- 森鷗外：舞姫 -

\*2：「やうやう」（だんだん）という表現から、「奥」は、普段は表に現れない場所である、ということを示していることが分かる。

このように、「奥」が「外界の影響を受けにくい場所」である、という性格を持つことがある。

このことから更に、「奥」は、「安全な場所」とか、「守られた場所」とか、「安定した場所」として説明されることがある。

## 他者が進入し難い場所

「奥」が「より私的な場所・特定目的の場所」であるとき、多くの場合、その場所は、特定人物の所有性が高い場所<sup>\*3</sup>であり、他者が進入し難い場所である。よって、その内部にいる人物は、その場所を所有している人物、すなわち主人<sup>\*4</sup>と、その場所を所有してないが主人にそこに入る事を認められた人物、すなわち客とに分けられる。

\*3：「所有性が高い場所」とは、特定人物が所有するが、他者も進入することができる場所を示す。ここでいう所有とは、もちろん所有権などによって定められるような経済的なものではない。

\*4：ここでいう主人とは、一家の主、という意味ではなく、「私的な場所」を所有する人物をさす。よってそれは、子供でも女性でもあてはまり、複数でもあり得るものである。

二階の奥の座敷に台長夫人を招じ入れた照吉は、自分で床柱の前に坐った

—

- 三島由紀夫：潮騒 -

玄関でいいからちょっとお目にかかりたいと云ったら奥へ引き込んだ<sup>\*5</sup>

- 夏目漱石：坊っちゃん -

\*5：客人である人物と、家の者である人物は、玄関におり、客人は家の者に招かれ家の更に内部に入っていた。

所有性がさらに高くなると、その場所は特定人物に占有される場所となり、他の人物の進入、干渉を許さぬ場所となる。

多くの住宅には、「他者が進入し難い場所（＝客を招き入れる場所）」があり、その先に、「他者が進入できない場所（＝寝室など）」があると考えられる。このような「奥」空間は、必然的に他者にとって「進入し難い場所」である。



## 未知なる場所

「奥」空間は、「見えにくい」あるいは「進入し難い」という性格を持ちやすいということから、そこは「未知なる場所」とされていることが多い。

たけむらの 竹のなみたち 奥ふかく ほのかなる世は ありにけるかも  
歌意：竹林に風がそよぎ、波立つように揺れている。その林の奥深くには  
静寂さがただよう、はっきり見定めることが出来ない世の中があるだろう  
になあ

- 中村三郎 -

このように、未知なる場へと向かう方を「奥」として示している例を、  
西行法師の『山家集』に多く見出す事ができる。下にその例を示す。

陸奥の 奥ゆかしくぞ 思ほゆる 壺の碑 外の浜風  
歌意：陸奥平原に来て、更に奥があると知って行ってみたくなった。津軽  
には壺の碑があるという。外の浜風が吹くという。

奥に猶 人見ぬ花の 散らぬあれや 尋を入らん 山時鳥  
歌意：春が過ぎてもこの更に奥だったら、誰も見たことがない珍しい花が  
散らずにまだ咲いているのかなあ。山時鳥よ、一緒に探しに行こう。

吉野山 うれしかりける しるべかな さらでは奥の 花も見ましや  
歌意：吉野山で嬉しかったのは道案内だなあ、それがなくては奥の花<sup>\*1</sup>を  
見られなかっただろう。

\*1：奥の花は、吉野山の奥の桜で、仏法の深奥の象徴とされている。

- 西行：山家集 -

これらの歌において、「奥」空間が「未知なる場所」である、ということとは、「奥」空間が、伝聞・推定の語によって説明されている、ということからも明らかである。

さらに、興味深いのは、これらの「奥」空間は、語り手にとって全くの未知なる場所ではなく、その場所に関する情報を知っている、あるいは、自分との距離がなんとなく把握できている、その場所のわずかな一部分を認知している、などというように、既知なる部分がわずかにある場所である、という点である。

おそらく、「未知なる場所」という性格を持つ「奥」空間は、基準となる地点と無関係とされる程には、離れていないのであろう。

## 終着の場所

「奥」が「進行先（あるいは目線の先）の場所」である時、そこは「終着の場所」という性格を持つことがある。これは、「進行先（あるいは目線の先）の場所」の極地は、「終着の場所」であるからである。

これが更に抽象的に捉えられ、空間以外のものにも用いられることも多くある。

奥つ城所：墓場。

- 広辞苑より抜粋 -

奥印：官公署または個人が書類の終りに押す印。

- 広辞苑より抜粋 -

上の例は、人生における「奥」であり、下の例は、文面における「奥」である。

このように、「奥」は「終着の場所」である、ということがある。

## 神聖さを帯びた場所

「奥」が「進入し難い場所」であるとき、その場所は、「神聖さを帯びた場所」であることがある。侵略されておらず、清浄であるもの、けがれないものに、我々は「神聖さ」を感じるからである。

山人よ 吉野の奥に 導せよ 花も尋ん また思ひあり

歌意：山の人よ、吉野の奥の聖なる山へ私を案内せよ。花も見たいが、他にも目的がある。

- 西行：山家集 -

しばしば「奥」と同じ方向・場所を示す「前」や「先」という語は、「洗：未開の地におもむく際、その地の邪霊を祓い、身を清めるために、足を荒い爪を揃える、先行の儀式<sup>\*</sup>」に関連している、とされている。このことからも明らかなように、古くから「奥」空間は、神霊との関連性が強く、その精神はいまでも保たれているのである。

\* 1：『白川静：字訓〔普及版〕，平凡社』より

このように、「奥」空間は、「神聖さを帯びた」という性格を持つことがある。

### 2.3.3 「奥」空間の性格のまとめ

以上、「奥」空間が持ちやすい性格を、書物や図面などにおける「奥」の用例から導き出した。

これにより、下に示すようになり、複数の、「奥」空間が持ちやすい性格について言及することができた。

包含関係にはないもの	包含関係にあるもの
・ より私的な場所・特定目的の場所	・ 何かを隠す場所
・ 進入し難い場所	・ ひっそりとした場所
・ 暗い場所	・ 重要なものが配される場所
・ 見えにくい場所	・ 外界の影響を受けにくい場所
・ 遠か遠くの場所	・ 他者が進入し難い場所
・ 進行先（目線の先）の場所	・ 未知なる場所
	・ 終着の場所
	・ 神聖さを帯びた場所

#### ■ 「奥」空間の性格の独立性と重合性

ある「奥」空間は、上記6つの内の一つの性格しか持たない、というわけではなく、複数の性格を持つ、ということは、おおいにあり得る事であり、むしろそちらの方が普通であると思われる。

下の例がそれを説明するのによい例である。

女は実にその常闇の夜の奥の方に隠れていて、昼間は姿を見せる事がなく、ただ「夢ばかりなる」世界にのみ幻影の如く現れる。

－ 谷崎潤一郎：陰翳礼讃 －

ここにおいて、「女」が日夜働く「奥」空間は、「より私的な場所・特定目的の場所」であり、室内なので、「暗い場所」であり、家の表からは、「見えにくい場所」である。さらに、そこは家族以外の人物にとって、「進入し難い場所」である。

このように、この例における、「奥」空間は、複数の、「奥」空間が持ちやすい性格を持っている。

このことから、右図のように、それぞれの種類の、「奥」空間の性格は、他に影響されない独立的なものであるが、重複しあうものである、ということの説明ができる。

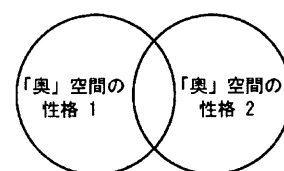
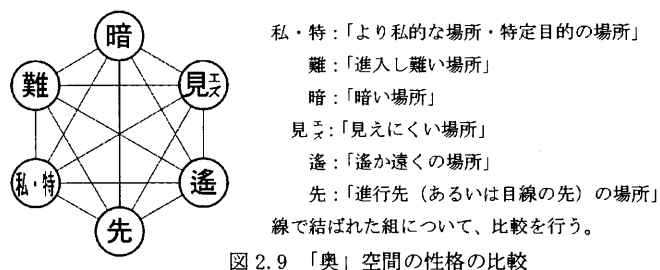


図 2.8 「奥」空間の位置

## ■「奥」空間が持ちやすい、各性格同士の関係

それぞれの種類の、「奥」空間の性格は、他に影響されない独立的なものであるが、その中に、類似する組、あるいは対立する組を見出す事ができる。このため、下図のように、「奥」空間が持ちやすい、ある性格に対する、他の性格を比較する<sup>\*1</sup>。



\*1：ここにおいて比較するのは、「奥」空間が持ちやすい性格の中でも、「包含関係にはないもの」のみにとどめることにした。包含関係にあるものを扱った場合、比較の項が、その重要性のなさにも関わらず、増えるからである。

図 2.9 「奥」空間の性格の比較

### i) 「より私的な場所・特定目的の場所」について

◇「進入し難い場所」との関係：  
 「より私的な場所・特定目的の場所」であり、かつ、「進入し難い場所」である「奥」空間は多くある。（以下このような関係を重複性の強い関係と呼ぶ。）

◇「暗い場所」との関係：  
 建物内部の方が外部より暗いことがほとんどであるため、重複性の強い関係である。

◇「見えにくい場所」との関係：  
 建物外部から内部は何えない事が多いので、重複性の強い関係である。

◇「遙か遠くの場所」との関係：  
 この二つは完全に異なるといってもさしつかえないと思われる。

◇「進行先（目線の先）の場所」との関係：  
 この二つの間に関係はないといえる。

### ii) 「進入し難い場所」について

◇「暗い場所」との関係：  
 より暗い場所には進入し難いことが普通なので、重複性の強い関係であるといえる。

◇「見えにくい場所」との関係：  
 見えない場所には進入し難いことが普通なので、重複性の強い関係であるといえる。

◇「遙か遠くの場所」との関係：  
 遙か遠くの場所に行くのは困難なので、重複性の強い関係であるといえる。

◇「進行先（目線の先）の場所」との関係：  
 進行先（目線の先）の場所と進入し難さとの間には関係はないといえる。

### iii) 「暗い場所」について

◇「見えにくい場所」との関係：  
 暗い場所とは、見えにくいことが多いので、重複性の強い関係であるといえる。

◇「遙か遠くの場所」との関係：  
 遙か遠くの場所とは、暗い場合は認知できないので、対立的な関係であるといえる。

◇「進行先（目線の先）の場所」との関係：  
 この二つの間に関係はないといえる。

iv) 「見えにくい場所」について

◇「遙か遠くのところ」との関係：

遠くに、ほのかに見える場所が遙かな場所なので、重複性の強い関係であるといえる。

◇「進行先（目線の先）の場所」との関係：

進行先や目線の先は、普通、むしろはっきりと見えるものを示すので、対立的な関係であるといえる。

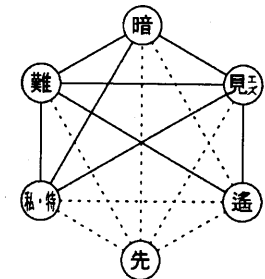


図 2.10 「奥」空間の位置同士の関係

v) 「遙か遠くのところ」について

◇「進行先（目線の先）の場所」との関係：

この二つの間に関係はないといえる。

以上の比較結果を、先ほどの図にまとめたものが図 2.10 である。実線は、重複性の強い関係を、点線は対立的な関係及び無関係を、矢印は内包関係を、それぞれ表している。

さらに図 2.10 を変形し、分かりやすく整理したものが、図 2.11 である。

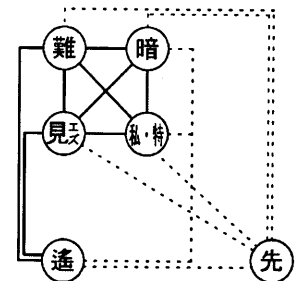


図 2.11 「奥」空間の位置同士の関係

図 2.11 から二つのグループを見出す事ができる。

#### グループ A

「進入し難い場所」、「暗い場所」、「見えにくい場所」、「より私的な場所・特定目的の場所」で構成された、このグループは、互いに類似性が強いと考えられる。つまり、「奥」空間が、「進入し難い場所」であると同時に、「暗い場所」や、「見えにくい場所」、「より私的な場所・特定目的の場所」である、などということは、おおいにあり得るのである。

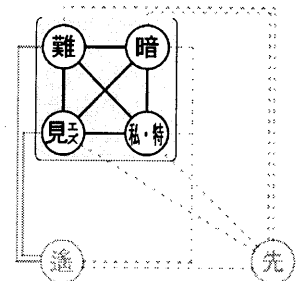


図 2.12 グループ A

#### グループ B

「進入し難い場所」、「見えにくい場所」、「遙か遠くのところ」で構成された、このグループは、互いに類似性が強いと考えられる。つまり、ある「奥」空間がこれら 3 つの性格を持つということは、おおいにあり得るのである。

この場合、「より私的な場所・特定目的の場所」や「暗い場所」は、「遙か遠くのところ」と無関係であるため、このグループに含まれない。

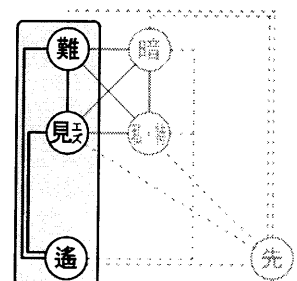


図 2.13 グループ B

また、「進行先（目線の先）の方」は、どのグループとも類似せず、むしろ、対立関係や無関係にあることも特徴的である。

## ■「奥」空間の性格と「奥」空間の位置

前節において、「奥」空間の位置の分類を行ったが、ある性格を持つ「奥」空間の集合は、分類した「奥」空間の位置の中のいずれかと結束性が強い。

「おや、新治さんね」

黙ってさし出された平目をうけると\*、奥さんは高い声でこう呼んだ。

「お父さん、久保さんがお魚を」

奥から燈台長の素朴な声がこう応えた。

「いつもいつもありがとう。まあ上がってゆきなさい、新治君」

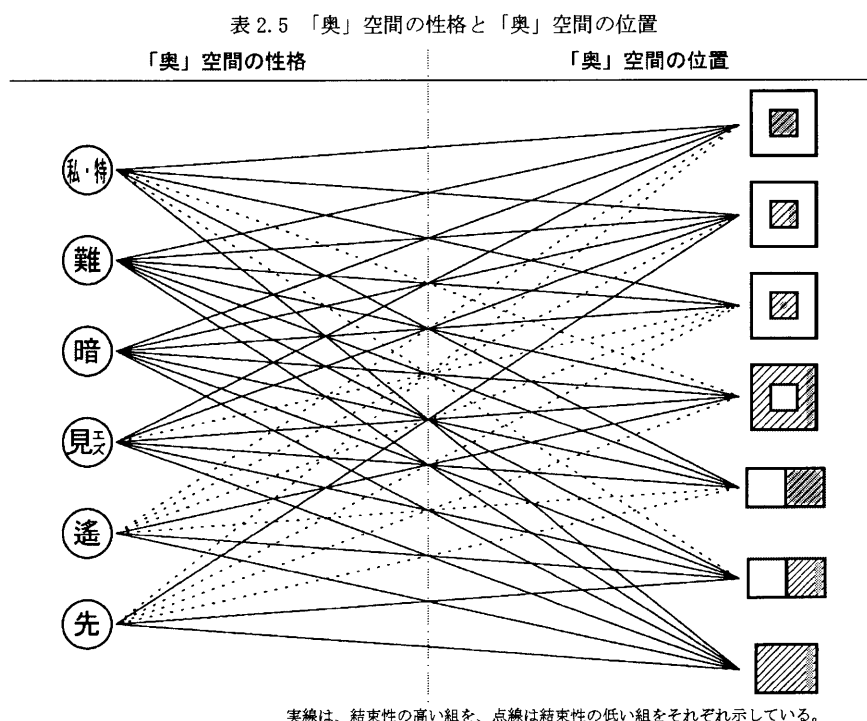
- 三島由紀夫：潮騒 -

例えば、上の例は、奥が「より私的な場所・特定目的の場所」である例、として先に挙げたが、「奥」の位置について着目すると、これは、「参照点が外部にあるのに対し、内部の、入り口から離れる方」である。

このように、奥が、「より私的な場所・特定目的の場所」であり、かつ、「参照点が外部にあるのに対し、内部の、入り口から離れる方」であることは多い、ということが明らかになった。

同様に、「奥」空間が、ある性格（これをC1とする）を持ち、かつ、ある位置（これをP1とする）にある、という例を数多く見つけ出すことができた時、C1とP1は、結束性が強いペアとして示すことができる。

これらを、全ての組について調べた所、「奥」空間の性格と「奥」空間の位置の結束性の強さに関して、以下の表を作成することができた。



前頁の表から、以下の点を指摘できる。

・「より私的な場所・特定目的の場所」について

この性格を持つ「奥」空間は、基本的に、「参照点が外部にあるのに対し、内部（あるいは内部の一部）」を示す。例外として、「参照点がある領域と隣り合う領域」あるいは「ある領域内における、参照点から遠い方」を示すこともあるが、これは、「奥」が、「より私的な場所・特定目的の場所」というよりかは、「公の場所から離れた場所」である時である。

・「進入し難い場所」、「暗い場所」について

これらの性格を持つ「奥」空間は、様々な位置に属す。

・「見えにくい場所」について

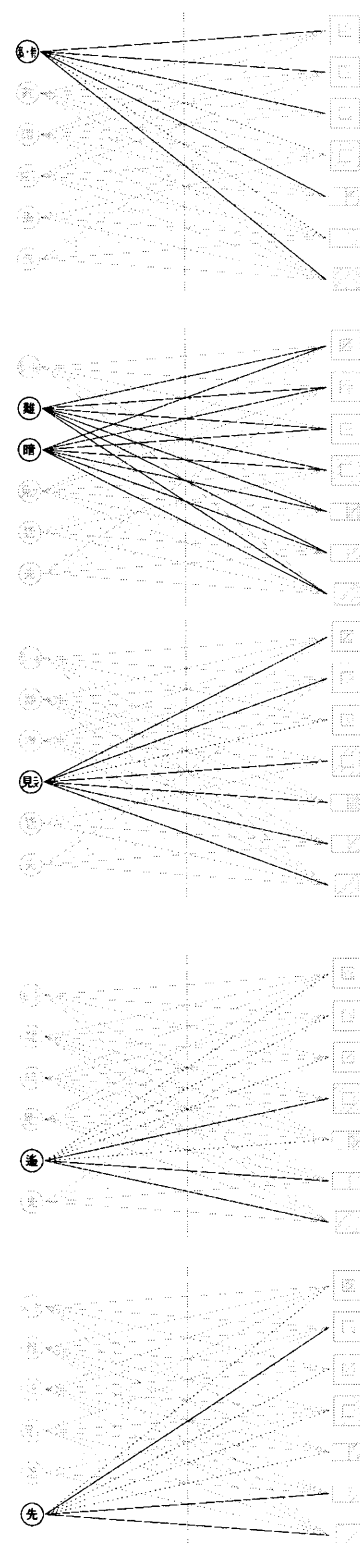
この性格を持つ「奥」空間も同様に、様々な位置に属すが、「参照点が外部にあるのに対し、内部の中心側」には属さない。これは、「見えにくい場所」が、領域の端であることはあっても、領域の中心であることは稀であるからであると考えられる。

・「遙か遠くの場所」について

この性格を持つ「奥」空間は、「領域全体」を示さない。更に、「参照点が外部にあるのに対し、内部」も示さない。このような位置が、「遙か遠い場所」である、ということは稀であるからであると考えられる。

・「進行先（目線の先）の場所」について

この性格を持つ「奥」空間は、「領域の片側」を示すことはあっても、「中心側」あるいは「領域全体」を示すことは稀である。このような場所が、「進行先（目線の先）」であるということは、考え難い。



## ■「奥」空間の共通点

これまで、「奥」空間の性格に関して、個別に、様々なことを述べてきたが、これら全てに存在する、いくつかの共通点を見出すことができた。

・「奥」空間は、「基準」から断続的ではあるが、非連続的ではない場所。

全ての「奥」空間は、前節で述べた通り、基準となる地点から、「距離」を持った位置にある。

この「距離」は、単に、mやcmという寸法によって測られるものではなく、何ものかから奥への、ある種の断続性によって測られるものであると考えられる。

ここでいう断続性とは、ある場合では不可視、またある場合では進入の困難さ、またある場合では明暗の変化、これらの総合によるものである。

このように、「参照点」から「奥」へは、ある種の断続性があると考えられる。

しかし、参照点と「奥」空間は、完全に引き離されているわけではなく、両者の間には、ある程度の（場合によってはほんのわずかな）連続性がある。

それは、例えるならば、あるアパートAの個室1とあるアパートEの個室5との関係のように非連続的な関係ではなく、なおかつ、体育館の片側半分ともう一方の半分との関係のように完全に連続的な関係でもないのである。

「奥」空間が、「遙か遠くの場所」である場合でさえ、参照点と「奥」空間とは、連続的なものとして、説明されている\*。

ある人が突然、「奥に何かある」と言われたら、その人はおそらく、「何か」は自分とはそう離れてはいないだろうと考え、自分の周りを見渡すであろう。

このように、「奥」空間と「参照点」は、非連続的ではない。

このことを、右に図を用いて示す。上図の左は、断続的であるが、非連続的なもの、右は、非連続的ではないが、断続的でないものをそれぞれ示す。「奥」とは、このいづれにも属さない。つまり、下図のような、「参照点」と断続的であり、かつ、非連続的ではない場所なのである。

\* 1: 下に例を示す。

山は奥深いようすで、谷沿いの道が遙かに続き、松や杉がうっそうとして、苔がしたり落ち、四月というのに今なお寒々としている。

- 松尾芭蕉：おくの細道 -



図 2.14 参照点と「奥」空間の関係  
(この図のような関係ではない)



図 2.15 参照点と「奥」空間の関係  
(この図のような関係である)



・「奥」空間は、何かしらの到達感や限界を感じる場所である。

先程、奥と参照点との間には「距離」があると述べたが、殆どの場合において、それはある種の限界の「距離」である。

例えば、「廊下の奥」を想像する時、多くの人は廊下の突き当たりを思い浮かべ、廊下の途中を思い浮かべる人は、限りなく少ないであろう。

このように、「奥」空間は、何かしらの限界（あるいは到達感）を感じる場所である<sup>\*1</sup>。

\* 1: ここでいう奥は、「方向」を示すものではなく、「場所」を示すものである。奥が「方向」を示す場合は、「距離」は問題とならない。

・「奥」とは、空間をさすもので、物体の内部をさすものではない。

さらに、「奥」が方向を示す語ではなく、場所を示す語として用いられる場合、奥は、ほとんどの場合において、空間（あるいは空間の一部）<sup>\*2</sup>をさし、物体の内部をさすことは少ない。

このことを、右の二つの図によって示す。

物体の内部（あるいは実体をもたない「心」など）をさす場合であっても、それらは抽象的に、空間あるいは空間の一部として扱われているのである。下にその例を示す。

\* 2: ここでいう「空間の一部」とは、空間の境界を構成するものの内側の表面（例えば壁・床・天井の内側）も含んでいる。



図 2.16 「奥」と非「奥」1

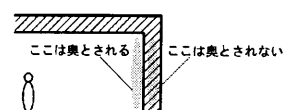


図 2.17 「奥」と非「奥」2

心の奥にある愛情を出来だけ包み隠して、いっそう奥の方へ押し込んでしまおうとする時に\_\_<sup>\*3</sup>

- 谷崎潤一郎：陰翳礼讃 -

\* 3: 「心」はあたかも空間を持ち、その中に、「愛情」という物体があるかのように語られている。

「奥」空間は、以上の共通点を持つのである。

## 2.4 「奥」と「他の位置を示す語」の比較

これまで、書物や図面における用例をもとに、「奥」空間の位置と性格を体系的に整理し、「奥」という語自身の意味の、内的構造について論及した。

この節では、「奥」と「他の位置を示す語」を比較し、その差異や類似性を指摘する。すなわち、「奥」という語の意味の、対外的構造を明らかにしようとする試みるのである。

『2.1 「奥」という語の位置付け』において、「奥」という語は、「構造的な位置」、すなわち、他との関係において決定される位置、を示す語である、ということを指摘した。このため、「奥」の対外的構造を明らかにしようとするプロセスは重要性を持つ。

この節において、奥を、他の語と対比的に捉えることで、「奥」が示す位置を、より鮮明にすることができる。

「奥」と「他の位置を示す語」を比較するのに先立って、まず、「他の位置を示す語」を複数挙げ、それら同士の類似性、対立性、を示す。

「他の位置を示す語」とは、「前」、「内」、「表」などである。これらの語群から、互いに関連性の強い、3つのグループを見出すことができる。すなわち、[前-後]系、[内-外]系、[表-裏]系、の語群である。

### → 2.4.1 「奥」以外の位置を示す語群の整理

この3つのグループそれぞれにおいて、「奥」という語が、他のどの語と対立し、どの語と類似するのかを明らかにする。

「奥」と、ある語が、一義的に、対立または類似する、といえるケースは少く、むしろ、状況によって、対立したり類似したりあるいは無関係であったりすることの方が多い。

このことを考慮し、「奥」と「他の位置を示す語」を比較する。

### → 2.4.2 「奥」と「他の位置を示す語」の比較

- ・[前-後]系の語群との比較
- ・[内-外]系の語群との比較
- ・[表-裏]系の語群との比較

## 2.4.1 「奥」以外の位置を示す語

### ■位置を示す語

「奥」以外に、位置を示す語の中で、「先」「前」「後」「右」「左」「上」「下」「中」「内」「外」「際」「端」「沖」「表」「裏」「口」を、代表的な例として挙げることができる。

まず、これら語の代表的な意味を、辞典から引用する。

「先」：物や作用の向かう所

「前」：物の正面にあたる所。顔の向いている方。

「後」：物の正面・全面と反対の側。

「右」：南を向いた時、西にある方。

「左」：南を向いた時、東にある方。

「上」：物の上部。高い位置。

「下」：上部・表面から遠い部分。下方。

「中」：一定の区画・範囲の内。一つづきの物事の両端でない部分。

「内」：何かを中核・基準とする、一定限界のなか。

「外」：一定の空間的範囲があるとき、その内側でない部分。

「際」：物の他と接する境目。

「端」：物の末の部分。中心から遠い、外に近い所。

「沖」：海・湖などで、岸から遠く離れた所。

「表」：人の目に立つ方の面。

「裏」：正面とは反対の、隠れている方。

「口」：外から内に通ずる所。

- 広辞苑より抜粋 -

もちろん、これらの語はそれぞれ、奥と同様に、様々な意味を持っているが、その代表的な意味においては、以下のような対立する組、あるいは類似する組を作ることができる<sup>\*)</sup>。

[ 前⇔後 ] ⇔ [ 右⇔左 ] ⇔ [ 上⇔下 ] ⇔ [ 前⇔後 ], [ 前⇐先 ]

[ 中⊂内 ], [ 内⇔際 ], [ 内⇔外 ], [ 際⇔外 ], [ 外⊃沖 ], [ 際⇐端 ]

[ 裏⇔表 ], [ 表⊃口 ]

\* 1 : 記号の説明

A ⇔ B : A と B は対立する。

A ⊃ B : A は B を包含する。

A ⇐ B : A と B は類似する。

### ■3つのグループ

以上の組み合わせを考慮すると、位置を示す語群を、下記の3つのグループに分類することができる。

[ 前-後 ] 系 : 「先」「前」「後」「右」「左」「上」「下」

[ 内-外 ] 系 : 「中」「内」「外」「際」「端」「沖」

[ 表-裏 ] 系 : 「表」「裏」「口」

## ■ [前-後]系

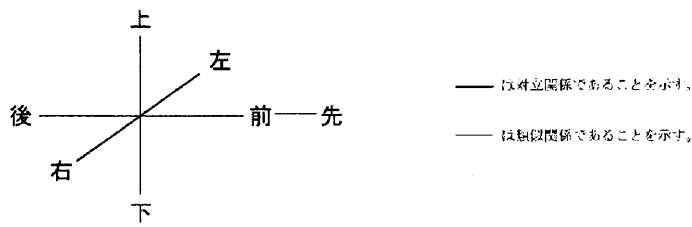


図 2.18 [前-後]系の語の構造模式図

[前-後]系の語は、上図のような構造を持つ。

「前」という語の意味の中には、「幾つかある中の自分に近い方。<sup>\*1</sup>」すなわち、「手前」という意味があるが、この構造においては、「前」は「手前」という意味を持たないものとしている。

\* 1: 広辞苑より抜粋

また、「上」「下」は、この構造においては、水平面に関する語ではなく、鉛直軸に関する語としている。

まず、「奥」と「上」「下」は、ほぼ無関係であるといえる。

なぜなら、「奥」は基本的に、場所に関して使われる言葉であり、場所は基本的に水平面上において連なるからである。もちろん垂直上の連なりもあり得るが、重力と地面が存在している我々の空間においては、水平面での連なりが圧倒的に重要視されるのである。

次に、「右」「左」すなわち、「横」であるが、「横」と「奥」も、ほぼ無関係であるといえる。

何かの方位付け、あるいは空間的配列・優劣関係によって、空間には、方向性が発生する。

「横」とは、この方向と直交する方向、すなわち、方位付け・空間的配列・優劣関係等によって発生する方向性の影響下にはない、独立した方向を示すのである。

「奥」とは、むしろ、何かの方位付け、あるいは空間的配列・優劣関係によって発生する方向性と、おおいに関係するのである。

では、「前」、「後」、「先<sup>\*</sup>」について考えてみよう。

これに関する考察は、場合分けに基づいて行うこととした。

\*1:「先」には、「指先」などのように、「突き出た部分。また、その端。(広辞苑より抜粋)」という意味があるが、ここにおいてはこの意味は考慮していない。

#### i) 物体や空間を基準にした時の「前」「後」について

物体や空間の「前」は、正面の位置によって決定される。そこで更に、以下の場合分けを行う。

##### i-a) 正面が、「内」と「外」を別け隔てる、主要な面である場合

正面は、多くの場合において、「内」と「外」を別け隔てる、主要な面であるが、この場合、「後」は、正面から、中心を通過して、離れる方向を示す。つまり、「参照点が外部にあるのに対し、内部の、入り口から離れる方」としての「奥」と一致するのである。ここにおいて、「後」と「奥」は同一方向を示す。

##### i-a) 正面が、「公の場」である場合

講義室の黒板、劇場の舞台などは、「公の場」としての「正面」である。この場合、「後」は、「公の場から離れる方向」であり、ここにおいて、「奥」への方向と一致する。

i-a)、i-b) いずれの場合も、「後」と「奥」は同一の方向を示すのである。

#### ii) 人間を基準にしたときの「前」「後」「先」について

「前」「先」は、人間を基準に考えた時、進行先、あるいは、目線の先、を示す。

『2.3「奥」空間の性格』において、「奥」が「進行先、あるいは、目線の先」を示すことがある、ということを指摘した。

このため、人間を基準にしたとき、「前」「先」は、「奥」と一致する方向を示し、「後」は、「奥」と対立する方向を示すのである。

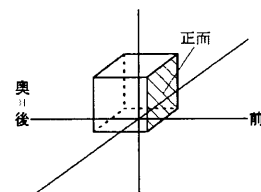


図 2.19 物体や空間を基準にした時の「前」「後」「奥」

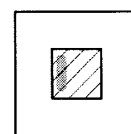


図 2.20 「基準が外部にあるのに対し、内部の、入り口から離れる方」としての奥

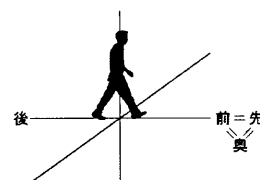


図 2.21 人間を基準にしたときの「前」「後」「先」「奥」

i)、ii) どちらの場合にも共通に指摘しておきたいのは、「奥」は「前」「後」と異なり、以下の性質を持つという点である。

- ・方向が直線的ではなく、屈折や屈曲を許容する
- ・空間的性質の変化に依存する。

## ■ [内-外]系

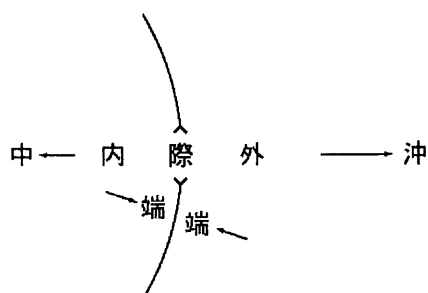


図 2.22 [内-外]系の語の構造模式図

[内-外]系の語は、上図のような構造を持つ。

「内」と「外」は、互いの存在によって自身が存在するという、相補的な関係であり、基本的に、「内」は「外」に包まれる。

「中」は、「内」の同義語、あるいは、「二つの物事の間。間。\*1」として使われることがあるが、ここでは、それらを除外し、「中央」「中心」という意味を採用している。

\* 1: 広辞苑より抜粋

「内」と「外」の間には、両者の境界、すなわち、「際」がある。

「端」と「際」は、きわめて類似性の高い語であるが、上図においては、「際」を境界そのもの、「端」を境界に近づいた方、としている。

「沖」は、一般的には、「海・湖」などのみにおいて用いられる語だが、広義には、「何かしらの境界から遙か遠く離れた所」を示す語であり、陸地にも用いられる。このため、「端」の反対側をさし、「外」に属す場所を示す語である。

以上のような構造において、「奥」は、様々な語と一致する。このことを、『2.2 「奥」空間の位置』において導き出した表を用いて指摘する。この際、以下の2つの場合に分けて整理する。

- i) 参照点が「外」にあるとき
- ii) 参照点が「内」にあるとき

i) 参照点が「外」にあるとき

『2.2「奥」空間の位置』において導き出したとおり、この場合、「奥」は以下のような場所を示す。



左からそれぞれ、「内」、「端」、「中」と一致する。

図 2.23 「奥」の位置

i-a) 領域全体

この場合「奥」は、「内」と同義語であり、「外」の対義語である。

i-b) 領域の片側

この場合「奥」は「端」と同義語であり\*1、「中」の対義語である。

\*1: ただし、端といっても、「外」とは遠い方の「端」を示す。下図参照。

i-c) 領域の中心側

この場合「奥」は「中」と同義語であり、「端」と対義語である。



以上のように、「奥」は、「内」「中」「端」と同義語である\*2ことがある。このことを下に図として示す。

\*2: 正確には、この3つのうちのいずれかと同義語である、というべきである。なぜなら、「奥」が「内」と同義語であるとき、それは、「中」や「端」とは類義語であっても同義語にはなり得なく、このことは「中」や「端」にも同様であるからである。

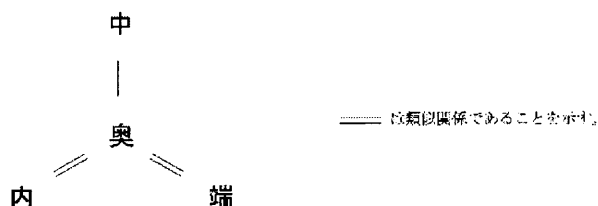
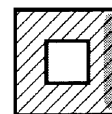


図 2.24 参照点が「外」にあるときの奥

ii) 参照点が「内」にあるとき

『2.2「奥」空間の位置』において導き出したとおり、この場合、「奥」は、「外」の、「内」から遠い方、すなわち、「沖」と同義語である。



「沖」と一致する。

図 2.25 「奥」の位置

このことを下に図として示す。



図 2.26 参照点が「内」にあるときの奥

以上のように、参照点が「外」にあるときは、「内」、「端」、「中」が、奥と同義語になり、参照点が「内」にあるときは、「沖」が、奥と同義語になる。

また、i) ii) いずれの場合も、「外」及び「際」、そして、外に属する「端」は、「奥」の同義語にならない。

## ■「表－裏」系

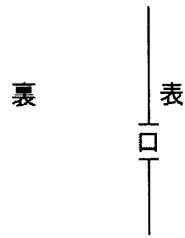


図 2.27 「表－裏」系の語の構造模式図

「表－裏」系の語は、上図のような構造を持つ。

「表」は、「物体や空間の正面にあたる」と考えて、ほぼ問題はない。  
あるいは、「正面付近」である。ここは、「口」が属する場所である。

「裏」は、「表」もしくは「表側」が決定されれば、必然的にその位置が決定されると、一見、考えられるが、実はそうではない。

例えば、右図にしめすように、あるとき（右図における I）は、物体あるいは空間の正面の反対側の面、すなわち、背面を示す。

またあるとき（右図における II）は、「裏庭」などという用例に代表されるように、物体あるいは空間の外部であり、かつ、正面（すなわち表）とは反対側の空間を示す。

さらにあるとき（右図における III）は、「ある面」の表側に対する裏側、あるいは、表側の空間に対する裏側の空間を示す。

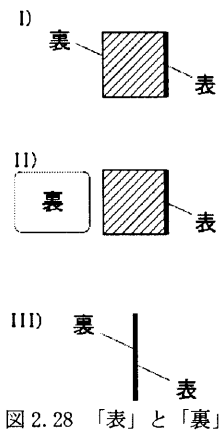


図 2.28 「表」と「裏」

『2.2 「奥」空間の位置』において整理した、「奥」空間の位置と比較すると、I、II は、「参照点が外部にあるのに対し、内部の、入り口から離れる方」に、III は「参照点が外部にあるのに対し、内部」と対応することに気付く。このことを右図に示す。

つまり、「裏」は、参照点が外にある場合において、「奥」と一致することがあるのである。

ちなみに、「表」は、いずれの場合においても、「奥」の対義語とはなるが、同義語となることはない。「口」に関しても、同様の事がいえる。

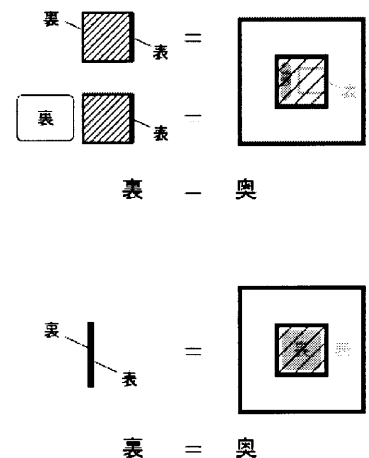


図 2.29 「裏」と「奥」



## 2.5 「奥」という語を含む形容詞

この節では、「奥」という語を含む形容詞、すなわち、「奥深い」、「奥床しい」という語の意味に関して、これまで論述されてきた「奥」の意味をふまえて、考察を行う。

形容詞とは、事物の性質・状態等を表す品詞である。

位置を示す語（前、内、表など）の中で、形容詞化されている語を容易に思いつくことはできない。しかし、「奥」という語については、「奥深い」、「奥床しい」という二つの語を容易に思い浮かべることができる。

この二つの語について考察、整理を行う事で、「奥」という語について論及する事ができると考えられる。

まずは、「奥深い」という語が示すものについて、論述を行う。

ここにおいて、「奥深い」という語は、一見、位置に関する情報しか示さないように思われるが、実は、空間的な性格に関する情報も示すことが、「奥深い」という語の用例から明らかになった。

さらに、「奥深さ」とは、位置と、様々な性格の総合によって測られていると考えることができるのである。

→ 2.5.1 「奥深い」という語に関して

次に、「奥床しい」という語が示すものについて、論述を行う。

「奥床しい」という語の存在は、我々日本人が「奥」を愛でる心を普遍的に持っている、ということを示す。

そして、「奥床しいもの」には、「奥深いもの」にはない、共通の性格があることを指摘することができる。

→ 2.5.2 「奥床しい」という語に関して

### 2.5.1 「奥深い」という語に関して

#### ■位置を示す語の形容詞化

位置を示す語が形容詞化されると、「ーがー（位置）にある状態」を示す、ということになる。

例えば、「ーは前しい」という語が、仮にあったとすると、それは、「ーは前にある」ということを示すであろう。この場合、「ーは前しい」という語は、「ーは前にある」というだけにすぎず、位置に関する情報を述べるだけなのである。

#### ■「奥深い」という語が示すのは、位置だけではない。

では、「奥深い」という語について考えてみよう。

「深い」という語の最も一般的な意味は、「表面から底までの距離が長い<sup>\*1</sup>」である。このため、「奥深い」という語は、「奥方向に距離が長い」という意味であると想定することができる。

\*1：広辞苑より抜粋

つまり、先程の「前しい」と同じく、「奥深い」という語は、「ーは奥方向に距離が長い」、あるいは、「ーは奥方向に距離が長い所にある」という、位置に関する情報を述べているにすぎないはずなのである。

果たしてこれは正しいのだろうか？

下の例について考えてみよう。

漆器の碗のいいことは、まずその蓋を取って、口に持って行くまでの間、  
暗い奥深い底の方に、――

－ 谷崎潤一郎：陰翳礼讃 －

この例において、「奥深い」という語は、位置に関する情報を述べているのではない。なぜなら、「底」という語が、「漆器の碗」における位置を示すのに十分な語であるからである。さらに、距離的な「深さ」を示しているのでもない、なぜなら、「底」と「口」とはそう離れていないからである。

この文章において、「暗い奥深い底」とあることから、「暗い」と「奥深い」が並列関係にあるということは明らかである。そして、「暗い」という語は、性格を表している。

つまり、ここにおいて「奥深い」は性格を示しているのである。

そして、おそらく、ここでの性格とは、「奥」空間が持ちやすい性格であろう<sup>\*2</sup>。

\*2：これに関しては、既に『2.3 「奥」空間の性格』において論述した。

## ■「奥深い」という語が存在する理由

先に述べた、「前しい」という仮想的な語に立ち戻ろう。

この語はおそらく、位置に関する情報しか伝えない。そうだとすると、「一前しい。」という文は、「一は前にある。」という文で、完全に代弁可能である。よって、「前しい」という語の存在理由はない、ということになってしまう。

しかし、「奥深い」という語は、前述したとおり、位置のみならず、性格に関する情報も伝えるのである。ここにおいて、この語の存在理由を説明することが可能であるとともに、「奥」という語の特異性を指摘できるのである。

## ■「奥深さ」の総合的な測定

さらに加えると、「奥深さ」とは下図のように、位置のみに依存するのではなく、性格に依存し、それらの総合によって測られると考えることができるのである。

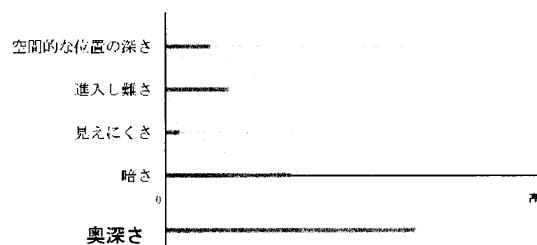


図 2.30 「奥深さ」の指標

## 2.5.2 「奥床しい」という語に関して

### ■「奥」を愛でる心の普遍性

「床しい」とは、「何となく知りたい、見たい、聞きたい。好奇心がもたれる。<sup>\*1</sup>」という意味である。

\* 1: 広辞苑より抜粋

つまり、「奥床しい」とは、「奥を、何となく知りたい、見たい、聞きたい。奥に好奇心が持たれる。」という意味である。そして、「奥床しいもの」とは、「奥床しい」と人に思わせるような「もの<sup>\*2</sup>」をさすのであろう。

\* 2: ここでいう「もの」とは、「物体」という狭義な意味ではなく、人や、物事も含まれる。

この語が、我々の共通言語の中に、ある種の普遍性を持って存在していることから、我々において、「奥深さ」を持った「もの」を「床しく」思う心は、普遍的に存在している、と考えられる。

なぜなら、この心が共通意識の中に存在しないのであれば、「奥床しい」という語は必要なく、「奥に床しい」という語で説明されるはずだからである。

例を挙げて説明しよう。

「花見」という語の意味は、文字通り、「花を見る事」であるが、「花」がしばしば「見る」対象とされいたから、この語が生まれたと考えられる。

そして、おそらく「草見」などという語が存在しないのは、「草」は「見る」対象とされることが稀であるからである、と考えることができる。

つまり、「奥床しい」という語の存在は、奥が、しばしば床しいと思われた、ということを暗示していると考えられるのである。

ここにおいて、我々日本人は、「奥」を愛でる心を普遍的に持っている、とすることができる。

## ■「奥床しいもの」が持つ共通点

「奥床しい」の用例を、様々な書物から抽出すると、  
「奥床しいもの」＝「奥深いもの」ではなく、なおかつ、  
「奥床しいもの」≠「奥深いもの」でもないことに気付く。

これは、「奥床しい」という語が、しばしば、[elegant:上品な][refined:精妙な]という、「奥深い」という語では説明がつかないような語で訳されることがある、ということからも明らかである。

以下、書物における「奥床しい」という語の用例をいくつか挙げる。

古風な感じがして、落ち着いているのはまことに奥床しく思われる。多くの大工が念を入れて美しく作り立て、舶来や和製の、珍しく凝った道具類を並べ置き、庭先きの草木まで自然のままでなく、手を加えてあるのはまったくがっかりさせられる。

－ 吉田兼好：徒然草 －

人の様子も、夜のともし火の光りで見えたのが、よいものも見えがし、物を言っている声も、暗い中で聞いたのが、嗜みのあるのは、奥ゆかしい。香りの匂いも、楽器の音も、ただ夜が、一段と結構である。

－ 吉田兼好：徒然草 －

四月の末、五月のはじめのころ、橘の葉が濃くつやつやと青い中に、花が真白に咲いているのが、雨の降った翌朝などにしっとり濡れている風情は、世にまたとない奥床しい美しさだ。

－ 清少納言：枕草子 －

(奥床しきもの) 見事に設備した部屋で、あかりはさし上げないで、炭櫃などにどっさりおこした火の光だけが、あたりを照らしているのに、御帳台の紐などがつややかに見えているのは、たいそうすばらしい。

－ 清少納言：枕草子 －

(奥床しきもの) 大体が雨のしめりけで香も一段とたちまさってすてきなふうだったが、こんなこと、珍しくもないことだけれども、どうして書かずにおられようか。

－ 清少納言：枕草子 －

御簾の縁や御几帳も青鈍色であり、その隙間隙間からちらちら見えている薄鈍色や梔子色の袖口などが、かえって優美で奥ゆかしくお見受けされる。

－ 紫式部：源氏物語 －

古画と暗い床の間との\_\_。つまりこの場合、その絵は覺束ない弱い光を受け留めるための一つの奥床しい「面」に過ぎないのであって、全く砂壁と同じ作用をしかしていないのである。

－ 谷崎潤一郎：陰翳礼讃 －

前頁の用例から、「奥床しいもの」の共通点を見出すことができる。以下に、その共通点を、「奥床しいもの」のまとめとして示す\*<sup>1</sup>。

\* 1 「奥深い」という意味では説明することができない点を示す。

・ わずかに他から際立ったもの\*<sup>2</sup>

空間において、少しだけ、他とは異なり、際立っているもの。

\* 2: これをよく示す用例を下に挙げる。

(奥床しきもの) 見事に設備した部屋で、あかりはさし上げないで、段櫃などにどっさりおこした火の光だけが、あたりを照らしているのに、御燵台の紐などがつややかに見えているのは、たいそうすばらしい。

- 清少納言：枕草子 -

・ 時にあったもの\*<sup>3</sup>

時の流れの中において、その時々だけに存在するもの。故に、移ろいやすく、はかないもの。

\* 3: これをよく示す用例を下に挙げる。

(奥床しきもの) 大体が雨のしめりけで香も一段とたちまきさってすてきなふうだったが、こんなこと、珍しくもないことだけれども、どうして書かずにおられようか。

- 清少納言：枕草子 -

・ 古びたもの\*<sup>4</sup>

最新のものではなく、古いもの。かといって古ければ古い程、奥床しいというわけではない。

\* 4: これをよく示す用例を下に挙げる。

古風な感じがして、落ち着いているのはまことに奥床しく思われる。多くの大工が念を入れて美しく作り立て、舶来や和製の、珍しく凝った道具類を並べ置き、庭先きの草木まで自然のままでなく、手を加えてあるのはまったくがっかりさせられる。

- 吉田兼好：徒然草 -

・ 日常生活の延長上にある非日常的なもの\*<sup>5</sup>

とてもめづらしいものではなく、日常性のあるもの。かといって、あまりに日常的な物ではない。日常的な生活の延長上にあるが、少し、非日常的なもの。

\* 5: これをよく示す用例を下に挙げる。

四月の末、五月のはじめのころ、梅の葉が濃くつやつやと青い中に、花が真白に咲いているのが、雨の降った翌朝などにしっとりと濡れている風情は、世にまたとない奥床しい美しさだ。

- 清少納言：枕草子 -

・ 作為性の低いもの\*<sup>6</sup>

わざとらしく、「奥床しく」なるよう手の加えられたものではなく、自然にできたもの。

\* 6: これをよく示す用例を下に挙げる。

古風な感じがして、落ち着いているのはまことに奥床しく思われる。多くの大工が念を入れて美しく作り立て、舶来や和製の、珍しく凝った道具類を並べ置き、庭先きの草木まで自然のままでなく、手を加えてあるのはまったくがっかりさせられる。

- 吉田兼好：徒然草 -

### 3.1 「奥」空間の観察方法

#### 3.1.1 観察対象とする神社建築の選定

#### 3.1.2 観察対象とする神社建築の概要

- ・皇大神宮
- ・豊受大神宮
- ・住吉大社
- ・松尾大社
- ・賀茂御祖神社
- ・賀茂別雷神社
- ・大神神社

#### 3.1.3 観察の方法と流れ

### 3.2 神社建築の空間構造における「奥」空間

#### 3.2.1 立地構成

#### 3.2.2 境内の空間構成

#### 3.2.3 聖域内の空間構成

### 3.3 「奥」空間のまとめと考察

---

## 第3章 神社建築の空間構造における「奥」空間

### 3.1 「奥」空間の観察方法

第2章において、「奥」とは、どのような位置にある空間であるか、そして、どのような性格を持つことがあるか、という二項目に関して整理を行い、「奥」空間の位置と性格を体系的に捉えた。

これにより、特定の建築物における「奥」空間のあらわれを観察するための、基盤が構築することができた。

この章では、「奥」空間を観点として、神社建築の空間構造を観察する。すなわち、[「奥」空間が、神社建築において、どのようにあらわれているのか]を観察するのである。

この観察は、以下の点を目的としている。

1. 第二章において整理した、「奥」空間の位置と性格、という観点をもとに、特定の建築物において、「奥」空間の観察を行うことができる、ということを示すこと。
2. この観察によって、神社建築の空間構造の特性を指摘することで、「奥」を観点とした建築物の観察の、有用性を示すこと。

観察対象とする神社建築は、7社であり、それらは、神社建築の空間構造を代表するものである。

→ 3.1.1 観察対象とする神社建築の選定

観察対象とする神社建築の特徴を把握するために、それぞれの神社建築に関して簡単な説明を行う。また、立地の有様、及び、境内の空間構成がわかるよう、航空写真と地図を掲載する。

→ 3.1.2 観察対象とする神社建築の概要

観察は、3段階、すなわち、立地構成、境内の空間構成、聖域内の空間構成、において行われる。それぞれの段階において、どのような位置の「奥」空間があるか、あるいは、どのような性格を持つ「奥」空間があるか、を観察する。

→ 3.1.3 観察の方法と流れ



### 3.1.1 観察対象とする神社建築の選定

観察の対象とする神社建築を以下に示す<sup>\*1</sup>。

- 皇大神宮（こうたいじんぐう）：三重県伊勢市
- 豊受大神宮（とようけだいじんぐう）：三重県伊勢市
- 住吉大社（すみよしたいしゃ）：大阪府大阪市
- 松尾大社（まつおたいしゃ）：京都府京都市
- 賀茂御祖神社（かもみそじんじゃ）：京都府京都市
- 賀茂別雷神社（かもわけいかづちじんじゃ）：京都府京都市
- 大神神社（おおみわじんじゃ）：奈良県桜井市

\* 1：『岡田米夫（著）：神社，東京堂出版，1977』における社名を用いている。

皇大神宮は、伊勢神宮内宮、  
豊受大神宮は、伊勢神宮外宮、

住吉大社は、住吉神社、

松尾大社は、松尾神社

賀茂御祖神社は、下鴨神社

賀茂別雷神社は、上賀茂神社、

大神神社は、三輪社、

と、それぞれ呼ばれることがある。

なお、皇大神宮と豊受大神宮、賀茂御祖神社と賀茂別雷神社は、それぞれ関係の深い神社であり、書物によっては二つで一つの神社として扱われることもあるが、本研究は、「空間構造」に着目しているため、互いに十分離れているこれらの神社を独立したものとして扱っている。

これらの観察対象は、「神社建築」の空間構造を代表するものとして、選定した。選定基準は以下のとおりである<sup>\*2</sup>。

1. 『二十二社』において格付けられた神社のうち、上社・中社に属するもの。
2. 神社の成立が、飛鳥時代よりも前、とされているもの。
3. 昔の姿をとどめているもの。

\* 2：『1.3.2 研究の対象』において既に論述したが、神社建築を対象としたのは、以下の理由による。

・基本的な意味で、「街に対して奥」にある。

・日本特有の建築空間である。

・建築物単体をこえた視点で観察することができる。

・様々な意味での「奥」がある可能性がある。

・神社建築の空間体験は我々の意識の中に共有されている。

#### 1 に関して

『二十二社』とは、平安時代に成立した神社の社格の一つであり、社格の高いものから順に上七社、中七社、下八社がある<sup>\*3</sup>。観察対象の神社建築は、全て社格の高いものであり、古くから重宝されているものである。

\* 3：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』を参考にした。

#### 2 に関して

飛鳥時代に大陸文化が入り込み、神社建築だけでなく、日本建築は一般的に、大きな変換を遂げた<sup>\*4</sup>。それ以後にも、日本建築には幾度とない転換期があった。飛鳥時代より前に成立した神社建築を取り扱うことで、初期の神社建築を取り扱うことができる。

\* 4：井上充夫氏は、著書『日本建築の空間，鹿島出版会，1969』において、大陸文化が輸入された、飛鳥・白鳳時代ごろの日本建築の構成を「彫塑的構成」と名付け、それ以前の日本建築の構成と区別し、その差異を指摘している。

#### 3 に関して

1.2. の選定基準のみでは、石上神宮、大和神宮が含まれるが、これら二社は、本殿の付け加え、鎮座地の変換が行われており、古くからの姿と現在の姿は大きく異なる。このため観察対象としない。

また、これらの神社は以下のような共通点を持っている。

1. 旧社格が、神宮もしくは官幣大社である。
2. 式内社である。
3. 神を祀るものである。

1, 2 に関して

『旧社格』とは、国家が定め、明治4年一戦後まで採用されていた社格である。社格の高いものから、神宮、官幣大社、国幣大社、官幣中社、国幣中社、官幣小社、国幣小社、となっている。『旧社格』は、現在において、神社の社格を表す際に、一般的に用いられている。

式内社とは、神祀官の神名帳（『延喜式』：927年）において掲げられた神社である。

つまり、対象とした神社建築は、古くから現在にわたり重宝された神社なのである。

3 に関して

神社には、大別して、「神」を祀るものと、天皇や豪族などといった「人」を祀るものがあるが、明治神宮や北野天満宮、平安神宮（右図）に代表されるように、「人」を祀る神社は、「街の中に位置する」「寺院建築あるいは宮殿建築のような配置構成である」という点において、「神」を祀る神社とは大きく性格を異にする。



図 3.1 平安神宮

このため、観察対象とする神社建築が、「神」を祀るものという共通点を持つ、ということは、その空間構造においても共通する性格がある、ということであり、かつ、神社としては本質的なものである、ということなのである。

以上述べてきた点から、先に挙げた7社を、「神社建築」の空間構造を代表するに相応しい神社である、と考え、選定した。



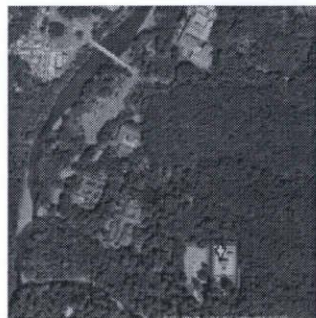
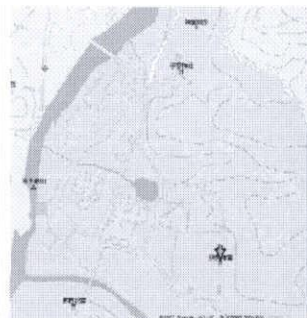
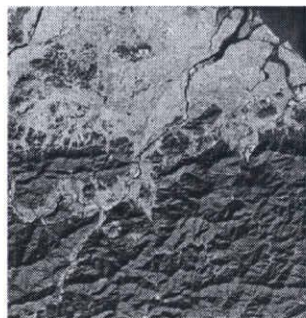
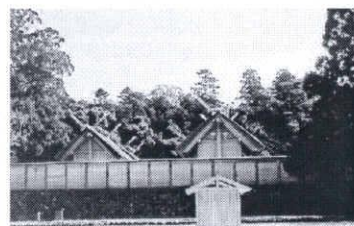
### 3.1.2 観察対象とする神社建築の概要<sup>\*1</sup>

\*1：概要の第一段落に書かれた文章は、『岡田米夫（著）：<神社>，東京堂出版，1977』及び、『白田甚五郎（監）：新・日本神社100選，秋田書店，1990』を参照したものである。

#### ■皇大神宮

神路山の麓、五十鈴川のほとりに鎮座する皇大神宮は、皇祖天照大神をお祭りし、古来、国家制度の上で最重要の神社であり、国民崇敬の中心でもあった。皇大神宮の境内・境外には大小多くの別宮・摂社・末社がある。

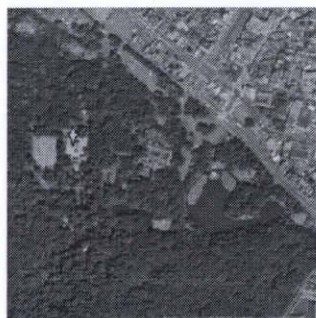
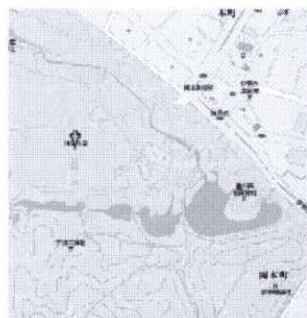
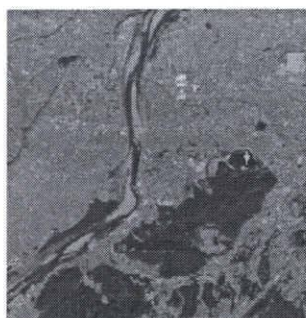
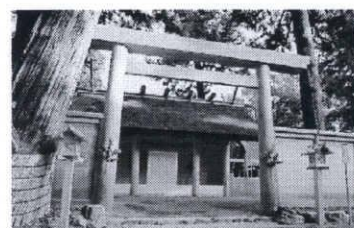
アプローチは、五十鈴川を渡った後、右に一度折れ、また五十鈴川とぶつかった所で左に折れる。本殿は、その突き当たりを右にゆく階段を上った先にある。



#### ■豊受大神宮

豊受大神宮は、外宮とも呼ばれ、皇大神宮（内宮）をあわせて伊勢神宮と呼ぶのが一般的である。皇大神宮が神路山の麓に鎮座するに対し、豊受大神宮は山田原の平地部に鎮座する。

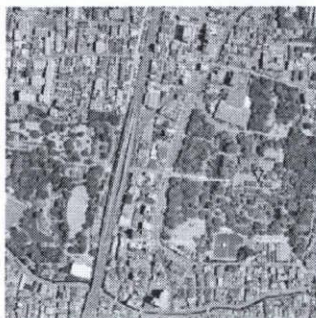
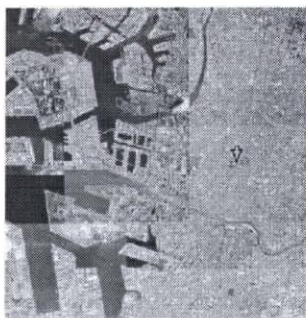
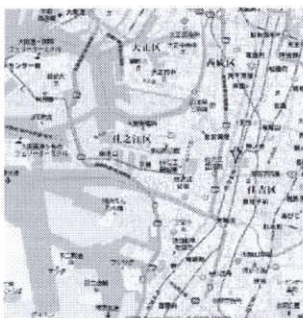
小さな太鼓橋を越えたすぐ後に鳥居があり、そこから屈曲する道を進んでいった突き当たりに本殿がある。本殿への入り口付近に、奥社へ続く階段がある。



#### ■住吉神社

現在、住吉大社の地は、密集した市街地の中にあるが、古来においては、すぐ近くまで海が迫っていた。現在の本殿は1708年の再建であるが、古式を存しての配置が珍しい。

社前にはアプローチと直交する川があり、太鼓橋がかけられている。境内において、本殿が縦に3列並んである。本殿と拝殿が接続しているのも特徴的である。

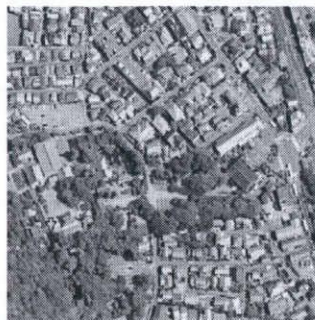
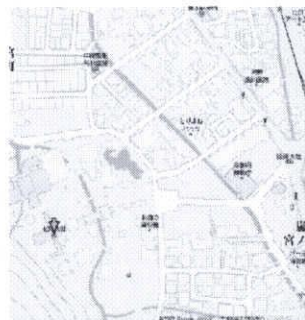
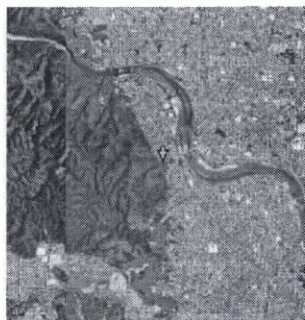
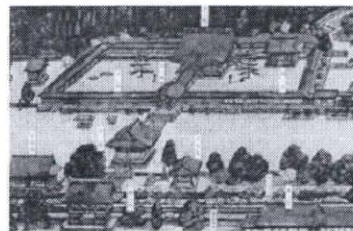




## ■松尾神社

京都の中心地から東に向かい、桂川を渡った突き当たりに、松尾大社がある。本殿の他に、拝殿・楽殿・神饌所・楼門・勅使官などがある。松尾の神は酒造の神とされていることから、境内には数多くの酒樽がある。

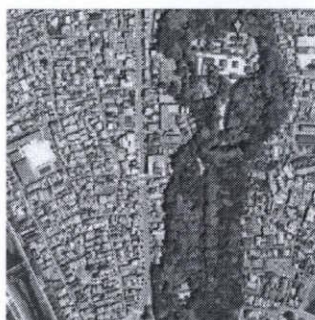
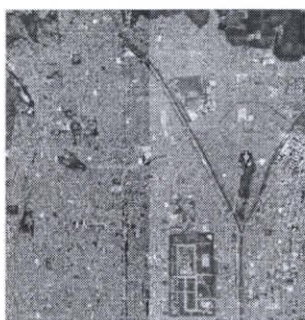
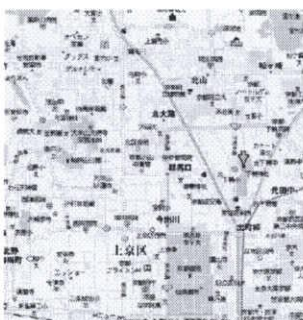
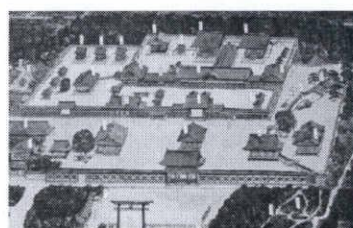
桂川を越えると第一鳥居があり、そこから屈折した道を入った所に楼門が控えている。その楼門から山を少し登るようにして入った所に本殿が控えている。



## ■賀茂御祖神社

京都を縦断する賀茂川は、北部で二股に分かれている。賀茂御祖神社は、その分岐点の付近に鎮座する神社である。賀茂御祖神社から北西にすこし行った所に賀茂別雷神社が鎮座し、二つを合わせて賀茂神社ともいう。

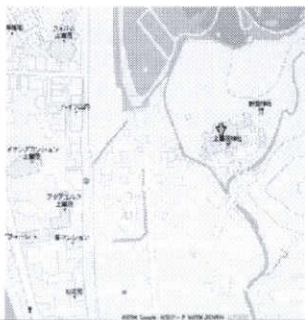
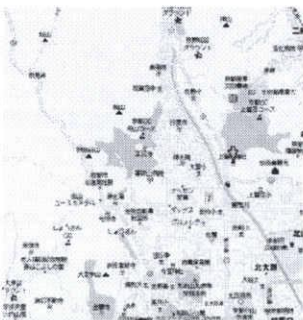
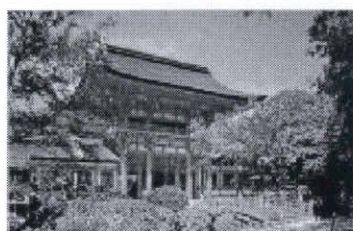
賀茂御祖神社は平地の森の中にある。川の方岐点の付近にある鳥居を越えた後まっすぐ長い道を少し屈折しながら入って行った所に本殿がある。



## ■賀茂別雷神社

賀茂別雷神社は、賀茂御祖神社の北部（賀茂川上流）に位置する。このことから前者を上賀茂、後者を下鴨と呼ぶ。賀茂別雷神社は、その名からして賀茂川上流の雷神信仰に由来するとされている。

直線の長い道を進んだ先には、鳥居があり、広場のような空間が控えている。本殿はそこから、屈折を繰り返し、小川を渡り、階段を上った所にある。

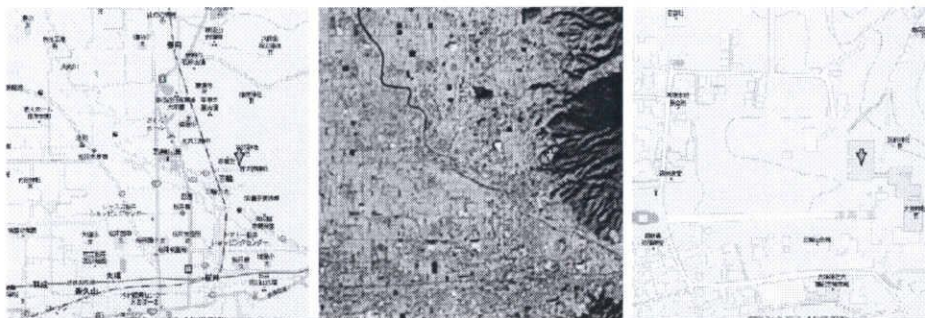
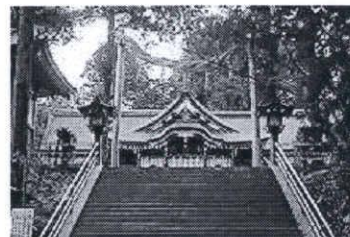




## ■大神神社

大神神社は、三輪山そのものを神体山としているため、本殿がなく、三輪山に向かって3つの接続の鳥居を立て、その手前に拝殿だけが設けてある。古代信仰はこのように神体山を拝むものであり、現在のように社を拝むのではなかった。

大鳥居を越えて、入って行く途中には階段が数カ所あり、これを登った先に拝殿が控えている。拝殿の裏には神体山が控えている。



## ■用語の定義

本研究の観察において用いられる、用語の意味を示しておく。

**境内：**神社建築の境域内部を示す。第一の鳥居を境内の入り口と見なすこととする。

**聖域：**玉垣などによって囲われた、本殿が鎮座する場所を示す。神域などと呼ばれることがあるが、「聖域」という語で統一する。拝殿を、聖域の入り口と見なすこととする。

**本殿：**神社の境内に存在する様々な社の中でも、神霊を泰安する社殿を示す。正殿などと呼ばれることがあるが、「本殿」という語で統一する。

## ■現在の空間構造を観察対象とする

「奥」空間のあらわれが観察の対象であって、神社建築の空間構造の歴史の変遷等が観察の対象ではない。このため、観察は、現在の空間構造において行われるものとし、空間構造に関する、いっさいの歴史的变化を無視することとする。

3.1.3 観察の方法と流れ

観察は、下表のような枠組みにおいて行われる。

神社建築の空間構造において、どのような「奥」空間があらわれているのかを観察するのである。

表 3.1 観察の方法（丸の位置は実際に行った観察とは無関係である）

		「奥」空間							
		「奥」空間の位置				「奥」空間の性格			
		□	□	□	□	□	□	□	□
神社建築の空間構造	立地構成	□ →	○			○	○		
		□ →		○				○	
		□ →				○	○		
		□ →	○				○		
	境内の空間構成	□ →	○			○			
		□ →		○			○	○	
		□ →				○			
		□ →					○		○
	聖域内の空間構成	□ →	○				○		
		□ →	○				○	○	
		□ →							
		□ →	○						○

神社建築の空間構造を、立地構成、境内の空間構成、聖域内の空間構成、と3つの段階に分けて捉える<sup>\*1</sup>。つまり、全体から部分まで大まかに俯瞰する視点で観察を行うのである。

観察対象とする神社建築が共通に持つ構成を、3つの段階それぞれにおいて、複数抽出する。

抽出した各構成において、神社境内、もしくは聖域、本殿が、どのような「位置」の「奥」空間となり、どのような「性格」を持つ「奥」空間となっているのかを観察する。

共通に持つ構成とは、観察対象とする全ての神社建築が持つ構成ではなく、大体の（具体的には7社中5社以上<sup>\*2</sup>）の神社建築が持つ構成をさす。

\* 1：それぞれの段階での観察点は以下のとおりである。  
立地構成においては、街に対する、境内の位置・性格について。  
境内の空間構成においては、境内における、聖域の位置・性格について。  
聖域内の空間構成については、聖域における、本殿の位置・性格について。

\* 2：『聖域内の空間構成』においては、特殊形式である大神神社を除外するため6社中4社以上とする。

## 3.2 神社建築の空間構造における「奥」空間の観察

### 3.2.1 立地構成

#### ■立地構成の共通点

観察対象とした神社建築は、立地構成において、以下のような共通点を持つことが明らかになった<sup>\*1</sup>。

1. 神社境内は、山（もしくは森）に包含されている（もしくは、山や森と重合している）。

→山や森への包含・重合関係

2. 神社の手前において、大きな川が、街から神社へ方向と直交方向に、流れている。

→川による遮断

3. 神社の外側から、神社の内部を伺うことはできないようになっている。

→内部の不可視

\* 1: 観察対象神社の中で、このような共通点を持ったものを、それぞれ示す

1. は、7社中6社（住吉大社以外）

2. は、7社中5社（住吉大社・大神大社以外）

3. は、7社中7社

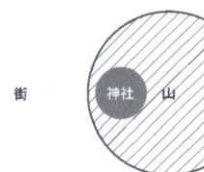


図 3.2 山や森への包含、重合関係



図 3.3 川による遮断



図 3.4 内部の不可視

#### ■山や森との包含・重合関係

観察対象とした神社の境内は、ほぼ全て、山（もしくは森）に包まれるようにして、あるいは、山と重なり合うようにして、存在している。（右図）

ほぼ全ての人は、山や森を基準にするよりも、街を基準にするであろう。このため、神社境内は、『参照点』が外部（街）にあるのに対し内部（山もしくは森）』という位置の「奥」に相当する、ということになる。

さらに、神社境内は、山や森という、公の場所（街）から『特定目的の場所』へと入った方であり、さらに、『進入し難い場所』、『暗い場所』、『見えにくい場所』である、ということを指摘することができる。

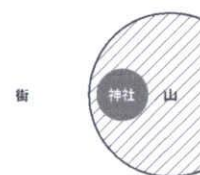


図 3.5 山や森への包含、重合関係

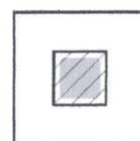


図 3.6 街に対する境内の位置<sup>\*2</sup>

\* 2: 図の灰色部分が、境内の位置にあたる。

斜線部が山もしくは森、白い部分が街にあたる。



## ■川による遮断

街から神社境内に行くには、その手前を横切る大きな川を渡らなければならない、ということが多い。

ここにおいて、川は、街を内側と外側に引き離す要素である。

神社境内は、外側に属し、かつ、川から離れた場所に存在する。このため、神社境内は、『「参照点」がある領域（街）と隣り合う領域の、境界（川）から離れる方』という位置の「奥」に相当する、ということになる。

神社はこのように、川の向こう側という意味において、公の場所から『特定目的の場所』へと入った方であり、さらに、『進入し難い場所』なのである。

## ■内部の不可視

神社境内の手前から、その内部の大まかな様子を伺う、ということは、基本的に不可能である。観察対象とした神社は全て、入り部において、内部はほとんど見えない。

山中にしばしば立地される建築物として、神社建築以外には、城郭建築や寺院建築を思い浮かべることができる。

しかし、城郭建築や寺院建築においては、塔が存在し、しかも、本堂や天守閣は大きく、街から見えるように作られている。このため、城や寺院のその存在は、街に対して確固として示されているのである。この点において、神社建築と城郭建築・寺院建築は大きく性格を異にするものなのである。

では、神社の存在を街から確認できないかという、そうではない。なぜなら鳥居の存在によって、神社の存在は暗示されているからである。鳥居ではなくとも、周囲から際立った木々が、局所的に生い茂る場所に神社を見出すことは、誰もが経験することであろう。

このように、神社境内は、鳥居や自然環境によってその存在を暗示してはいるものの、内部は『見えにくい場所』である。



図 3.7 川による遮断



図 3.8 街に対する境内の位置<sup>※1</sup>

※1：図の灰色部分が、境内の位置にあたる。斜線部が街の川を挟んだ外側、白い部分が街の川を挟んだ内側にあたる。



図 3.9 内部の不可視



図 3.10 寺院建築のたたずまい



図 3.11 城郭建築のたたずまい



図 3.12 神社建築のたたずまい



### 3.2.2 境内の空間構成

#### ■境内の空間構成の共通点

観察対象とした神社建築は、境内の空間構成において、以下のような共通点を持つことが明らかになった<sup>\*1</sup>。

\*1：観察対象神社の中で、このような共通点を持ったものを、それぞれ示す

1. は、7社中7社
2. は、7社中5社（住吉大社・大神大社以外）
3. は、7社中7社
4. は、7社中7社
5. は、7社中7社

1. アプローチ空間において、鳥居や楼門、小川などといった、進行方向と直交する要素が多く存在する。

→進行を遮断する要素

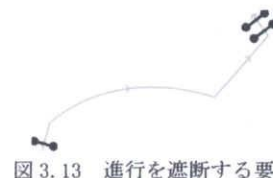


図 3.13 進行を遮断する要素

2. アプローチは複数の屈折点・湾曲部を持っている。

→複数の屈折点・湾曲部



図 3.14 複数の屈折点・湾曲部

3. アプローチにおいて、下ること、あるいは、引き戻ることはない。

→後退のなさ



図 3.15 後退のなさ

4. 本殿・聖域は行き止まりに位置する。

→行き止まり

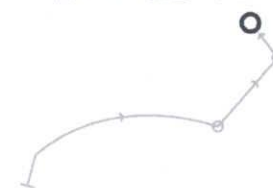


図 3.16 行き止まり

5. 聖域はアプローチの最後の方において初めて見えるようになっている。

→聖域の不可視



図 3.17 聖域の不可視

## ■進行を遮断する要素

神社境内には、社殿の他に、様々な要素がある。すなわち、鳥居、楼門<sup>\*1</sup>、拝殿、対になった狛犬、灯籠などである。以上挙げた要素は全て、人々の進行方向に対して直交するようにして配置されている。つまりこれらは、進行を遮断する要素<sup>\*2</sup>なのである。このように神社建築には、数多くの進行を遮断する要素が存在するのである。

進行を遮断する要素は、神社境内の領域を、入り口側と聖域側に二分する。人々は境内の外から神社を訪れるため、当然入り口側を、参照点とするだろう。

このため、聖域は、『「参照点」がある領域（入り口側）と隣り合う領域（聖域側）の、境界から離れる方』という位置の「奥」に相当する、ということになる。

このことから更に、聖域は、複数の障壁を越えてゆかねばならない『進行し難い場所』であり、『特定目的の場所』である、ということを指摘することができる。また、聖域は当然のことながら『進行先の場所』である。

## ■複数の屈折点・湾曲部

境内のアプローチ空間において、「進行を遮断する要素」がある地点の付近に、屈折点がとられている<sup>\*3</sup>ことが多い。

これにより、各地点ごとにおける遮断性は高くなっており、本殿側への『進入のし難さ』も同時に高くなる。ここにおいても、神社は『「参照点」がある領域（入り口側）と隣り合う領域（聖域側）の、境界から離れる方』という位置の「奥」に相当する（上と同様）、ということができる。

そして、聖域は、『進行先の場所』である。

また、複数の屈折点・湾曲部は、視界の抜けをなくす。すなわち、聖域側の領域を『見えにくく』するのである。

大神神社は、境内のアプローチ空間において、屈折点や湾曲部を全く持たないが、かわりに階段が『見えにくさ』を作り出す要素として働いている。神社において必要以上に太鼓橋（右図）が用いられることも、『見えにくさ』の創出と関連性が高いと考えられる<sup>\*5</sup>。

\* 1: 本来、楼門は寺院建築の要素であるが、神社建築に用いられるケースも非常に多いので、神社建築の要素として取り上げる。

\* 2: 鳥居や楼門、拝殿などはいままでもないが、狛犬や灯籠なども、意図的に、対になるよう配置されているため、進行を遮断する要素となっているといえる。



図3.18 境内に対する聖域の位置<sup>\*3</sup>

\* 3: 図の灰色部分が、聖域の位置にあたる。斜線部が進行を遮断する要素を挟んだ聖域側、白い部分が進行を遮断する要素を挟んだ入り口側



図3.19 進行を遮断する要素

\* 4: 「鳥居がある所が屈折点になっている」などがこれにあたる。



図3.20 複数の屈折点・湾曲部



図3.21 住吉大社の太鼓橋

\* 5: これらの要素は、意図して作られたものではない可能性は大いにあるが、この屈折・湾曲が作り出す『見えにくさ』が、神社になかったとしたら、我々の神社に対するイメージは大きく異なっていたであろう。

## ■後退のなさ

聖域が、入り口より標高が高い場合、下る、すなわち、鉛直軸をとった時に下の方に進む、という行為は、聖域から遠ざかることに等しい。聖域と入り口の標高が等しい場合にも、同様のことがいえる。

観察対象とした神社建築のアプローチ空間において、下ることはない（右図の右側参照）。また、水平面でみたとき、アプローチの方向は、変化することはあっても、本殿から遠ざかる方向にはない（右図の左側参照）。

両者に共通するように、神社建築の境内において、聖域と遠ざかる方向への進行を強いられることはない。つまり、聖域は、『進行先の場所』なのである。

そして、聖域は、『ある領域内（境内）における、「参照点（参拝者が存在する位置）」から遠ざかる方』という位置の「奥」に相当する。



図 3.22 後退のなさ  
(左が水平面における後退のなさ、  
右が鉛直軸における後退のなさ)



図 3.23 境内に対する聖域の位置<sup>\*1</sup>  
\* 1: 図の灰色部分が、聖域の位置にあたる。  
斜線部が境内にあたる。

## ■行き止まり

聖域は常に行き止まりに存在する。つまり、ここにおいて人々は、それ以上「進む」ということはできなく、やってきた方向に「戻る」ことしかできないのである。

聖域は、『進行先の場所』である、という性格をしっかりと持っているのである。

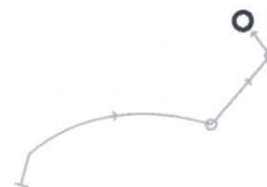


図 3.24 行き止まり

聖域内の本殿を拝むことが参拝者の目的であるから、聖域より先の部分に行く必要はそもそもなく、よって、聖域が「行き止まり」にあるということは当然なのではないか、という立論は一見正しい。

しかし、多くの摂社・末社・奥社などを持つ神社建築において、それぞれの聖域が「行き止まり」にあるということは、必然的なことではない。

多くの社殿を持つ神社の代表例として、皇大神宮を挙げる（右図）。ここにおいて、本殿へと進む道は、他の付属的な社殿への道と、ずいぶん手前で分けられていることに気付く。（本殿の拝殿から、荒祭宮などに詣るには、来た道をずいぶん戻る必要がある。）

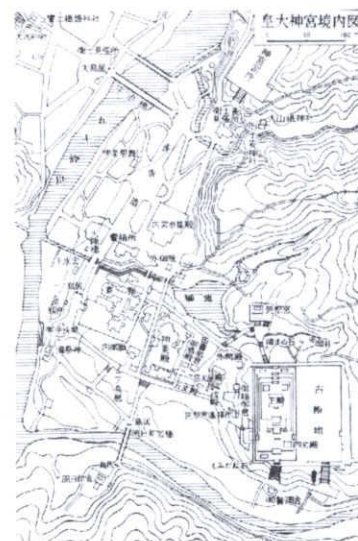


図 3.25 皇大神宮配置図



## ■聖域の不可視

神社の入り口、すなわち、第一の鳥居をくぐった瞬間に、聖域が見える<sup>※1</sup>、などということはごくごく稀である。

観察対象とした神社において、そのような神社はないばかりか、基本的に、聖域は、境内内部に入ってから、ずいぶん進んだ後によりよく見えるものである。

例えば、賀茂別雷神社においては、第一の鳥居をくぐり、第二の鳥居をくぐり、境内内部を曲がりながら進行し、楼門をくぐった後に、初めて、拝殿が目の前に現れるのである。(下図参照)

このように、境内において、聖域は、『見えにくい場所』となっている。

ここから更に、聖域は、『進入し難い場所』となっている。



図 3.28 賀茂別雷神社におけるシーケンス

人々は、拝殿を「見る」ことによって、初めて、聖域の存在を確認するわけではない。なぜなら、『鳥居』の存在は、『聖域』の存在を暗示するからである。

あらかじめ、自分の付近にある、ということを知らされている「もの」が、進めど進めどなかなか見えてこない時、それは、『見えにくいもの』として、人々に認識されるであろう。

よって、おそらく「鳥居」は、聖域の『見えにくさ』を作り出すための重要な要素である。

ここにおいて、「鳥居には非常にたくさんのデザインが施されている」ことの理由を、説明できるのではないだろうか。

※1:「聖域が見える」というのは、正確にいうと、「目視によって聖域の存在・位置を確認する」ということを示している。多くの場合、拝殿の目視によって確認される。



図 3.26 聖域の不可視



図 3.27 賀茂別雷神社配置図

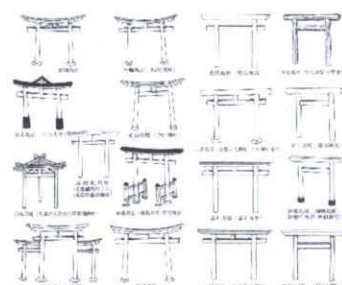


図 3.29 様々な鳥居のデザイン

### 3.2.1 聖域内の空間構成

#### ■聖域内の空間構成の共通点

観察対象とした神社建築は、聖域内の空間構成において、以下のような共通点を持つことが明らかになった<sup>\*)</sup>。

1. 本殿は、聖域内の中央かつ後方に存在する。

→中央後方配置

\*) 1: 観察対象神社の中で、このような共通点を持ったものを、それぞれ示す。

なお、「聖域内の空間構成」においては、大神神社は「本殿を持たない」という特殊形式であるため、観察対象外とする。

1. は、6 社中 5 社 (住吉大社以外)

2. は、6 社中 6 社

3. は、6 社中 4 社 (皇大神宮・豊受大神宮以外)

4. は、6 社中 6 社

5. は、6 社中 6 社



図 3.30 中央後方配置

2. 本殿の床面は高く、軒先は低いため、両者の間の鉛直距離は、非常に狭くなっている。

→床面と軒先の間の鉛直距離



図 3.31 床面と軒先の間の鉛直距離

3. 拝殿から本殿の正面を眺めた時、そこに見えるのは、拝殿や通路の天井によって作り出された暗がりである。

→暗がりの中の本殿正面



図 3.32 暗がりの中の本殿正面

4. 本殿は拝殿の手前からほとんど見えなく、さらに、入ることは許されていない。

→本殿の不可視・不可侵



図 3.33 本殿の不可視・不可侵

5. 拝殿と直交する中心軸は、本殿におけるそれと等しい。つまり、本殿は拝殿に対峙するような構成になっている。

→拝殿に対峙する本殿



図 3.34 拝殿に対峙する本殿

## ■中央後方配置

下に、観察対象神社の聖域内の空間構成を示す。

聖域内において、本殿は右図に示すとおり、拝殿を通る中心軸上、すなわち中央に位置し、かつ、拝殿から離れた方、すなわち後方に存在する。

人々は、聖域内に進入できないため、基準を聖域の外におく。ここにおいて、本殿は、『「参照点」が外部（聖域の外）にあるのに対し、内部（聖域の内）の、入り口から離れる方』と、『「参照点」が外部（聖域の外）にあるのに対し、内部（聖域の内）の中心側』との中間点の「奥」相当する、といえる。

## ■床面と軒先の間の鉛直距離

本殿の奥行き方向の断面を考えた時、ほとんどすべての神社は以下のような構成を持つ。すなわち、下部においては、地面から1m前後上がった所に床面があり、床面と地面の間を階段がつなぐ。上部においては、深く、低い軒先が棟から離れたところにある。

これは、なにも神社建築に限った構成ではないが、床面の高さと、軒先の高さとの鉛直距離の狭さは、神社建築の特色であると考えられる。

これにより、本殿への入り口は、わずかに垣間見えるだけになっている。つまり、この構成によって、本殿の入り口は、『見えにくい場所』となっており、さらにそれが、『進入し難さ』を彷彿させるのである。

この様な構成は、流造（右図）に代表されるが、何も流造に限ったことではない。

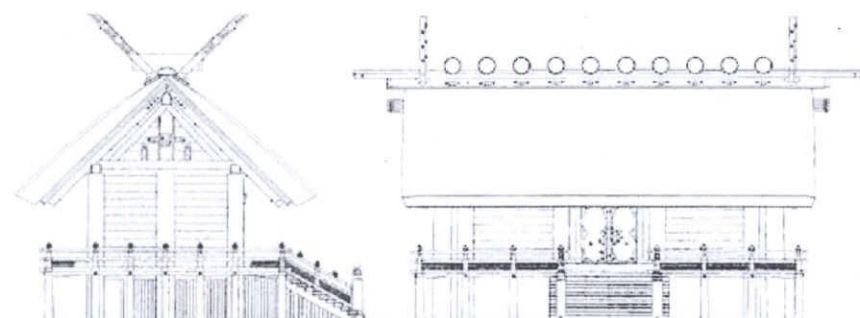


図 3.40 皇大神宮本殿の断面図及び立面図



図 3.35 中央後方配置

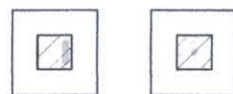


図 3.36 聖域に対する本殿の位置<sup>\*1</sup>

\*1: 図の灰色部分が、本殿の位置にあたる。斜線部が聖域内部、白い部分が聖域外部にあたる。二つの上図の中間点の「奥」に相当する。

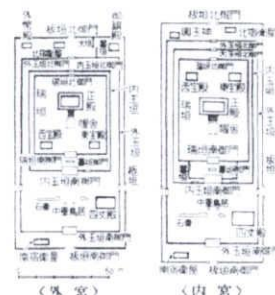


図 3.37 伊勢両宮の聖域内の空間構成



図 3.38 床面と軒先の間の鉛直距離



流れ造（賀茂神社）

図 3.39 流造



## ■暗がりの中の本殿正面

本殿と拝殿<sup>\*1</sup>の間を、屋根を持った通路で繋ぐ神社、あるいは本殿と拝殿が接続している神社は多くある。観察対象とした神社の内、松尾大社、賀茂御祖神社、賀茂別雷神社、住吉大社がこれにあたる。

このような神社においては、拝殿から本殿の正面を眺めると、そこは陰になっており、暗くてよく見えない。

このように、本殿の正面部分は、暗がりの中にあるといつてよい。

これにより、そこは『暗い場所』であるばかりか、『進入難い場所』、『見えにくい場所』となっている。

また、伊勢両宮においては、一般参拝者が礼拝を行う拝殿（外玉垣南御門）から、本殿を眺めた時、見えるのは、別の拝殿（内玉垣南御門）である。そして、その拝殿（内玉垣南御門）は軒が深く低い。

この場合もやはり、拝殿（外玉垣南御門）から眺めることができるのは、暗がりなのである。

多くの神社建築は、神社建築の大半を占める流造に代表されるように、軒が非常に深く、また、低い。このため、本殿の正面は暗がりの中にあるのである。

\*1:ここでいう拝殿とは、一般参拝者がたどることができる限界点で、参拝者がそこから本殿を拝む所をさしている。このため、厳密には拝殿とは言わないものも、拝殿と呼んでいる。例えば、本研究において皇大神宮の「拝殿」と呼ぶ時、それは「外玉垣南御門」をさす



図 3.41 暗がりの中の本殿正面

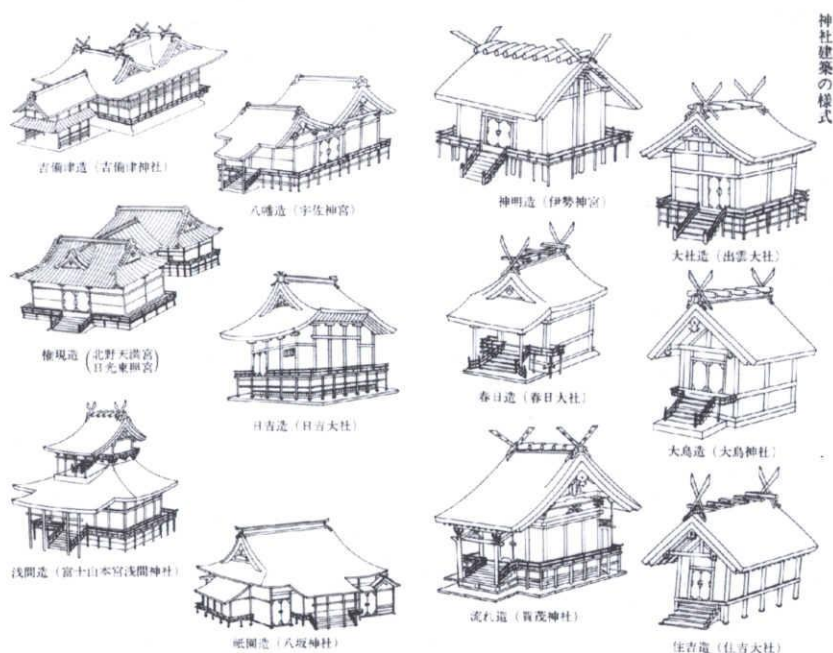


図 3.42 様々な神社建築の様式（どれも軒が深く低いことに気付く）

## ■本殿の不可視・不可侵

拝殿の手前において、本殿の大部分を見ることは出来ない。つまり、本殿は、「見えにくい<sup>※1</sup>」のである

それは、拝殿の口が狭く奥行きが長いことからいえるが、伊勢両宮などのような場合は、拝殿に半透明の白幕がつり下げられており（右図参照）、本殿を見せないようにしている。

また、当然のことながら、本殿及び聖域内への進入は許されていない。

このように、本殿は外面が『見えにくく』、また、内部が『見えなく』、『進入できない』である。

神社を描いた絵には、本殿の部分に、霧や雲がかかっているものを数多く見受けられる（下図参照）。また、本殿の全体を意図的に描かず、部分だけを描いたものも多い。

これは、「神社の形態に関する情報」を伝えるよりも、「見えにくさ」を伝えることを優先した事によると考えられ、「見えにくい」ということは、神社が持つべき性格とされていることを物語っている。



図 3.45 神社本殿が描かれた図（住吉大社）

## ■拝殿に対峙する本殿

拝殿と本殿は平行に配置され、両者は一つの中心軸によって束ねられている。これは、ほとんどすべての神社にあてはまる、聖域内の空間構成である。このように、本殿は拝殿に対峙している。

拝殿の手前に我々は存在し、本殿は、聖域の後方部に存在する、このため、本殿の位置は、『「参照点」が外部にあるのに対し、内部の、入り口（拝殿）から離れる方』に相当するといえる。

また、この構成は、本殿が人々の『視線の先』にある、ということを強調している。

※1：境内の空間構成において、本殿が「見えにくい」と言った際、「見える」とは、「その存在を目視によって確認できる」という意味であって、見える範囲は問題ではなかった。

ここにおいて言われている「見える」とは、「その全体を確認できる」という意味であって、「見えにくさ」は「見える範囲」に依存している。



図 3.43 本殿の不可視・不可侵



図 3.44 豊受大神宮拝殿



図 3.46 拝殿に対峙する本殿

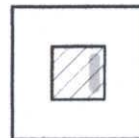


図 3.47 聖域に対する本殿の位置<sup>※2</sup>

※2：図の灰色部分が、本殿の位置にあたる。斜線部が聖域内部、白い部分が聖域外部にあたる。



3.3 「奥」空間の観察のまとめと考察

「奥」空間の位置と性格 神社建築の空間構造			「奥」空間の位置							「奥」空間の性格					
立地構成	山や森への包含・重合関係		●							●	●	●	●		
	川による遮断							●		●	●				
	内部の不可視											●			
境内の空間構成	進行を遮断する要素							●		●	●				●
	複数の屈折点・湾曲部							●			●				●
	後退のなさ								●						●
	行き止まり														●
	聖域の不可視									●		●			
聖域内の空間構成	中央後方配置			●	●										
	床面と軒先の間の垂直距離									●		●			
	暗がりの中の本殿									●	●	●			
	本殿の不可視・不可侵									●	●	●			
	拝殿に対峙する本殿			●											●

前頁に、これまでの観察の結果をまとめ、表にして示した。

この表は、「立地構成」においては境内が、「境内の空間構成」においては聖域が、「聖域内の空間構成」においては本殿が、それぞれ、どのような「位置」にあるのか、また、どのような「性格」を持つのか、抽出した構成ごとに示したものである。

以下、表から見出した点を指摘する。

・神社建築は、様々な、「奥」空間が持ちやすい性格を持っている。

第2章において、数種の、「奥」空間が持ちやすい性格を導き出したが、そのほぼ全てを、神社建築の空間構造は満たしている。

唯一、「遙か遠くのところ」であるという性格のみ、見出すことができなかったが、山中の深い所に立地し、この性格を持っている神社は数多くある。

・観察するスケールによって、「奥」の位置の種類が異なる。

境内は主に、「参照点（外部（街）にあるのに対して、内部（山もしくは森）」という位置の「奥」に相当する。

聖域は主に、「参照点（来訪者のいる位置）がある領域と隣り合う領域の、境界からはなれる方」という位置の「奥」に相当する。

本殿は主に、「参照点（拝殿の手前）が外部にあるのに対し、内部（聖域）の、入り口から離れる方」という位置の「奥」に相当する。

このように、境内は街に対して、聖域は境内に対して、本殿は聖域に対して、それぞれ「奥」にあるものの、それぞれ異なる位置の「奥」である。

・参拝は、知覚する空間を「奥」に広げる行為である。

神社建築は、我々が普段生活する「街」から引き離れた所、という意味での「奥」に建ち、我々の生活領域を引き延ばすようにして存在している。

神社境内において、拝殿をめざす、すなわち、神へと近づくという行為は、「奥に進む」すなわち、「空間的性格が作り出す、断続性を乗り越えてゆく」という行為に重ね合わされる。

拝殿に到達すると、ようやく本殿を見ることができる。

しかし、本殿は、未だ到達できぬ場所であるばかりか、全体をはっきりと見ることすらできぬ、確固とした「奥」である。

拝殿に到達するという事により、更なる「奥」の存在を確認するのである。

「参拝」という行為は、奥へと進む、あるいは、奥を確認することを通じて、「我々の知覚する空間を、豊かに広げゆく」行為なのである。

4.1 研究の成果

4.2 結論

4.3 研究の展望

---

## 第4章 結論

## 4.1 研究の成果

本研究の成果を以下に示す。

### ■「奥」空間の位置の明示

「基準」と「奥」の位置的な関係を分類すること、及び、分類された枠組み内に適合する「奥」の用例を提示すること、を通じて、「奥」空間の位置を明らかにすることができた。

### ■「奥」空間の性格の明示

様々な「奥」の用例を整理し、そこから、「奥」空間が持ちやすい性格を、複数見出すことができた。

### ■「奥」と「他の位置を示す語」の関係の整理

様々な、位置を示す語に対して、奥という語は、どの語と類義語であり、対義語であるのかを、体系的に整理することができた。

### ■「奥」という語を含む形容詞の意味の把握

「奥深い」、「奥床しい」という語が示す、意味を把握し、それを通じて、「奥」の意味に関して、更に論及することができた。

上記の論述を通じて、「奥」とは、どのような空間を示すか、という問いに答えることができた。

### ■神社建築の空間構造における「奥」空間の、複合的なあらわれの確認

7つの代表的な神社建築を観察することによって、神社建築の空間構造において、「奥」空間が、その位置・性格の多様性を持って、複合的にあらわれていることを確認することができた。

## 4.2 結論

「奥」とは、「基準」から引き離れているが、連続している空間であり、なおかつ、「基準」と異なるが、連続している空間である。

つまり、「奥」空間の存在は、空間に、豊かな広がりを与えているのである。

神社建築は、様々な構成をもって、我々に、「奥」を認識させる建築物である。

ここにおいて我々の知覚する空間は、豊かに、広がりゆくのである。

### 4.3 研究の展望

本研究によって、開くことができたと考えられる展望を、以下に示す。  
ここにおいて、本研究の有用性を指摘することができる。

#### ・建築物において「奥」を獲得するための手法の提示

本研究は、「奥とはどのような空間を示すか」という、基礎的、解析的なアプローチであったが、「どのようにしたら奥を作り出すことができるか」という、手法論的、制作論的な論述には至っていない。

本研究を基盤として、建築物、あるいは街並み、都市の構造において、「奥」空間を獲得する手法を提示することができると考えられる。

#### ・建築物の分析における指標として「奥」

本研究において、「奥」という語の意味を、解析的に論じることができた。

ここにおいて、建築物を分析する際の指標として、「奥」、あるいは「奥深さ」という指標を用いることができると考えられる。

#### ・現在我々が生活する空間における「奥」の消失の指摘

「奥」は、我々の空間に広がり豊かさを与えるものである。しかし、現在、我々が生活する空間において、あらゆる人々に、「奥」と認識されるような空間は、消失しつつあるように思われる。

それに伴い、「奥」の意味も、「奥行き方向」などという狭い意味においてしか、用いられなくなっているように思われる。

本研究は、これを指摘するための基盤となりうるものであり、空間的豊かさの消失に対して、有効な歯止めを与える際の引き金となるであろう。

## 参考文献

### ■「奥」の用例の引用：文献

- 伊藤博（著）：萬葉集釋注，集英社，1998
- 秋山虔 他（編）：日本名歌集成，学燈社，1988
- 石田穰二（訳注）：新版 枕草子 上巻・下巻，角川書店，1980
- 阿部秋生（現代語訳）：源氏物語，小学館，1998
- 西澤 他（編）：山家集，和歌文学大系 21，2005
- 川瀬一馬（校註，現代語訳）：徒然草，講談社，1971
- 富士正晴（著）：奥の細道，学習研究社，1979
- 森鷗外<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1992
- 夏目漱石<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1992
- 芥川龍之介<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1991
- 宮沢賢治<ちくま日本文学全集>，筑摩書房，1991
- 谷崎潤一郎：陰翳礼讃，中央公論新社，1975
- 川端康成：雪国，岩波書店，1952
- 安部公房（著）：燃えつきた地図，新潮文庫，1980

### ■「奥」の用例の引用：地図・図面

- 草野和夫（著）：近世民家の成立過程，中央公論美術出版，1995
- 宇杉和夫（著）：日本住宅の空間学，理工図書株式会社，1997
- 京都府教育委員会（編）：日本の民家調査報告書集成，東洋書林，1997
- 富山県土木部建築住宅課（編）：住まいと街なみ百年の歩み，富山県，1983
- 太田博太郎：日本建築史基礎資料集成二十一 民家，中央公論美術出版，1976
- 島村昇：住空間史論 I，京都大学学術出版会，1998
- 山下和正：地図で読む江戸時代，柏書房株式会社，1998

### ■参考文献：「奥」に関して

- 井上充夫：日本建築の空間，鹿島出版会，1969
- 宇佐見英治（著）：迷路の奥，みすず書房，1975
- 槇文彦 他（著）：見えがくれする都市，鹿島出版会，1980
- オギュスタン・ベルク（著）：空間の日本文化，筑摩書房，1985

### ■参考文献：神社に関して

- 岡田米夫：日本史小百科<神社>，東京堂出版，1977
- 福山敏男 他（編）：神社古圖集，臨川書店，1942
- 山内泰明：神社建築，神社新報社，1967
- 臼田甚五郎（監）：新・日本神社 100 選，秋田書店，1990



[スライド 1]

「奥」空間の位置と性格に関する研究

神社建築を対象とした空間構造の分析を交えて  
と題して発表します。

[スライド 2]

「奥」という語を、広辞苑で引くと 11 もの意味があります。

和英辞典では、文脈に応じて異なる、様々な英単語が当てられています。

このように、奥という語は、多角的、状況的な意味を持った語であるといえます。

よって、奥という語は、共通の意味を必ずしも伝えないため、人々の「奥」に対する認識は、ある時は一致し、ある時は異なるのです。

しかし、この語は、日常会話でよく用いられるばかりか、  
建築物の作品分析などにも、ごく頻繁に用いられる語です。

つまり、「奥」は、汎用性が高いが、捉えにくい語であると考えられるのです。

これに基づき、本研究は以下の二点を目的としたものです。

- ・奥という語によって示される、様々な空間を、位置と性格に関して分類し、奥の多角性を、明確な枠組みを持って捉えること、と
- ・分類した奥を、建築物及びその周辺環境の中から見出し、奥の創出に関連する空間的特徴を示すこと、です。

[スライド 3]

一つ目の目的を達成するために、

第二章において、

日本国語大辞典などの辞典が、引用文献としている書物から、奥という語の文例を抽出し、それぞれの文例における奥を、2つの項目において分類して捉えます。

すなわち、「奥」と他の空間の位置的な関係、そして、「奥」が持つ空間的な性格です。

この二つを分類項目とした理由は、辞典において、奥の意味の大半は、位置と、空間的な性格、に関するものであるからです。

二つ目の目的を達成するために、

第三章において、

第二章で分類した「奥」を、神社建築の中から見出します。

神社建築を選定した理由は、広域から狭域の各段階において、多面的に、「奥」の観察を行うことができる、という点、

神社建築は、日本特有であるため、「奥」という日本語が示す空間の、観察対象として相応しい、という点からです。

[スライド 4]

ではまず、奥の位置に関する文例分析について、夏目漱石の『坊っちゃん』における一説を取り上げて説明します。

ここにおいて、『赤シャツ』の位置が『奥』となっていますが、『奥の方[から]おれの顔[を]』というように、『奥』の位置は、『おれ』と照らし合わせて捉えられています。

このように、「奥」と照らし合わせて捉えられている地点を、「参照点」と定義します。

参照点は、文章中の係り結びや、動作の起点や経由点を示す格助詞、などか

ら判断することができます。

また、この文例において、『赤シャツ』と『おれ』は、『ランプ』によって隔てられており、両者は、異なる空間的まとまりに属しています。

このように、「参照点」や「奥」が属する空間的まとまりを「領域」と定義します。スライドの文例において、「奥」の位置は、参照点が属する領域に隣接する領域内の、参照点から離れた方、として理解できます。

[スライド 5]

以上のように、奥の位置は、参照点や領域との関係において、スライドの表のとおり分類できます。

表の横軸は、奥が属する領域と、参照点が属する領域の、位置的な関係を示しており、  
内－外の関係が二種類、隣り合う関係、同一である関係、があります。

縦軸は、奥の、領域内における位置を示したものであり、  
奥が領域の全体であるもの。片側であるもの。中心側であるもの。があります。

枠組みとしては、これらを組み合わせた 12 種類の、奥の位置がありますが、  
(●) この内、7 種類を文例から、数多く見出すことができました。  
包まれた奥。入（はい）り込んだ奥。内奥。出口を出た奥。隣接する奥。境界の向こう側の奥。遠心方向の奥。と名付けます。

これらの奥はいずれも、参照点から離れている、ということが分かります。

[スライド 6]

では次に、奥の性格に関する文例分析について、三島由紀夫の『潮騒』における一説を取り上げて説明します。

ここにおいて、『社の奥』は『暗い』とされています。

『暗い奥』は、この文例以外にも、数多く確認できました。

『明るい奥』も、文例の中にはありましたが、『暗い奥』と比較すると、ごくわずかであったため、『暗い』という空間的な性格は、奥が持ちやすいものであると、判断しました。

このように、

進入し難い奥。暗い奥。見えにくい奥。私的な奥。遙か遠くの奥。進行先、あるいは目線の先の奥。という、6種類の奥を、文例分析を通じて、見出すことができました。

ある奥は、この内の、一種類〔のみ〕に属するとは限らず、複数の種類に属することがあります。

[スライド7]

これらの、奥が持ちやすい空間的な性格は、全て、『進入し難い』『見えにくい』などというように、ある種の「抵抗」を感じさせるものです。

しかし、スライドの文例が示すように、奥は、『なんとか進入できる』『わずかに見える』などと、参照点と連続したものとして捉えられていることがほとんどです。

よって、空間的な性格が作り出す「抵抗」は「参照点」と「奥」を、断絶するものではない、と考えられます。

[スライド 8]

それでは、先程まで分類してきた奥を、神社建築において、観察します。

観察対象とした神社は、皇大神宮、豊受大神宮などの5社であり、これらは、代表的な神社の中でも、境内が広く、街の外れに位置するため、広-狭の各段階において、奥を、多面的に見出すことができる神社です。

広-狭の3つの段階において、奥の創出に関連すると考えられる、空間的特徴を、抽出し、

- (●) 立地構成においては境内が、
  - (●) 境内の空間構成においては神域が、
  - (●) 神域内の空間構成においては本殿が、
- 分類した奥のうち、いずれに相当するのかを示します。

[スライド 9]

観察対象の一例として、皇大神宮を例にして説明を行います。

境内と街は、川によって引き離されています。

この構成によって、「境内」は『境界の向こう側の奥』に相当し、かつ、『進入し難い奥』に相当するといえます。

- (●) また、境内は、山に包まれるようにして存在しています。
- この構成によって、境内は、街から外に出た所、すなわち、『出口を出た奥』に相当し、
- かつ、『暗い奥』、『進入し難い奥』、『見えにくい奥』に相当するといえます。

[スライド 10]

境内には、拝殿や鳥居、トウロウなどといった、アプローチ方向と、直交するように配置された要素があり、これによって、境内は、入り口側と、神域側に二分されています。

ここにおいて、「神域」は、『境界の向こう側の奥』に相当し、かつ、『進入し難い奥』『進行先の奥』に相当するといえます。

(●) また、境内において、屈折点や湾曲部は、数多く見受けられます。これによって、「神域」は、『見えにくい奥』『進入し難い奥』に相当するといえます。

#### [スライド 11]

本殿への視線や動線は、拝殿によって妨げられています。

この構成によって、「本殿」は、『はいりこんだ奥』に相当するとともに、『進入し難い奥』『見えにくい奥』に相当するといえます。

(●) また、本殿の、床面－軒先間の鉛直距離は、非常に狭くなっています。この構成によって、「本殿の正面」は、『見えにくい奥』『進入し難い奥』に相当するといえます。

#### [スライド 12]

スライドの表は、これらの観察をまとめたものであり、横軸の左側に、「奥の位置」の種類を、右側に、「奥の性格」の種類を示し、縦軸に神社建築において抽出した空間的特徴を示し、それぞれ対応するところを黒丸で示したものです。

このように、奥の創出に関連する空間的特徴を、合計 13 抽出し、それらが、分類した奥のうち、いずれと関連しているかを、示すことができました。

[スライド 13]

では、結論に移ります。

・文例分析を通じて、「奥」という語によって示される様々な空間を、「参照点」や「領域」との位置的な関係、そして、空間的な性格、の2項目について分類し、前者については7種の、後者については6種の奥を、捉えることができました。

また、これに基づき、

・神社建築において、境内・神域・本殿が、分類した奥の内、いずれに相当するのかを観察し、奥の創出に関連する空間的特徴を示すことができました。

本研究を基盤として、

都市空間の中に潜在している「奥」の、歴史的な変化を観察することが、可能となるでしょう。

また、歴史を通じて賛美されてきた「奥」を、建築空間の中に創作するための、手法論を構築することが、可能となるでしょう。

以上で発表を終わります。ありがとうございました。

## 「奥」空間の位置と性格に関する研究

－ 神社建築を対象とした空間構造の分析を交えて －

三重大学大学院 工学研究科 建築学専攻 富岡研究室 小林聡

### 研究の目的

1. 「奥」という語によって示される様々な空間を、位置・性格に関して分類し、「奥」の多角性を明確な枠組みを持って捉えること。
2. 分類した「奥」を、建築物及びその周辺環境の中から見出し、「奥」の創出に関連する空間的特徴を示すこと。

・「奥」という語は、多角的・状況的な意味を持った語である。

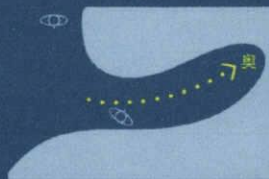
#### 広辞苑における「奥」の定義

- |                          |                             |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1. 内へ入った所。外面から遠い方。       | 6. 左。                       |
| 2. 物事の秘密。深遠で知りにくい所。 心の中。 | 7. 家の内の後方。妻や家族の起き臥しする所。 居間。 |
| 3. 大切にすること。              | 8. 貴人の居室。                   |
| 4. 行く末。将来。               | 9. 貴人の妻の称。                  |
| 5. 物のはて。末尾。最後。           | 10. 奥州（おうしゅう）。みちのく。         |
|                          | 11. 晩稲（おくて）。                |

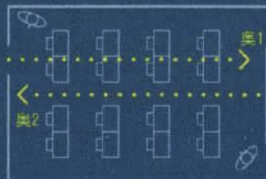
#### 「奥」に相当する英単語の一例

- ・ innermost [最も内部の]
- ・ remote [遠く離れた]
- ・ back [後部の]
- ・ inner [内側の]
- ・ hidden [隠れた]
- ・ secret [秘密の]
- ・ end [果て]

・ 人々の「奥」に対する認識は、ある時は一致し、ある時は異なる。



洞窟における「奥」



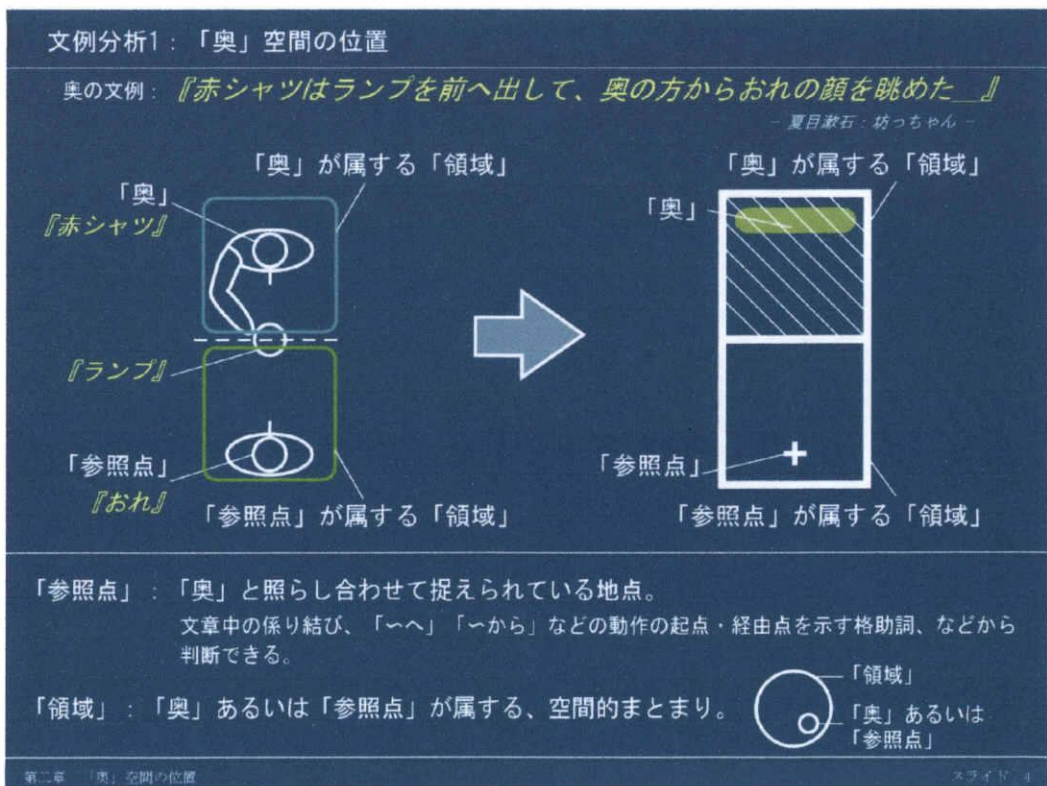
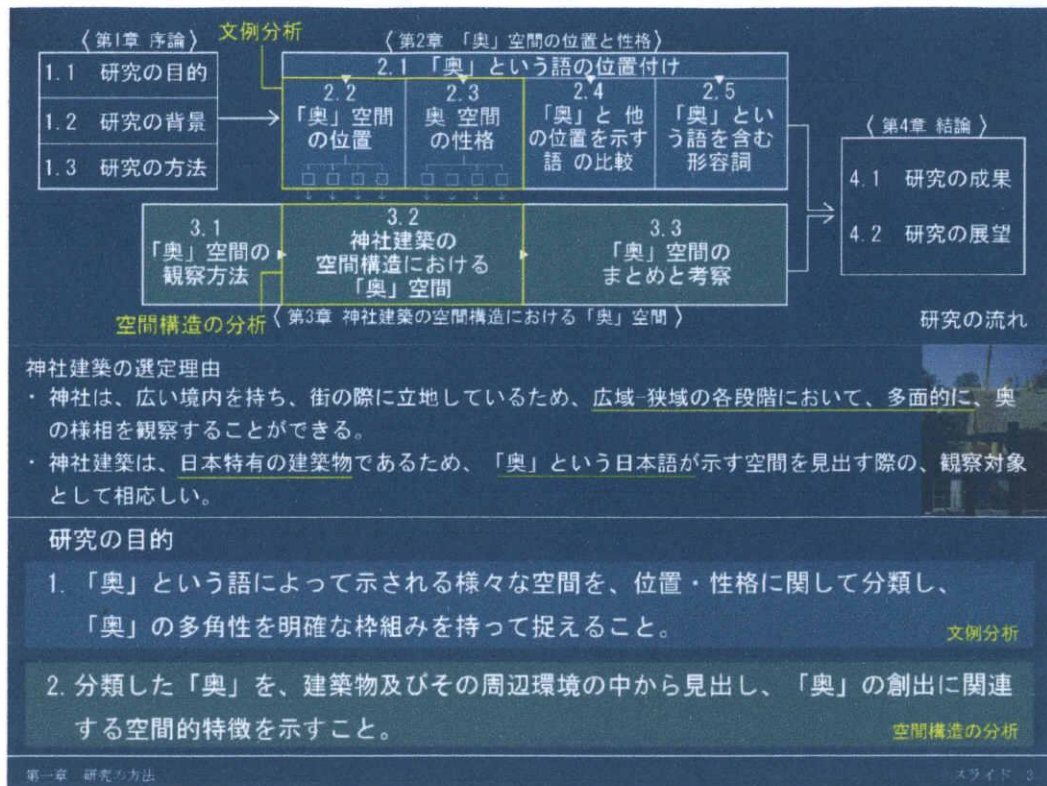
講義室における「奥」

左の、洞窟のような空間においては、「奥」は図の方向として一致するが、右の講義室のような空間では、図のように異なることがある。

### 研究の目的

1. 「奥」という語によって示される様々な空間を、位置・性格に関して分類し、「奥」の多角性を明確な枠組みを持って捉えること。
2. 分類した「奥」を、建築物及びその周辺環境の中から見出し、「奥」の創出に関連する空間的特徴を示すこと。





	i)「参照点」が外に属するのに対し、「奥」空間が内に属する	ii)「参照点」が内に属するのに対し、「奥」空間が外に属する	iii)「参照点」が属する領域と「奥」空間が属する領域が隣り合う	iv)「参照点」が属する領域と、「奥」空間が属する領域が同一
a) 領域の全体が「奥」である場合 				
b) 領域の片側が「奥」である場合 				
c) 領域の中心側が「奥」である場合 				

・「奥」空間の位置は、状況に応じて様々であるが、「参照点」や「領域」との位置関係において、上記の7種類に整理できる。  
 ・「奥」は「参照点」から離れた場所・方向である。  
 ・「奥」は「参照点」が属する「領域」よりも、小さな範囲を示す。

## 文例分析2：「奥」空間の性格

奥の文例：『風がわたって来て、松の梢々はさわいた。社の暗い奥にまで』

— 三島由紀夫・潮騒 —

難	進入し難い奥	進入し易い奥 文例を確認できなかった	易
暗	暗い奥	明るい奥 わずかな文例を確認できた	明
見 <sup>エ</sup>	見えにくい奥	見えやすい奥 わずかな文例を確認できた	見 <sup>エル</sup>
私	私的な奥	公的な奥 わずかな文例を確認できた	公
遙	遙か遠くの奥	近くの奥 わずかな文例を確認できた	近
先	進行先（目線の先）の奥 多くの文例を確認できた。	出発地（視点）の奥 文例を確認できなかった	元



## 文例分析2：「奥」空間の性格

● 難 進入し難い奥

● 暗 暗い奥

● 見<sup>エ</sup>見えにくい奥

● 私 私的な奥

● 遙 遙か遠くの奥

● 先 進行先（目線の先）の奥

「参照点」から、「奥」へ行く、あるいは、「奥」を見るには、空間的な性格による抵抗が働いていると捉えられている。

しかし、「奥」は、「参照点」と、連続したもののとして捉えられている。

例)『あなたが住むならば、甲斐の白根の山の奥だとしても、雪を踏み分けて行かないことがあるうか』  
- 西行：山家集(現代語訳) -

『車の主はずっと奥に引込んでいて、わずかに見える』  
- 紫式部：源氏物語(現代語訳) -



「参照点」から「奥」へは、空間的な性格による「抵抗」が働いているものの、この「抵抗」は、両者を断絶するものではない。



## 観察対象とする神社建築5社



皇大神宮  
(伊勢神宮内宮)



豊受大神宮  
(伊勢神宮外宮)



松尾大社



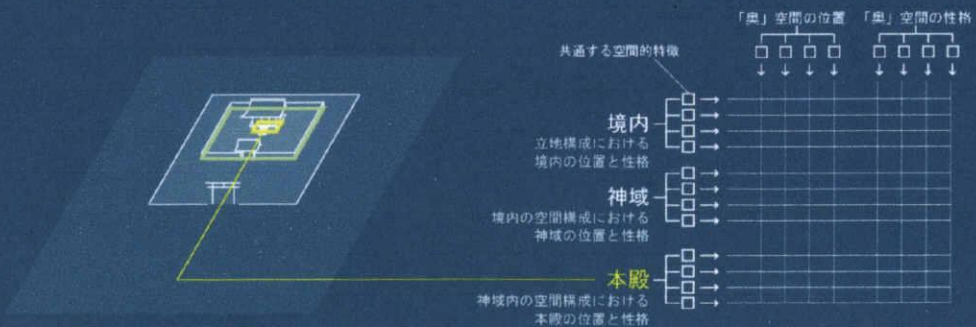
賀茂御祖神社  
(下鴨神社)



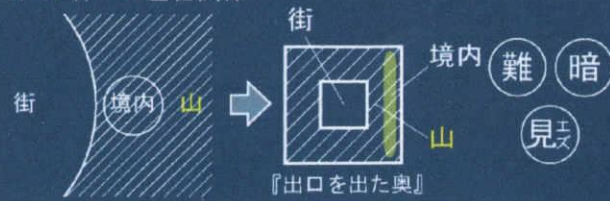
賀茂別雷神社  
(上賀茂神社)

## 観察対象とする神社建築の選定理由

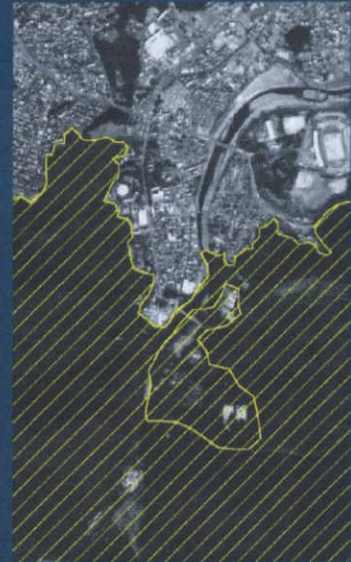
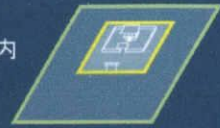
- ・街の外れに位置し、境内が広いもので、広域-境域の、各段階において、奥を観察することができるもの。
- ・歴史を通じて社格が高く、初期に成立した、神社建築の空間構造を代表するに相応しいもの。



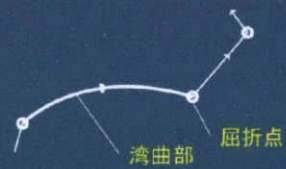
■山や森への包含関係



境内



■複数の屈折点・湾曲部



見え 難 先

神域





■床面と軒先の間の鉛直距離の狭さ

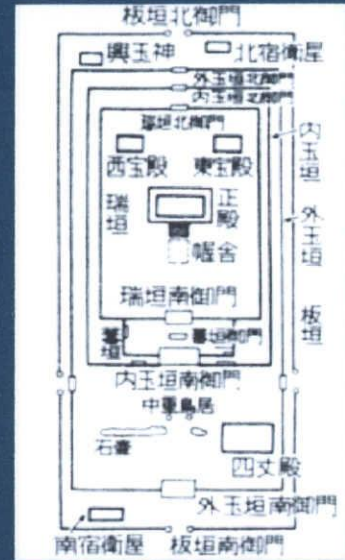
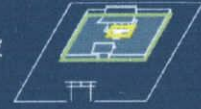


難

見え



本殿



「奥」空間の位置						「奥」空間の性格						
■	□	□	□	□	□	私	難	暗	見え	遙	先	
			●			●	●	●	●			
				●		●	●					
									●			
				●		●	●				●	
				●			●		●		●	
					●						●	
											●	
●							●		●			
	●											
		●					●		●			
●							●	●	●			
			●				●		●			

## 研究の成果

- ・ 文例分析を通じて、「奥」という語によって示される様々な空間を、「参照点」や「領域」との位置的な関係、そして、空間的な特徴、の2項目について分類し、前者については7種の、後者については6種の「奥」を、捉えることができた。
- ・ 神社建築において、境内・神域・本殿が、分類した「奥」のうち、どの種類の「奥」に相当するのかを観察し、「奥」の創出に関連する空間的特徴を示すことができた。

## 研究の展望

- ・ 都市空間の中に潜在している「奥」の、歴史的な変化を観察することが可能となる。
- ・ 歴史を通じて賛美されてきた「奥」を、建築空間の中に創作するための手法論を構築することが可能となる。

清少納言は、『枕草子』において、「奥床しき」ものという節を設けている。

吉田兼好は、『徒然草』の様々な部分で、「奥床しき」ものについて筆を走らせている。

谷崎潤一郎は、『陰翳礼讃』において、「奥深さ」を、美しさをはかる指標の一つとしている。

槇文彦は、『見えがくれする都市』において、望ましき空間の質は「奥性」に依存している、としている。



## 「奥」空間の位置と性格に関する研究

- 神社建築を対象とした空間構造の分析を交えて -

三重大学大学院工学研究科建築学専攻 富岡研究室 小林聡

## 第一章 序論

## 1.1 研究の目的

本研究の目的は以下の2点である。

1. 奥という語によって示される、様々な空間を、位置・性格に関して分類し、奥の多角性を、明確な枠組みを持って捉えること。
2. 分類した奥に相当する空間を、建築物及びその周辺環境の中から見出し、奥の創出に関連する空間的特徴を示すこと。

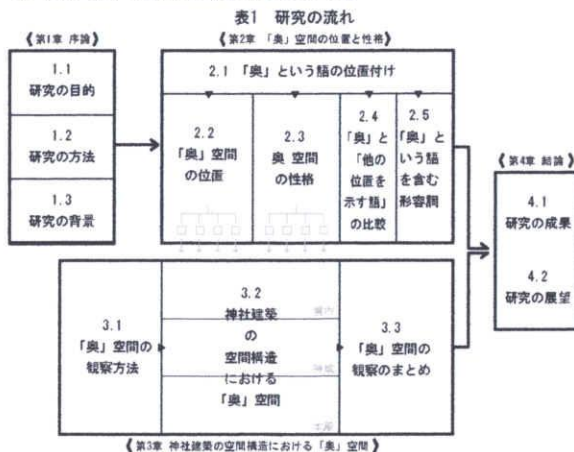
## 1.2 研究の方法

本研究は、序論(第一章)・本論(第二章、第三章)・結論(第四章)によって構成されている。

1つ目の目的を達成するために、第二章では、日本国語大辞典などの辞典において、引用文献とされている書物から、「奥」という語の文例を抽出する。そして、[奥と他の空間の位置的な関係]及び、[奥が持つ空間的な性格]の2項目を観点とし、奥という語によって示される空間を、分類して捉える。

この分類をもとに、「奥」の類義語、対義語を整理するとともに、「奥深い」「奥床しい」などという語の意味を明らかにする。

2つ目の目的を達成するために、第三章では、第二章において分類した「奥」に相当する空間を、神社建築の中から見出し、「奥」の創出に関連すると考えられる、空間的な特徴を示す。



## 1.3 研究の背景

◆「奥」という語は、多角的・状況的意味を持つ。

広辞苑によると、奥とは、「内へ入った所」「深遠で知りにくい所」「行く末」、など様々な意味を持つ。また英訳の際、「奥」には、remote[遠く離れた]、back[後部]、inner[内側]などと、意味の異なる様々な語をあてられる。

このことから、「奥」の意味は多様であり、かつ、状況に応じて異なる、ということが分かる。

◆「奥」の認識は、時に一致し、時に異なる。

下に2つの空間(左:洞窟,右:講義室)を示した。

洞窟の場合について、洞窟の内部にいる人が、外部にいる人に、「奥に何かある。」などというとき、二人の「奥」に対する認識は、図に示す方向として一致するであろう。

これに対して、講義室においては、入り口付近で、「奥からつめて下さい。」などという席の案内もあれば、「そんな奥にいずれもっと前にどうぞ。」などという講演者もある。この時、「奥」に対する認識は異なっているのである。

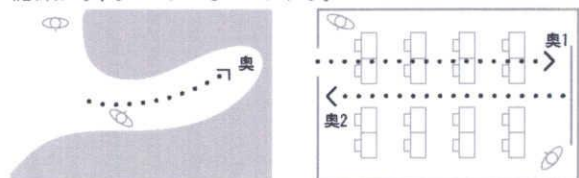


図1 洞窟における「奥」

図2 講義室における「奥」

◆日本人は「奥」を愛でる心を持っている。

清少納言や吉田兼好は「奥床しきもの」について筆を走らせ、谷崎潤一郎は「奥深さ」を賛美し、槇文彦は、都市・建築空間に潜む「奥性」が、空間の質を向上させるとしている\*1。

つまり、日本人は、古くから現在まで、「奥」を愛でる心を普遍的に持ち続けてきたのである。

このように、「奥」は、捉えにくい語ではあるが、我々は、「奥」という空間を賛美してきた。

## 第二章 「奥」空間の位置と性格

### 2.1 「奥」という語の位置付け

奥という語の文例分析に先立ち、前・右・表・中などの、位置に関連する語には、どのような種類があるのか整理を行う。

そして、その中で、「奥」という語は、どのような語群に属するのかを明らかにする。

#### ■[構造的な位置]・[絶対的な位置]を示す語群

前・後・表・裏などは、他との関係において決定される位置であると考えられる。それは、これらの語は、「建物の前に」などというように、他の語を伴って表れてくるからである。このような語群を[構造的な位置]を示す語群と名付ける。

これに対し、北・上・内部・中心などは、他の語を伴わずに、単独で現れることが多い。このように事物による影響を受けず、どのような条件下においても変化しない位置を、[絶対的な位置]と名付ける。

このうち、奥は、「外面から遠い方」、「家の内の後方」などとされることから、[構造的な位置]を示す語であると考えられる。

#### ■[方向]・[場所]を示す語群

右・左・上・下などは、基本的に、[方向]を示す語である<sup>※2</sup>。これに対し、表・中心・外部などは、[場所]、つまり、実体を持った空間的まとまりを示す。

奥の意味が、しばしば「一方」とされること(これは[方向]を示している)、また、「奥に入る」「奥はひっそりとしている」などという用例があること(これは[場所]を示している)<sup>※3</sup>、から、「奥」は、[方向]も[場所]も示す語であると考えられる。

表2 「奥」という語の位置付け

	構造的な位置	絶対的な位置
方向	前・後・右・左など	北・東・上・下など
場所	表・中・裏など	内部・外部・中心・境界など

※灰色で示す部分が、「奥」という語が属するところ

このように、位置に関する語を上のような表のとおり整理することができる。「奥」という語は、表の灰色で示す部分に属すると考えられる。

よって、「奥」の位置は、他の空間との位置的な関係に着目して分類することとする。

### 2.2 「奥」空間の位置

奥という語は、[構造的な位置]を示すため、奥の位置を分類する際、以下の2つの要素に着目した。

**参照点**：文章中の係り結びや、「一から」、「一へ」などの格助詞によって、「奥」という語と結びつけて説明されている、「奥」の位置を決定していると考えられる主要な要素の位置。

**領域**：「参照点」あるいは「奥」が属する、空間的まとまり。



以下に、文例分析の一例を挙げて説明する。

『赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺めた』

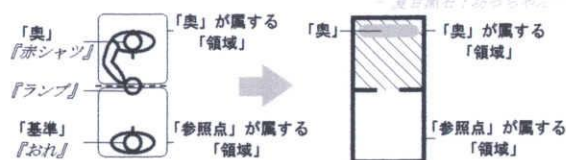


図3 「奥」空間の位置 [上記の文例から想像される空間的状況]

この用例において、『赤シャツ』が『奥』にいたのだが、基準は『おれ』の位置であると考えられる。それは『奥の方からおれの』というように、格助詞で結びつけられていることから判断できる。

また、『ランプ』を境にして、『おれ』側が「参照点」が属する領域で、『赤シャツ』側が『奥』が属する領域であるといえ、「奥」の位置は、上図右側のようなものであると理解できる。

このように、奥を「参照点」や「領域」との位置関係について、下表の枠組みをもって整理したところ、7種類の文例を数多く見出すことができた。

表3 「奥」空間の位置

	i) 「参照点」が外に属するのに対し、「奥」が内に属するもの	ii) 「参照点」が内に属するのに対し、「奥」が外に属するもの	iii) 「参照点」が属する領域と、「奥」が属する領域が隣り合うもの	iv) 「参照点」が属する領域と、「奥」が属する領域が同一のもの
a) 領域の全体が「奥」である	包まれた奥	包まれた奥	隣接する奥	隣接する奥
b) 領域の片側が「奥」である	入り込んだ奥	出口を出た奥	境界の向こう側の奥	遠心方向の奥
c) 領域の中心側が「奥」である	内奥	内奥	内奥	内奥

※1 白い部分：「参照点」が属する領域  
斜線の部分：「奥」が属する領域

※2 表中の、灰色で塗りつぶされた部分は、見あう用例が見つからなかったところを示す。



表4 「奥」空間の位置

モデル図	「奥」空間の位置(上部)、及び、代表的な文例(下部)
	「参照点」が外部に属するのに対し、内部 ぼくらは、ちょうど、片屋根の突き当たりの倉庫の前に着いている。―― 「ちよっと、奥を、のぞいてみるか……。」 ― 安部公房：鶴を飛ばした地区 夫達は今でも残っている此店の前に立ち留まって、檐に高く吊つてある鰻焼や泰吉丁の籠、下に置き並べてある白湯の朝鮮焼の籠などを眺めて、それから奥の方に幾段にも積み重ねてある小鳥の籠に目を移した。 ― 森田孝之：座 「参照点」が外部に属するのに対し、内部の、入り口から離れる方 若者はそこから声をかけた。奥さんは戸をあけた。――奥さんは高い声でこう呼んだ。「お父さん、久保さんがお魚を」奥から壁台長の声がかう応えた。「いつもいつもありがとうございます。まあ上がってゆきなさい、新治君」 ― 三島由紀夫：潮騒 下簾もかけない草の、簾を高々とまきあげてあるので、奥まで差し込んだ月の光に、 ― 津和野：枕草子
	「参照点」が外部に属するのに対し、内部の中心側 自然科店の手前で車を停める。 軒の端から奥に向かって、戸外用の照明燈がともされた以外には、風景に何の変化も見られない。 ― 安部公房：鶴を飛ばした地区 あの、妙に薄曇りのした、――奥の奥の方までどろんとした鈍い光を含む石のかたまりに魅力を感じるのは、 ― 谷崎潤一郎：妹背山
	「参照点」が内部に属するのに対し、外部の、出口から離れる方 泉をかこむ木立の奥で鳥が啼いている。 ― 三島由紀夫：潮騒 土間をかこむ部屋は暗いが、奥の部屋のまんなかに、感からうこんの風呂敷程の日ざしがぐっきりと落ちている。 ― 三島由紀夫：潮騒
	「参照点」が属する領域と隣り合う領域 (宮)「私を愛してくれるかしら」とお尋ねになる御返事に、(津)「それはもう」と申し上げた途端に、台盤所の方で誰かが声高く、くしゃみをしたので、(宮)「まあいやだ。――」とおっしゃって、奥におはいりになってしまった。 ― 津和野：枕草子 目を閉じて、雪はその閉じた目の奥で、降りつづいている。 ― 安部公房：鶴を飛ばした地区
	「参照点」が属する領域と隣り合う領域の、境界から離れる方 大比叡や 金ひえの奥の さざなみの 比良の高根ぞ 霞みそめたる 歌意：大比叡山、小比叡山のその奥の滋賀の比良山の高根が今日は霞み初めているではないか。春がやって来ている。 ― 香川真澄 ボシャツをランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺めたが、 ― 夏目漱石：坊っちゃん
	ある領域内における、「参照点」から遠ざかる方 男はからかって簾の中に半身乗り出すと、――一方(女)は、すこし接近しすぎるのじゃないかしらと、胸が騒いで、思わず奥の方に体を引っ込める。 ― 津和野：枕草子 その家では襦をきかしている女房が、物陰から覗き、すきをうかがうふうで、奥の方をうろろうしているのを、婿君の前にはべっている女房は、嫌子を心得て笑うのを、 ― 津和野：枕草子

※ 1 白い部分：「参照点」が属す領域  
斜線の部分：「奥」が属す領域



#### ◆「奥」という語は空間を示す。

「奥」が場所を示す語として用いられる場合、それは、空間(あるいは空間の一部)を示すのであって、物体の内部を示すことはごく稀である。

「奥」が、物体の内部(あるいは実体を持たない「心」など)を示す場合、それらは抽象的に、空間、あるいは空間の一部として扱われているのである<sup>※5</sup>。

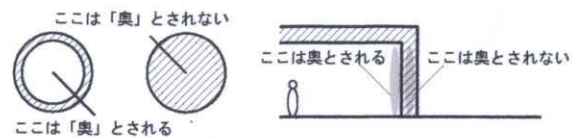


図5 「奥」は空間を示す

#### ◆奥と参照点の距離は何らかの限界の距離である。

例えば、「廊下の奥」などと言うとき、多くの人、廊下の突き当たりを思い浮かべ、廊下の途中を思い浮かべる人は、限りなく少ないと考えられる。

分析した文例においても、奥が、領域の中心もしくは片側などといった何らかの限界であって、これ以外の場所を示す文例は、ごくわずかであった。

上の表に示すとおり、「奥」を「参照点」・「領域」との位置的な関係において分類した所、7種類の奥を確認する事ができた。これらの奥の共通点を以下に示す。

#### ◆「奥」の位置は、状況に応じて様々である。

表に示すとおり、「奥」の位置は多様で、参照点がどこにあるか、または、領域内のどの範囲を示すかによって異なる。

#### ◆「奥」とは、限定された範囲である。

例えば、奥は、「参照点」の外の一部をさすことはあっても漠然と外全体をさしたりはしない。このように、「奥」は、ある限定された範囲を示す。

#### ◆「奥」は「参照点」から離れている。

多くの場合、奥が属する領域と、基準が属する領域は異なる。このため、奥へ方向は、求心的な方向、というよりも、遠心的な方向、とするのが適切であろう。

表5 「奥」空間の性格

簡略記号	特定の空間的性格を持った奥(上部)、及び、その代表的文例(下部)
私	私的な奥 そういう連中が賀茂の祭りを見物した様子は、まことに珍妙であった。「来るのがとてもおそいな。待ってる間は寝敷にいても、無駄だ。」と言って、奥の部屋で酒を飲んだり物を食ったり、葎だの双六だのをやって―― 「人様にどうご挨拶申し上げたらよいのか、分らないのですから」と言って、奥の方へ後ずさりしなされる姿は、まったく世なれぬ有様である。 <sup>*6</sup>
難	進入し難い奥 君住まば 甲斐の白根の 奥なりと 雪路み分けて 行かざらめやは <sup>*7</sup> 歌意：あなたが住むならば、甲斐の白根山の奥だとしても、雪を踏み分けて行かないことがあろうか、私は行くよ。 奥閑こうより口開け：(相手の心の奥は、深く聞いたすまでもなく、ちょっとしたことばのはしで知られるといところから)物事の真相は手近なことからわかるものだ、の意。
暗	暗い奥 風がわたって来て、松の梢々はさわいた。社の暗い奥にまで、そのとき吹き入った風が森鬱な響きを立てた。海神は若者の祈りを嘉納したように思われた。 私はやにわに遺戸を開け放して、月明かりのとどかない奥の方へおどきもいと致しました。
見え	見えにくい奥 車の主はずっと奥に引込んでいて、わずかに見える袖口、裳の裾、かざみなど、それらの色合いもまことに―― 女は美にその常闇の夜の奥の方に隠れていて、昼間は姿を見せる事がなく、ただ「夢ばかりなる」世界にのみ幻影の如く現れる。
遙	遙か遠くの奥 山は奥深いようすで、谷沿いの道が遙かに続き、松や杉がうつそうとして、苔がしたたり落ち、四月というのに今なお寒々としている。 大比叡や をひえの奥の さざなみの 比良の高根ぞ 霞みそめる <sup>*8</sup> 歌意：大比叡山、小比叡山のその奥のさざなみの比良山の高根が今日は霞み始めているではないか、雲がやって来ている。
先	進行先(目線の先)の奥 其の家は湯島切通しから、岩崎邸の裏手へ出る横町で、曲がりくねった奥にある。 ある里山を尋ねて行ったことがあったが、はるかな昔の細道を踏み分けた奥に、ひっそりと住まっている者があった。

### 2.3 「奥」空間の性格

書物の文例における「奥」は、どのような空間的な性格を持ちやすいか調べた所、「私的な」「暗い」等、上記の6種類の、「奥」が持ちやすい空間的な性格を見出すことができた。

#### ■「奥」空間が持ちやすい、各性格どうしの関係

ある「奥」が2つ以上の性格を持つことは、数多くある。例えば、「暗くて進入し難い奥」を文例において数多く確認することができた。つまり、「暗い奥」と「進入し難い奥」は重なり合いやすいと考えられる。

逆に、「私的で遙か遠くの奥」は文例において見出すことができなかったため、両者は重なりにくいと考えられる。

下図に、各性格どうしの重なりやすさを示す。

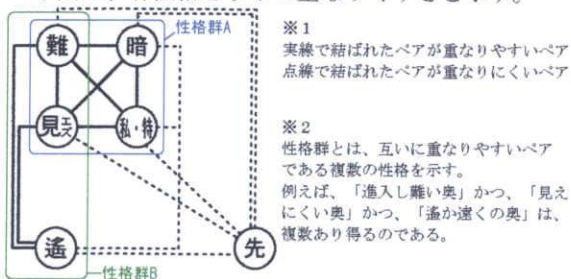


図6 「奥」空間の各性格どうしの結束性

#### ■「奥」空間の性格と「奥」空間の位置の関係

ある性格を持つ「奥」の集合は、先程分類した、ある位置の「奥」のいずれかと重なりやすい。

この事を下図を用いて示す。

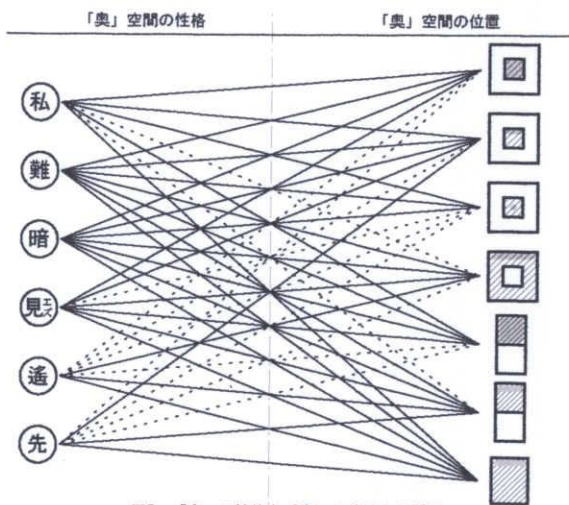


図7 「奥」の性格と「奥」の位置との関係

この図から、「進入し難い奥」「暗い奥」「見えにくい奥」は、様々な種類の位置に相当するのに対し、「遙か遠くの奥」「進行先(目線の先)の奥」は、限られた種類の位置にしか相当しない、ということが分かる。







### 第三章 神社建築の空間構造における「奥」空間

#### 3.1 「奥」空間の観察方法

##### ■神社建築の選定理由

- ・広域から狭域の各段階において、多面的に、奥を観察することができる。
- ・日本特有の建築空間であるため、「奥」という日本語が示す空間を観察する対象として相応しい。
- ・神社の参拝は、我々の共有する空間体験である。

以上の点から、神社建築を、「奥」の様相を観察する対象として、選定した。

##### ■観察対象とする神社建築とその選定理由

皇大神宮（伊勢神宮内宮）、豊受大神宮（伊勢神宮外宮）、松尾大社、賀茂御祖神社（下鴨神社）、賀茂別雷神社（上賀茂神社）、の5社を観察対象とする。選定理由は以下のとおりである。

- ・境内が広く、街の外れに立地しており、広-狭の各段階において奥を観察できるもの。
- ・歴史を通じて社格が高く、初期のものであるなどという理由から、「神社建築」の空間構造を代表する神社として相応しいもの。<sup>\*1</sup>

##### ■観察の方法と流れ

下表のような枠組みにおいて観察を行う。

神社建築の空間構造を、全体から部分まで大まかに俯瞰できる、3段階に分け、それぞれの視点から、観察対象とする神社建築が共通に持つ、奥に関連すると思われる、空間的特徴を抜き出す。

各空間的特徴において、以下の点を観察する。

[立地構成:街に対する境内の位置・性格]

[境内の空間構成:境内における神域の位置・性格]

[神域内の空間構成:神域における本殿の位置・性格]

表6 神社建築の空間構造における「奥」空間の観察 [観察の枠組み]

		「奥」空間	
		「奥」空間の位置	「奥」空間の性格
		↓ ↓ ↓ ↓ ↓	↓ ↓ ↓ ↓ ↓
神社建築の空間構造	境内 立地構成における境内の位置と性格	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○
	神域 境内の空間構成における神域の位置と性格	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○
	本殿 神域内の空間構成における本殿の位置と性格	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○

#### 3.2 神社建築の空間構造における「奥」空間の観察

##### [立地構成]

##### ◆山への包含・重合関係

神社の境内は、山や森に包まれるようにして、あるいは、重なり合うようにして存在している。

ここにおいて、境内は、『出口を出た奥』に相当するとともに、『私的な奥』『暗い奥』『見えにくい奥』に相当する。

##### ◆川による遮断

神社境内に行くには、手前の川を渡る必要があることが多い。

川は、街を内と外に引き離す要素である。よって境内は、『境界の向こう側の奥』に相当するとともに、『私的な奥』『進入し難い奥』に相当するといえる。

##### ◆内部の不可視

神社手前からその内部の大まかな様子をうかがえることは稀である。ここにおいて、境内は『見えにくい奥』に相当するといえる。

山中に立地される建物である城や寺が、街にその存在を確固として示していることを考慮すると、神社は、これらの建築物とは大きく性格の異なるものであるということを描き出せる。

##### [境内の空間構成]

##### ◆複数の進行を遮断する要素

境内には、進行方向と直交するように拝殿や鳥居、対になった狛犬、灯籠などが配され、境内は、入り口側と聖域側に二分される。よって神域は、『境界の向こう側の奥』に相当すると共に、『進入し難い奥』『私的な奥』『進行先の奥』に相当するといえる。

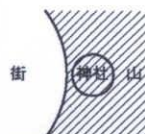


図18 モデル図



図19 皇大神宮の例



図20 『出口を出た奥』



図21 モデル図



図22 皇大神宮の例

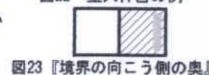


図23 『境界の向こう側の奥』



図24 モデル図



図25 神社のたたずまい



図26 城のたたずまい



図27 寺院のたたずまい



図28 モデル図



図29 皇大神宮の例

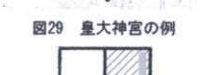


図30 『境界の向こう側の奥』

### ◆複数の屈折点・湾曲部

「進行を遮断する要素」の付近に屈折点がとられることが多い。これは神域が『境界の向こう側の奥』に相当するということを修飾している。さらに、この構成によって、神域は、『進入し難い奥』『見えにくい奥』『進行先の奥』に相当するといえる。



図31 モデル図



図32 皇大神宮の例

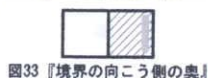


図33 『境界の向こう側の奥』

### ◆後退のなさ

アプローチは、水平面において、常に神域に近づく方向であり、かつ、鉛直軸においても、下ることではないため、常に神域に近づく方向である。

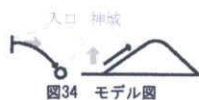


図34 モデル図



図35 『遠心方向の奥』

よって、神域は、『遠心方向の奥』に相当するとともに、『進行先の奥』に相当するといえる。

### ◆行き止まり

神域は、アプローチ空間の経過点に存在することはなく、常に、行き止まりに存在する。

ここにおいて、神域は『進行先の奥』に相当するといえる。

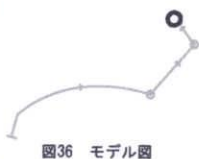


図36 モデル図

例えば、皇大神宮において、正殿のある神域へと進む道は、他の付属的な社へと進む道と、ずいぶん手前で分けられている。



図37 皇大神宮の例

### ◆神域の不可視・不可侵

神域の、存在及び位置は、拝殿を見ることによって確認される。

拝殿は、境内内部に入ってからずいぶん進んだ後によく見えるものである。ここにおいて、神域は『見えにくい奥』『進入し難い奥』に相当するといえる。

さらに、神域内は進入が許されていないため、『包まれた奥』に相当するといえる。



図38 モデル図



図39 『包まれた奥』

### [神域内の空間構成構成]

### ◆中央後方配置

神域内において、本殿は右図のように、神域内において、中央後方に配置される。これは、『境界の向こう側の奥』に相当するといえる。



図40 モデル図

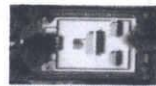


図41 皇大神宮の例



図42 『境界の向こう側の奥』

### ◆床面と軒先の間の鉛直距離

本殿の床面は地面から1m程度上がった所にあり、軒先は低い。よって、床面と軒先の間の鉛直距離は非常に狭くなっている。



図43 モデル図



図44 皇大神宮の例

ここにおいて本殿正面は『見えにくい奥』『進入し難い奥』に相当するといえる。

### ◆暗がりの中の本殿正面

本殿と拝殿の間を、屋根を持った通路で繋ぐ神社、あるいは本殿と拝殿が接続している神社は多くある。また、本殿の軒は深い。よって、本殿の正面は『暗い奥』に相当し、『進入し難い奥』『見えにくい奥』に相当するといえる。



図45 モデル図

### ◆本殿の不可視・不可進

拝殿の口が狭く奥行きが長いこと、拝殿の垂れ幕、などにより、本殿の大部分を見ることはできない。また、本殿は、進入が許されていない『包まれた奥』に相当するといえる。このように本殿は、『見えにくい奥』『進入し難い奥』に相当するといえる。



図46 モデル図



図47 皇大神宮の例



図48 『包まれた奥』

### ◆拝殿によって妨げられる視線と動線

神域内への視線や動線は、拝殿によって妨げられている。ここにおいて本殿は、『入り込んだ奥』に相当するとともに、『進入し難い奥』『見えにくい奥』『目線の先の奥』に相当するといえる。

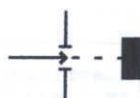


図49 モデル図



図50 『入り込んだ奥』



### 3.3 「奥」空間の観察のまとめ

以上、神社建築の空間構造から、奥に関連する空間的特徴を抽出し、第二章において分類した奥のうち、どの種類に相当する奥が作り出されているのかを観察することができた。これを下表にまとめて示す。

表7 「奥」空間の位置 ※ ●は、境内、あるいは神域、あるいは本殿が相当する位置、性格を示す。

神社建築の空間構造	「奥」空間の位置と性格	「奥」空間の位置							「奥」空間の性格					
									私	難	暗	見え	遙	先
立地構成	山への包含・重合関係				●				●	●	●	●		
	川による遮断					●			●	●				
	内部の不可視											●		
境内の空間構成	複数の進行を遮断する要素					●			●	●				●
	複数の屈折点・湾曲部					●				●		●		●
	後退のなさ							●						●
	行き止まり													●
	神域の不可視・不可侵	●								●		●		
神域内の空間構成	中央後方配置				●									
	床面と軒先の間の鉛直距離								●			●		
	暗がりの中の本殿								●		●	●		
	本殿の不可視・不可侵	●							●			●		
	拝殿によって妨げられる視線と動線				●				●			●		●

## 第四章 結論

### 4.1 研究の成果

本研究の為した成果を以下に示す。

◆文例分析を通じて、「奥」という語によって示される様々な空間を、「参照点」や「領域」との位置的な関係、そして、空間的な性格、の2項目について分類し、前者については7種の、後者については6種の奥を、捉えることができた。

◆「奥」という語の対義語や類義語を、示すことができた。

◆「奥深い」「奥床しい」という語が示す意味について論及することができた。

◆神社建築において、分類した「奥」に相当する空間が存在すること観察し、奥に関連する空間的特徴の一端を抽出することができた。

### 4.2 研究の展望

歴史を通じて、人々に賛美されてきた「奥」の空間的特徴が明らかにされれば、この「奥」を意識的に制作するための手法論を構築することが可能となるであろう。

また、「奥」の様相を観察する方法論がより正確となれば、都市空間等における「奥」の減少を測定することが可能となり、それに有効な歯止めを与えることが可能となるであろう。

このような発展的な研究の基盤として、本研究は有用であると考えられる。

#### 第三章・第四章の註及び参考文献

- \*1:選定した神社はいずれも、『二十二社(平安時代の社格)』において上社もしくは中社に属し、『延喜式(927年)』において式内社に属し、『旧社格(明治4年一戦後)』において、神宮もしくは官幣大社に属するものであり、歴史を通じて社格が非常に高かった神社である。さらに、いずれも、飛鳥時代よりも前に成立したとされているものであり、大體文化が入り込む以前の初期のものである。
- \*2:横文彦は『見えがくれする都市』において、「奥性」は都市空間に「望ましき質」を与え、その「奥性」は現在失われる傾向にある、としている。
- 【参考文献】『九鬼周造(著)：「いき」の構造、岩波文庫、1979』『宇佐見英治(著)：迷路の奥、みすず書房、1976』『横文彦 他(著)：見えがくれする都市、鹿島出版会、1980』『オギュスタン・ペルク(著)：空間の日本文化、筑摩書房、1985』